

THE INTERNATIONAL OLYMPIC COMMITTEE – ONE HUNDRED YEARS

国際オリンピック委員会の百年

The Idea - The Presidents – The Achievements

理念—会長—事績

II

ジークフリード・エドストレーム会長の時代（1942–1952）

カール・レンナルツ著

アベリー・ブランデージ会長の時代（1952–1972）

オットー・シャンツ著

穂積 八洲雄 訳

国際オリンピック委員会

ローザンヌ 1994 年

【翻訳版 PDF ご利用にあたってのお願い】

本 PDF ファイルのコンテンツは、IOC による「国際オリンピック委員会の百年」第 2 巻の和訳版であり、NP0 法人日本オリンピック・アカデミー（JOA）会員の穂積八洲雄氏のご厚意により、氏が IOC から著作権を許諾され、翻訳された作品を JOA 公式ホームページ上にデジタルファイルとして公開するものです。

本文を参照または引用される場合は、NP0 法人日本オリンピック・アカデミー公式サイト（<http://www.olympic-academy.jp>）デジタル・ライブラリー掲載、「国際オリンピック委員会の百年 第 2 巻」（穂積八洲雄訳）●●ページ等の文献註を付記していただくようお願いいたします。

【訳者による人名表記についての注記とお願い】

人名については世界各国の人物が登場し、英語版からだけでは正確な表記が分からない人も多くいます。日本でも知られている人については国士舘大学田原淳子先生、中京大学來田享子先生、とくに第 2 巻 1 章については東海学園大学の木村華織先生にご相談しましたが、その他の人については「国際オリンピック委員会の百年」の著者の一人で現在コブレンツェランドウ大学スポーツ科学研究所所長のオットー・シャンツ博士に聞き、訳者がカタカナで表記したものです。IOC 関係者のあいだではこのように呼ばれているということですが外国人名表記についてはいろいろ難しい問題があります。識者のご指摘をいただいて改善できればと思っています。

英語版第 1 巻 ISBN 92-9105-007-5

英語版第 2 巻 ISBN 92-9105-010-5

英語版第 3 巻 ISBN 92-9105-012-1

1894-1994 - THE INTERNATIONAL OLYMPIC COMMITTEE -
100 Years - The Idea - The Presidents - The Achievements

Volume 2 English

英語版 著作権 国際オリンピック委員会 1994

和訳版 著作権 穂積八洲雄

NP0 法人日本オリンピック・アカデミー公式サイトにおける PDF ファイル公開

第 2 巻 1 章：2019 第 2 章：2012

国際オリンピック委員会の百年 II

目 次

1. エドストレーム会長の時代 (1942-1952)	6
1.1. 第二次世界大戦中の IOC	6
1.1.1. エドストレーム IOC 会長代行となる	6
1.1.2. IOC 創立 50 周年記念日	7
1.1.3. オリンピック活動再開	9
1.2. ジークフリード エドストレーム	10
1.2.1. 経歴と最初の主な要職	10
1.2.2. IOC 委員としてのエドストレーム	13
1.3. エドストレーム会長の下の IOC	16
1.3.1. 委員	16
1.3.2. 執行委員会 (EC)	17
1.3.3. オリンピック憲章	18
1.3.4. アマチュアリズムの問題	21
1.4. ドイツの再承認とドイツ分割の問題	24
1.4.1. 1948 年ロンドンにおけるドイツ参加の企て	24
1.4.2. 招待と取り消し	29
1.4.3. ドイツ NOC の設立と承認	30
1.4.4. 二つのドイツの歩み寄りの難しさ	35
1.5. IOC と冷戦の始まり	37
1.5.1. ソビエト社会主義共和国連邦 (USSR)	37
1.5.2. 東ヨーロッパ	40
1.5.3. 中国	42
1.6. オリンピック大会	45
1.6.1. ロンドンとサンモリッツ、1948 年	45
1.6.2. ヘルシンキとオスロ、1952 年	47
1.7. 地域大会	50
1.7.1. 第二次世界大戦後の地域大会	50
2. アベリー・ブランデー会長の時代 (1952-1972)	55
2.1. アベリー・ブランデー	55
2.1.1. シカゴにおける子供時代と思春期	55
2.1.2. 経営者、実業家	56

2.1.3. スポーツマン	56
2.1.4. スポーツ界のリーダー	57
2.1.5. 頑固で理想主義的な一匹狼	58
2.2. アベリー・ブランデーのオリンピック理念	59
2.2.1. クーベルタンの知的遺産の相続	60
2.2.2. ブランデーのオリンピックの基本理念における目的と価値	62
2.2.2.1. 人間の完成についての考え方	62
2.2.2.2. オールラウンダーの理想	62
2.2.2.3. 芸術への貢献	63
2.2.2.4. 性格を養う場としてのスポーツ	63
2.2.2.5. “スポーツの宗教”	64
2.2.2.6. 平和の理想	65
2.2.2.7. オリンピックの独立	66
2.2.3. “マチュアリズムの哲学”	66
2.3. IOC の世界政治へのかかわり	70
2.3.1. “冷戦”	71
2.3.1.1. ドイツ問題	72
2.3.1.2. ザール問題	78
2.3.1.3. 中国問題	78
2.3.1.4. 朝鮮問題	84
2.3.2. アパルトヘイト問題	87
2.3.2.1. 南アフリカ問題	88
2.3.2.1.1. 南アフリカのスポーツ政策	88
2.3.2.1.2. 南アフリカとオリンピックムーブメント	90
2.3.2.2. ローデシア問題	102
2.3.3. 独立の動き	110
2.3.3.1. 非同盟諸国	110
2.3.3.2. 地域大会	111
2.3.3.2.1. ガネフォ大会	114
2.3.3.3. ミュンヘンの悲劇	118
2.4. IOC の構造と内部政治	120
2.4.1. IOC 内の力関係の変化	120
2.4.2. IOC 行政部門の改革	130
2.4.3. 初期“オリンピックソリダリティー”の困難	132
2.4.4. IOC の資金調達	135
2.4.5. アマチュア問題	141

2.4.6. ドーピングの禍	150
2.4.7. 国際オリンピックアカデミー	155
2.5. オリンピック大会の組織と実施	157
2.5.1. オリンピック大会の発展	157
2.5.2. 第16回オリンピックアードの大会	160
2.5.2.1. 1956年コルチナダンペッツォ冬季大会	160
2.5.2.2. 1956年メルボルンオリンピック大会	160
2.5.3. 第17回オリンピックアードの大会	163
2.5.3.1. 1960年スコーバレー冬季大会	163
2.5.3.2. 1960年ローマオリンピック大会	163
2.5.4. 第18回オリンピックアードの大会	164
2.5.4.1. 1964年インスブルック冬季大会	164
2.5.4.2. 1964年オリンピック東京大会	165
2.5.5. 第19回オリンピックアードの大会	167
2.5.5.1. 1968年グルノーブルオリンピック冬季大会	167
2.5.5.2. 1968年メキシコシティオリンピック大会	167
2.5.6. 第20回オリンピックアードの大会	169
2.5.6.1. 1972年札幌オリンピック冬季大会	169
2.5.6.2. 1972年ミュンヘンオリンピック大会	169

ジークフリード・エドストレーム会長(1942－1952)の時代

カール・レンナルツ

カール&リーゼロット・ディエム資料館

オリンピック研究調査センター所長

ケルン（ドイツ）

1. エドストレーム会長時代の時代(1942-1952)

1.1. 第二次世界大戦中の IOC

1.1.1. エドストレーム IOC 会長代行となる

1939 年 6 月のロンドンセッションで、1944 年の夏の大会にロンドンを、冬の大会にコルチナダナダンペッツォを選んで、IOC はオリンピックのカレンダーにそれから数年間の重要なスケジュールを割り当てていたところであった。その時、1939 年 9 月 1 日、ドイツ軍がポーランドに侵攻した。そして第二次世界大戦が始まった。

イギリスとフランスの第三帝国に対する即刻の宣戦布告にもかかわらず、最初の数か月間のドイツの軍事行動は、ポーランドとー1939 年 11 月 30 日のソビエト攻撃の後ーフィンランド領とに限られたものであった。

それ以外の世界に与えた衝撃は小さく、オリンピック共同体に、この危機は 1939 年春、かつてチェコスロバキア国に対して起きた事件と同じ線で収束するという誤った期待を抱かせたことは疑いない。

最初、1940 年大会の計画は維持され、意見の一致をみたのは単に参戦国の選手の参加資格に関するものだけだった。

しかしドイツが 1939 年 11 月 22 日に、次いでフィンランドが 1940 年 4 月 23 日に、大会中止を宣言するに及んでこれらの考慮は意味のないものとなった。

戦争が 1940 年 5 月に西ヨーロッパに広がり、バイエラツールの祖国、ベルギーがドイツの手に落ちて、オリンピックの活動も影響を受けないわけにはいかないことがはっきりした。

既述したように、IOC 会長はドイツのスポーツの役員から IOC の組織をドイツ政府の目的に叶うよう改める圧力をかけられていたが、バイエラツールは戦争が終わる前にセッションを招集することを拒否していた。

彼は自分の国が独立を失うことを知って、オリンピックの業務遂行を彼の代理人エドストレームに託した。エドストレームは 1937 年のプロネイの死後、既に IOC 副会長を務めていた。

中立国スウェーデンの市民、スウェーデンの電力会社 ASEA の監査役会代表として、エドストレームはまだ十分なコミュニケーション手段を持っていた。そして 1940 年の半ばにバイエラツールと相談の上、世界中の IOC 委員に不定期の回覧文書を送り始めた。

これには大変長いものもあった。これらの文書はその時から 1946 年の戦後初の IOC セッションまでの間に 27 にのぼったが、彼は委員たちに彼らの状況と活動について報告するよう求めた。

彼は 72 の宛先のうち 60 から返事を受け取り、それらは次の回覧文書に添付された。

そのため IOC 委員は地球の他の場所にいる同僚たちの状況についてよく知っていた。

IOC のその他の情報源はディエムによって編集され、国際オリンピック研究所から発行されたオリンピックシュトゥットガルトに付属したブレッティンであった。これはシュトゥットガルトが“最初是一年間”の発行停止になる 1944 年 10 月まで続いた；いずれにせよブレッティンは住所録と死亡記事以外にはほとんど何も載せることは出来なかった。

1939 年のロンドンセッションで合意されたように、戦争の間に亡くなった委員の郵便による補充推挙はされないことになっていた。それにも拘らず、空席になったコロンビア、ポルトガル、南アフリカ、スイスの席を満たすために 4 人の暫定委員が指名されていた。

そして、1942 年初め、エドストレームは IOC 委員に対しバイエラツールが亡くなったことを告げる悲しい義務を果たさなければならなかった。彼自身それをベルリンからの電報で知ったのであった。

一年半にわたって、世界中に散らばっている IOC 委員の事実上のコミュニケーションセンターの役割を果たしてきた後で、彼は憲章によって会長代行となった。

次のセッションでバイエラツールの後継者として選ばれるまで、ということであったが、当時、それははるか先のことと思われていた。

彼はローザンヌに旅した。最初 1942 年 1 月に予定したがその年の秋まで延期しなければならなかった。しかし帰国した彼は仲間の IOC 委員に対し、ザンキ夫人が本部を素晴らしいやり方で運営していると報告することができた。

1.1.2. IOC 創立 50 周年記念日

オリンピック大会の中止と IOC の活動が戦争の間事実上休止していたにもかかわらず、オリンピックファミリーが祝わずに過ごすことのできない日付があった；IOC 創立 50 周年記念日そして 1894 年 6 月 23 日のパリソルボンヌにおけるオリンピック大会の復活である。

クーベルタン自身、死の直前、その機会に祝典が行われるようにとの希望を表明しており、エドストレームはその希望に沿おうと試みた。

会長代行と相談の上、スイス NOC とローザンヌ市は公式な祝典を組織した。エドストレームはそれを 1944 年 5 月 15 日の彼の回状で発表した。

祝典は 1944 年 6 月 17 日に行われることが計画され、二週間にわたる記念行事の開始となるはずであった。

戦争はほとんど全ての戦線で燃え盛り、ドイツ軍とその同盟軍はいたる所で押し戻されていたが、ローザンヌで土曜日に国際スポーツを代表して出席したのは主としてドイツ人であった。出席した IOC 委員はわずかにフォン ハルトとブルガリアの外交官、ステファン・チャプラチコフだけであった、彼はほとんどベルリンに住みナチスの支持者であった；ディエムは国際オリンピック研究所の所長としてそこにいた。そしてほとんどの国際競技連盟の代表はドイツ人理事であった。

またスイス NOC の代表団が出席しており、その中にヘンリー・グイサン、前 IOC 委員でその時のスイス軍総司令官、そしてアルバート・メイヤーがいた、彼は後に IOC 委員となった。

そしてクーベルタンとプロネイの未亡人たちもいた。バイエーラツール伯爵夫人も出席が期待されていたが、欠席の詫び状が届いた。エドストレーム自身も欠席であった。

祝典の中心となった日は完全にクーベルタンの思い出に捧げられた。

それは彼の墓での記念祭で始まり、大学の大講堂でのアカデミックセレモニーが続いた。

そのメインテーマは“ピエール・ド・クーベルタンの教え”であった。五つの講演では、彼の生涯、歴史家としての彼の業績、教育者、人道主義者として、友人そしてスポーツの奨励者としての彼、最後に彼の信条、が分析された。

午後の IOC の機能の部では、最初にスイス NOC 会長マルセル・ヘニンガーがフォン ハルトに代わって記念の文書を IOC に提出した。そしてヴォード州議会議員、ペレがスイスとヴォード州政府の挨拶を伝え、これら政府が IOC と共にしている素晴らしい仕事の関係を称えた。

クーベルタンの生涯最後の年に行なわれたスピーチ“世界の若者へ”がラウドスピーカーで流された。エドストレームの演説はアルバート・メイヤーによって読まれた。そのテーマはアマチュアリズムの精神とスポーツにおける騎士道であった。そのなかで彼はまた執行委員会が記念日を記念するメダルの鋳造を委託したことを発表した。

表面にはクーベルタンの肖像と“ピエール・ド・クーベルタン 1894 年 6 月 23 日 ソルボンヌ”の文字が刻まれており、裏面には古代の勝利者が、それを称える男女二人の競技者に囲まれており、“オリンピック大会の第 50 回記念の年、ローザンヌ 1944 年”そしてオリンピックのモットー“より速く、より高く、より強く”が刻まれていた。

彼は更にカール・ディエムによるクーベルタンへの讃辞がオリムピッセルントシャウの次号に発表されると伝えた。しかしそれはこの雑誌が 1944 年秋に発行停止になったので掲載されることはなかった。

祝典の第 1 部はギリシャのヴァシラキ・ホティアデスによるオリンピック頌詩で幕を閉じた。

それから一行はリッポン広場に行き、そこでローザンヌの学校の男女生徒が体操のデモンストレーションを行った。モンルポの玄関ホールでは碑文が披露された：“ローザンヌ市、IOC 本部所在地、ピエール・ド・クーベルタン、オリムピズムの復興者へ、オリンピック大会復活 50 周年を記念して、1944 年 6 月 23 日”。

その下にクーベルタンの言葉が引用されていた：“*L'Olympisme tend à rassembler en un faisceau radieux tous les principes concourant au perfectionnement de l'homme*”

(オリムピズムは人間の完成を目指す全ての原則を一つの光の束に集めようとするもので

ある)。

フォン ハルトが IOC を代表して感謝の言葉を述べた後、フランシス・メッセリとザンキ夫人が来賓をオリンピック博物館に案内した。

そのタベ、ソフォクレスのオイデプスがフランス語訳で野外で演じられた。

その後 6 月 18 日に、クーベルタンを讃えて大学でスポーツ教育の会議が開かれた。

そしてそれに続く 2 週間、ローザンヌは沢山のスポーツ行事を開催し 30 ヶ国の選手が参加した。試合の中にはいくつかの競技のスイス選手権があった。しかし奇妙なことにプロの自転車ロードレースもあった。

IOC 創立後 50 年の日、1944 年 6 月 23 日、まだドイツの占領下にあったパリでも記念式典が行われた。

ソルボンヌではアルマン・マッサールフランス NOC 会長、教育とスポーツの事務総長パスコ大佐そして教育大臣アベル・ボンナールがクーベルタンの業績を讃えた。

1.1.3. オリンピック活動再開

1944 年秋、エドストレームはロンドンへ旅した。そこで彼はアバデア卿に会った。そしてそこからアベリー・ブランデーに会うためアメリカへ行った。

スウェーデンに帰って、彼はこのアメリカ人、彼によれば第 2 副会長としてクーベルタンとバイエラツールの最も重要な協力者であったブランデーに必要な場合にエドストレーム自身の後を継ぐよう提案した。彼自身は同時に会長と副会長の働きを兼任しており、74 才でもはや若くないからというのであった。

この間戦争の終結を前にして、会長は戦後のコースを設定する仕事に向き合っていた。

彼は手紙の中で、もし 1946 年までに戦争が終わって 1948 年には再びオリンピック大会を開ければ、という希望を表明していた。

1945 年 5 月 8 日のドイツの降伏でヨーロッパにおける闘いが終わった時、彼は 1945 年 8 月 21 日から 24 日ロンドンにおいて執行委員会を招集した。

エドストレームは彼の次の回状でこの会議の結果を報告した。会議には彼自身の他、アバデアとブランデーだけが出席できた。ブランデーを副会長にしようという提案には反対がなかったので出席した 3 人は必要が生じた場合、ブランデーがエドストレームを代行することに同意した；広島と長崎への原爆投下のあと日本の降伏は時間の問題であったので 1948 年大会は開催されるべきであると決議した。会場はロンドンとサンモリッツが提案された。

1946 年 1 月 17 日、エドストレームは IOC 委員を 9 月の戦後最初のセッションのためにローザンヌへ招待した。

彼は4月の終わりに、議題を戦争中のIOCの活動についての彼の報告と共に発送した。

ローザンヌのセッションには戦前の最後の委員会の委員で残っていた17人に加えて、新たに選ばれた12人の委員のうち9人が出席し、IOCは7年の後、正常な状態に復帰することができた。この過程が比較的スムーズに進んだのは、疑いもなく、スイスという中立国に運営の本部を置いていたという事実によるばかりでなく、エドストレームが世界中の委員とのコミュニケーションを何とかして維持した賢明なやり方に負うものである。

1.2. ジークフリード エドストレーム

1.2.1. 経歴と最初の主な要職

バイエラツールの後継者を選ぶために、IOCが1946年9月ローザンヌに再び集まった時、エドストレームは事実上IOC会長の務めを6年以上果たしていた。

この時代にオリンピックファミリーをひとつに維持し続けた彼の実績、そしてひとたび戦争が終わるとIOCの活動を再開するために費やした彼のエネルギーによって、多くのおもだったIOC委員には彼こそが76才に近いその年齢にも拘らず理想的な会長候補であった。

ローザンヌセッションの準備期間の積極的な活動と、とりわけオットー・メイヤーをIOCチャンセラーに指名するという彼の決断によって、彼はそのポストを受け入れる意志を静かに示した。また他に候補となる者もなかったこともあった。

こうして1946年9月4日ローザンヌセッションの会議の冒頭、セッションと執行委員会の長老フォンローゼンとド・ポリニャックがエドストレームを新しい会長に選ぶことを提案した。彼はその時出席していなかった。セッションは拍手をもってこの提案に賛成した。

この新しい会長はその将来の責務を果たすために豊富な経験を持っていた。彼はその経験をビジネスと国際スポーツの世界の沢山の責任ある立場を経た長い活動的な生涯の間に蓄積したのであった。

1870年11月21日にイヨテボリに生まれた彼は若いころから、イヨテボリからベルゲンとステッティンへの船会社を経営していた父親のおかげでノルウェーとドイツに旅する機会に恵まれていた。

事実、ビジネスと私的な数多くの旅行は二つの世界大戦の間さえ途切れることはなかったが、彼の生涯を特徴づけるものとなった。21才から78才まで一年のうちに一回も外国への旅行をしなかった年はほとんどなかった。多いときには5回或いはそれ以上の旅をした。

これらの旅行は彼の“趣味と生涯の喜び”の中に書かれているが、特に年を取ってからと当時の旅に伴った不便さから大変な身体的努力を要するものであったものの、彼が大変な言語能力を得るのに役立った。母国語に加え、英語、フランス語、ドイツ語を彼は自由に話し、書いた。そしてロシア語もいくらかできた。こうして彼は経営者の社会でもスポーツ団体の運営でも国際的に活躍するために素晴らしい資質を備えることになった。

イヨテボリとチューリッヒの工科大学で技術を学んだあと 1893 年から 1897 年までアメリカの電気会社に就職し、その後 1897 年から 1900 年までチューリッヒの電車会社の技術部長になった。

1896 年彼はアメリカで、先生をしていた三つ年上のルース・ミリアム・ランデルに会い 1899 年 6 月 27 日シカゴで結婚した。彼女は三人の娘と一人の息子を生んだ。

1900 年に彼はスウェーデンに帰りイヨテボリの電車会社の部長になった。1903 年、ヴェステラのスウェーデン電力会社（ASEA）の長に指名された。1934 年に引退した時彼は会社の監査役会の代表になった。このポストに彼は 1949 年までとどまった。

選手としてエドストレームは主として陸上競技を行った、彼の最高の成績は短距離走者として達成された。彼は度々 100 メートルを 11 秒で走った。そして 1891 年、150 メートルに 16,4 秒の世界記録を出した。チューリッヒの学生時代彼はノルディスカ漕艇クラブでボートを漕いだ、そしてレスリングの練習をした。

1901 年スウェーデンに戻ってすぐ、彼はスウェーデン陸上競技連盟の会長になった—これは彼のスポーツ運営の最初の大きな役職である。

また 2 年後彼はスウェーデンスポーツ連盟の会長になった。これはスウェーデンのスポーツ選手と体操家の間の合併の結果 1903 年に設立されたもので、彼とスウェーデンからの IOC 設立当初のメンバーであるビクトール・バルクが実現に協力したものである。彼はこのポストを 1913 年まで続け、この時彼が設立に努力した IAAF の会長となった。

この後彼はスウェーデン連盟の副会長となり 1940 年までその地位にとどまった。

今世紀初めのころのバルクとの緊密な協力が彼をオリンピックムーブメントに近づけたことは間違いない。彼は 1904 年にセントルイス世界博覧会に参加したが、そのなかでオリンピック大会が行われた。

1905 年 11 月 2 日に 1906 年のオリンピックアテネ大会に参加するスウェーデン選手の準備のための委員会がバルクによってストックホルムに作られたが、エドストレームは主導的な役割を果たした。彼はまたスウェーデンチームに同行した役員の一人であった。チームはベルリン、ウィーン、トリエステを経てアテネに向かった。

二年後、ロンドンのオリンピック大会でも彼は同じようなポジションにいた。

スウェーデンスポーツ連盟の会長として当然ながら 1912 年の大会には深くかかわった。

この大会は彼の国の首都が開催都市に選ばれたのである。彼は組織委員会でバルクの代理人であり、ストックホルム大会の偉大な成功は少なからず彼の手腕によるものである。

1910 年のルクセンブルク、1911 年のブダペストの IOC セッションに組織委員会の副会長として出席した後、エドストレームは 1913 年、新しく設立された国際アマチュア陸上競技連盟 (IAAF) の会長に選挙されて国際スポーツの指導者の間に座を占めることになった。

1912 年大会の準備の間、彼は何度も何度も、ほとんどどの競技も国際的に有効なルールを持っていないという困難に直面した。その結果、国際競技連盟の必要を痛感し、大会の間に、同国人レオポルド・エングルンドと共に、17 ヶ国の陸上競技連盟代表の支持を得て彼自身の競技のために指導力を発揮した。そして次の年、ベルリンで国際陸上競技連盟憲章制定会議を開くことが合意された。

そこで IAAF が設立され、エドストレームが会長に選出されたのである。彼はその地位を 1946 年まで成功裏に勤めた。

彼は国際競技連盟設立を促した一番の関心事を忘れず、国際的に守られるルールの起草、とりわけ、距離と重量、走路と投擲サークル、投擲器具の特性の標準化に力を注いだ。

彼の指導のもとに、オリンピック大会の陸上のプログラムを定め、それを唯一の世界選手権とした。これは他の国際競技連盟が IOC に対抗して自己の利益を主張し、独自の世界選手権を開催する意向を示している時代にあつて、IOC に対する力強い支援となった。

アマチュアリズムの問題に関しても、エドストレームは強硬な立場をとり、妥協を許さなかった。これはノルウェーの棒高跳び選手、チャールス・ホッフ、フランスの中距離ランナー、ジュール・ラデュルメグやあのパーヴォ・ヌルミのような有名選手に対しても同じであった。

二つの世界大戦の間の全てのオリンピック大会で彼は陸上競技を自ら管理指揮した。

IAAF 設立の年、常設のスウェーデン NOC がストックホルムに結成された。

グスタフ・アドルフ皇太子が初代会長となり、バルクとエドストレームが二人とも副会長になった。この NOC の代表としてエドストレームは 1914 年のパリオリンピックコンGRES に出席した。しかし、事実上は、むしろ IAAF の代表であり、連盟のために陸上競技のプログラムに責任を負った。

オリンピック大会に女性のための陸上競技を導入する議論では、フランス、ドイツ、アメリカの代表団に支持されて彼は反対に廻った。

1920 年、大戦以来必要になっていたスウェーデン NOC の再編成が行われた時、彼は再び深く関与し、副会長として 1925 年から 1948 年まで務めた。

1920 年から 1936 年までの全てのオリンピック大会に、彼は選手団長としてスウェーデンチームを率いた。

1.2.2. IOC 委員としてのエドストレーム

エドストレームがオリンピックムーブメントの中で最初に重要な役割を果たしたのは 1920 年代であった。この時、オリンピックは IOC とオリンピック競技の連盟との深刻な衝突で暗雲に覆われていた。1920 年アントワープの大会の間、競技連盟、とくに陸上、フェンシング、水泳、自転車を代表する連盟は競技面での IOC との関係に大変不満で、より大きな発言権を求め、すべての権力を自分たちの手に握ろうとしているという噂があった。

のちに IOC 会長になったバイエーラツールはボルシェビキの陰謀という言葉さえ口にした。

バルクには、彼は 1920 年 10 月 26 年間務めた IOC 委員を辞任していたが、この状況の中で彼の同国人、オリンピック競技の中で最も重要な連盟の長であるエドストレームこそが来るべき紛争を抑える役割を果たせることは確実に思えた。

それ故、彼はエドストレームを彼の後継者に推薦した。郵便投票によってエドストレームは第 99 番目の IOC 委員となった。

この IAAF 会長にとっては最初の IOC セッションに出席する前のことであったが、彼を含む 18 の国際競技連盟の代表が 1921 年 5 月 31 日から 6 月 1 日、ローザンヌに集まった。

これは国際自転車連盟の招待によるもので、包括的な組織を作ろうと企てる者の kongress であつた。

会議はエドストレームを議長に選んだ。そして IOC にとって疑いもなく重大な侮辱となつたに違いないそうした組織の結成を阻むことのできたのは少なからず彼の巧妙な交渉術のおかげであつた。この kongress は調整センターとして働く“常設事務局”をつくるに止めた；これは事務所を次のオリンピック開催都市に置き、IOC と協力作業をすることになった。

競技連盟の kongress で彼が議長に選ばれたことは彼が競技連盟の間に得ていた尊敬を示すだけでなく、またもクーベルタンの助言によってこの仕事が彼に任されたという事実は、彼が委員になった最初の瞬間から IOC の中でも全面的な信頼を勝ち得ていたことの証拠でもある。

1925 年のプラハ技術 kongress でエドストレームは当然のこととして議長に指名されたが、そのあとクーベルタンは、この選択は“エドストレームが IOC 委員であると同時に国際陸上競技連盟会長であることが、競技連盟の間でも喜ばれている”という言葉でバルクが自分の後継者にかけた期待が正しいものであつたと確認している。

IOC 委員であると同時に国際競技連盟の正当な利益の護り手であることを認識してエドストレームは、クーベルタンの言うように“驚嘆すべき熱意”“世慣れた聡明さ”“鉄の拳”をもって、危機的な状況の中でバランスを回復し、議論をスムーズに進めることができたのである。

ローザンヌ kongress のすぐ後、エドストレームが委員として出席した最初の IOC セッションが 1921 年 6 月 2 日から 6 日まで行われた。彼は直ちに新しいポジションで真摯な貢献をする意図を明白にした。彼は二つのワーキンググループに自ら進んで入った。一つは将来のオリンピック kongress の規則の草案を、一つはオリンピック大会を組織する者の管理義務の草案を準備するグループで、自ら冬季競技週間についてのスカンジナビア諸国のスポークスマンの役を引き受け、新しく作られた執行委員会に立候補した。

彼のオリンピックムーブメントへの賞賛すべき献身は彼の IOC 委員としての 32 年間途絶えることがなかった。彼は 29 のセッションのうち 27、44 回の執行委員会のうち 38 に出席した。1925 年に一度執行委員会を欠席せざるを得なくなった時には、クーベルタンに議題のすべてについて自分の意見を送った。

オリンピックの舞台における彼の活動は非常に創造的な性格をおびており、少なからず判断の独立性を示した。これはクーベルタンとの関係においてもそうであった。

中立国からの IOC 委員として彼は第一次世界大戦の敗戦国のオリンピックムーブメントへのなるべく早い再復帰を望んだ。そして 1923 年はやくもテオドール・レヴァルトを IOC 委員に立候補するよう説得しようとした。レヴァルトはその時、1924 年のオリンピックパリ大会にドイツの選手が参加することはドイツでもフランスでも好まれないだろうという理由でそれを断った。

事実、オーストリアは 1924 年のパリに参加したが、ドイツは 1928 年までオリンピックにチームを派遣しなかった。

1924 年にレヴァルトは第一次大戦後初のドイツ人委員として IOC 入りした。

レヴァルト、後にエドストレームと共に IAAF の理事を務めたフォン ハルト、ベルリンオリンピック大会組織委員会事務総長のディエムを加えて、このドイツ人たちとエドストレームの間には友好関係が育ち、1936 年のオリンピック大会を巡る紛争を通じてそれは一層強まった。

IAAF 会長はベルリンオリンピックは行うべきであるという意見を断固として支持し、アメリカでのボイコットの動きに反対して闘うブランデーを支え、ヤンケ追放を画策した。

ドイツのユダヤ人の大会参加資格の問題に対して彼は、バイエラツールよりも、言ってみれば、注意深い態度をとった。

明らかにスウェーデンの中立政策と結びついた日和見的な理由で、彼は国家社会主義ドイツ労働者党（ナチス）の招待を受け、1936 年 9 月の党大会に出席している。

また大戦勃発の後も 1940 年に予定された大会に参戦国の参加を支持し、同じ年にベルリンで執行委員会を開催することを主張した。

本質的な問題では、エドストレームは IOC の中で、IAAF での彼の活動と同じようにアマチュアリズムの厳格な解釈の護り手であった。そしてサラリーの損失補填についての熱い議論でも二つの組織の中で彼が 1928 年に IAAF コンgress で策定した基本線に従った：

“多くの影響力ある人々が、働くスポーツマンに仕事を休んだ時間の給与を払う必要があると考えている...しかしもしその道を少しでも進んだら、我々は泥沼にだんだん深くはまり込んで絶対に我々自身を救うことができなくなるだろう。だから我々は真のアマチュアリズムをいつもしっかりと守らなければならないのだ”。

彼が決定的な役割を演じた 1930 年のベルリンオリンピックコンgress の後、ここでは大会の期間の長さとしてと種目の参加選手の数の制限についての有名な決定がされた一方で、失われた収入についてははっきりとした立場に到達することができなかったのだが、エドストレームは短い間にせよ IOC を辞めようとしているように見えた。

彼は執行委員会とベルリンコンgress の生んだ国際競技連盟代表評議会との間の会合を欠席した。ここでは彼の信念に反して、サラリーの継続的支払容認に何ほどかの根拠が与えられたのだ。また彼は 1931 年のバルセロナ執行委員会にもそれに続いたセッションにも参加しなかった。

しかしそこで彼自身を次の執行委員会の任期に再選させたことは彼にまつわるオリンピック疲れの噂を打ち消さずにはおかなかった。事実、彼はそれまでの二倍以上の期間、IOC 会長としてオリンピックムーブメントのためにエネルギーを費やさねばならなくなるのであった。

エドストレームが 75 才で第 4 代会長に選ばれた時、それまで誰もその年に達した人はいなかったが、IOC にはまだ任期について明確な合意はなかった。憲章によれば 8 年ということになっていたのだが。

会長自身は 1949 年 4 月に来年のセッションでやめたいと言っていて、選挙の準備も話し合われた。しかし六か月後の会議で彼の同僚の執行委員会メンバーは 1952 年まで職に留まってほしいと要請した。彼は考えた末同意した。

彼は 1952 年、かねて働きかけていた後継者ブランデーに会長職を譲った。そして IOC を去り、名誉会長に指名された。

1.3. エドストレーム会長の下の IOC

1.3.1. 委員

ロンドンセッションが終わった時の 73 人の IOC 委員のうち、戦後に残っていたのはたった 51 人であった。そこでエドストレームの 1946 年ローザンヌでの会長としての最初の仕事は空席の多くを埋めるための 15 人の委員の選出であった。

委員の数は 1952 年のエドストレーム会長の終わりまで、かつて IOC 委員を持たなかった国に席をつくることを中心に増え続けたが、この期間中に戦前の最大の数に再び達することはなかった。

しかしこの期間に承認された NOC の数はより急速に増えた。このため次第に沢山の国が NOC はあるが IOC 委員を持たないという状況になった。

1952 年 9 月のブレッティンは 47 ケ国からの 72 人の IOC 委員のリストを載せている—6 ケ国が各国 3 人の委員、13 ケ国が各国 2 人の委員—、ということで NOC を持つ 79 ケ国のうち 32 ケ国は IOC 委員を出していない。

NOC を持つ国は少なくとも一人の IOC 委員という戦前の慣例から外れたのは、新しく NOC が設立された主としてラテンアメリカとアジアの国々であった。これらの地域では、エドストレーム会長時代が終わった時 14 ケ国が NOC はあるが IOC 委員を持たなかった。

委員の数の変化についてはバイエラツール会長の二つの任期の間に比べて多少の増加が見られた。1948 年のヴァチカンに亡命していたハンガリー人のニコラス・ホールシーと 1950 年のファシストであったイタリアの将軍、ジオルジオ・ヴァッカロの IOC からの除名の後、セッションに出席しなかったことがはっきりした除籍の理由とされたのは 1952 年が最初であったことは注目に値する。

ヘルシンキオリンピック大会の際のセッションで 4 人の委員が定められた期間のセッションに一度も出席しなかったという理由で除名された。この期間は 1949 年に 2 年から 4 年に延ばされていた。

定年の導入は最初 1948 年ロンドンで討論された。これは 6 か月前、サンモリッツでニュージーランドの委員、アーサー・ポリットが、70 才に達した委員は任期を終え名誉委員になるべきだという提案をしていたのを受けたものであった。

ロンドンでは 27 票のうち 15 票という僅差で（憲章の改正には 3 分の 2 が必要）この提案は成立しなかった。しかし 1 年後ローマで行われた新しい投票ではそのような規則に対する反対が 22 票のうち 16 票の多数を獲得した。そしてその代わりに新しい憲章は健康や老年による自主的な引退をした場合、その後名誉委員となることを規定した。名誉委員はセッションに続けて出席を認められるが投票権はなく会費を免除される。

1946年から1952年の間の9回のセッションの平均出席率は52%で1925年から1936年の間に比べて9%高かった、これは少なからず航空便の増加のためなのは明らかである。

戦前と同じように、一番出席の多かったセッションは夏の大会と同時に行われた時である;1948年のロンドンでは66%の委員が出席し、1952年のヘルシンキでは80%であった。

1946年にローザンヌにエドストレームによって招致されたセッションのあと、戦前と同じく、オリンピック大会のない年にセッションを開催しようと立候補する都市は多かった。

1947年にはハーグから提案があったが後に撤回し、リスボンとストックホルムが争いIOC会長の支持という利点を持ったストックホルムが成功した。1949年にはローマとコペンハーゲンが立候補し、デンマークの首都がわずかの差で敗れたもののその償いとして1950年のセッションを割り当てられた。

1.3.2. 執行委員会(EC)

バイエラツールを除くすべてのECメンバーは戦後に生き残った。そしてこの間に新しい選挙を行うことは不可能だったので彼らの任期は自動的に延長されていた。

この選挙は会長選挙や新しいIOC委員の選出と共に1946年のローザンヌセッションの議題に上っていた。

しかし何よりも現行の憲章からの逸脱があった。憲章は副会長はEC自身によって指名されると定めていたが、ブランデーが委員の全体会議で拍手をもって副会長のポストに指名されていた。こうして彼は議事録によれば異論なくECに復帰したのである。

残りの4人のメンバーについては、ド・ポリニャック、ボナコッサそしてアバデアもまた再選されたが、フォン・ハルトだけはソビエトに拘禁されていることをIOCが知っていたので交代することになった。彼の席は1924年以来のオランダのIOC委員ピーター・シャルローに移った。

古い憲章のもとでは、このECの任期は4年後のコペンハーゲンのIOCセッションで満了することになっており、新しい選挙が行われる筈であった。しかしこの間に1949年に採択された新しい憲章が有効になっていた。ECの仕事は基本的に変わらなかったが選挙の手続きに関して大きな修正がなされていた。

ECメンバーが6人から成ることは変わらなかった。しかしこのうち会長と副会長は1946年に期待されていたように新しい憲章でもIOC全体によって選挙され、今も職権上のメンバーであった。

残りのメンバーは4年の任期で執行委員会に選ばれ、毎年一人のメンバーが退任して一人の新しいメンバーが彼の代わりに選ばれることになっていた。退任したメンバーは1年が過ぎるまでECに再選されることは出来ない、そのメンバーが任期満了前に空席となったポストを満たすために選ばれていたのであれば別だが。

この新しいシステムを確立するために、IOC は 1950 年のコペンハーゲンでたった一人の新しい EC メンバーを選出しただけであった。つまりフランス人 IOC 委員のアルマン・マッサールが彼の同国人、ド ポリニャックに交代した。ポリニャックはエドストレーム自身を除けば最後に残った IOC 創立メンバーであった。

次の年、アバデア卿が他のイギリス人委員デイビッド・バーグレー卿に席を譲ろうとした。バーグレー卿は 1936 年以来イギリスオリンピック委員会の会長であり、1946 年からイギリスと国際陸上競技連盟の会長であった。

彼は IAAF の会長をエドストレームから引き継いでいたので、IOC でも 1952 年に同じようになることを望んだ。しかし会長選挙で引退する会長の支持した候補者ブランデーに敗れた。

副会長にはバーグレー卿よりマッサールが選ばれた。

この結果と退任の順番であったボナコッサの辞任で二人の新しい EC メンバーを選出しなければならなくなった。IOC は 1932 年以來の IOC 委員、デンマークのプリンス アクセルと 1934 年に選出されたエジプトの委員、モハメッド・ターヘルに決定した。

1.3.3. オリンピック憲章

1945 年 8 月の戦後初の会議で、執行委員会は憲章に幾つかの追加や修正が必要であるという結論に達した。特に、オリンピック kongress の必要数を減らすために国際競技連盟代表の評議会がもっとしばしば会合すべきだと考えた。

エドストレームとブランデーはこの問題に取り組むことを合意した。しかししばらく何も起こらなかった。

IOC 規則は 1946 年に英語とフランス語で再び印刷されていたが、基本的に 1939 年版で、kongress に関する部分は省かれていた。

1 年後ストックホルムでエドストレームは、新しい規則が起草されており 1948 年にサンモリッツで討議されるであろうと発表した。しかしそのテキストは最初英語版だけが配布されたので投票は更に 6 ヶ月延期されねばならなかった。

オリンピック大会に伴って開かれたロンドンのセッションでは、激しい議論が戦わされたが全ての点で結論には至らなかった。議論のあった点を研究するために委員会が設置されその結果が執行委委員会に提出されることになった。この準備作業に基づいて新しいテキストが 1949 年のローマのセッションで配布された。この草案は国際競技連盟の希望を入れた多くの修正を含んでいて新しい憲章として採択された。しかしその際 7 人の委員がフランス語版を熟読する必要があるとして最終的な投票を保留した。

新しい憲章を前の 1939 年版に比べてすぐに気が付くのは 4 つの主な章“根本原則”、“国際オリンピック委員会の定款”、“オリンピック大会の規制と儀典”そして“オリンピッ

ク大会の開催に適用される一般規則”が残っていることである。一方以前の NOC とオリンピック kongress についての追加規則はもはや独立の章ではなくなった。前者は IOC の定款に含まれ、後者は全部削除された。というのは今や kongress は必要な時にだけ召集されるものであり、その開催についての規則はそれぞれの機会に個別に作られるからである。

憲章の 60 の節にナンバーリングが明確さを増すために付けられ、テキストは全体的にスタイルの見直しが行われた。

内容に関しては上に述べた新しい項目（定年、EC メンバーのローテーションそしてセッションによる副会長の選挙）と共に、新しい文書は過去の経験に基づく一連の修正や拡充を含んでいた；特にオリンピック活動の公式な枠組みをより詳細に定めていた。

全体的に憲章の新しい版は、成熟した組織が経験する法的な明確化のますます大きくなる必要性を反映するものであった。

個々の変更の中には“根本原則”に初めて“肌の色や宗教や政治を理由にいかなる国も人も差別することは許されない”という意味の条項が含まれた。“夏の大会”という言葉もここで初めて使われたが憲章全体を通じて一貫して使われてはいない。

必須競技の中では“水の競技 (water)”が“水上競技(aquatic)”に変えられ、“芸術競技”が“芸術展示”に置き換えられた。これはまだ“公式プログラム”の一部に数えられていたが、もはやメダルは与えられず、間もなくオリンピックプログラムから消えることを予告する修正であったのであろう。

“IOC の定款”の中の以前の“管理運営部門”の章は三つの部分にわけられた：“会長と副会長”、“執行委員会”、“チャンセラーとセクレタリー”。

チャンセラーとセクレタリーの指名は以前は執行委員会次第であったが、常設の制度に昇格し IOC 全体に報告責任を持つようになった。

一方、国際競技連盟代表の評議会ももはや定款の中に根拠を持たなくなった。その代わりに EC が IF 代表と会議を開くと述べられている。

古い定款では IOC 自身が全ての会議の時と場所を決めていたが、これは今や会長の特権となった。しかし会長は 10 人の委員が要求すればセッションを招集しなければならない。

他の新しい特徴は定足数であった：決議が有効となるには少なくとも 15 人の委員が出席していなければならない。

NOC に関する条項は IOC 定款に含まれることになり大幅に拡充された。そしてその IOC による承認の条件が厳密に定められた。NOC は独立性と自律性が要求された。この規定は東ブロックの NOC に新しい問題をもたらした。さらに NOC は国内競技連盟については、

当該競技のIOCが承認した国際競技連盟に所属しているものに限って一つだけ承認が許されることになった。

第3章“オリンピック大会開催の規則と儀典”において組織委員会による公式報告書の提出が義務となった。また大会参加の招待はもはや“まず何よりも”ではなく、承認されたNOCだけに送られなければならないと明記された。

オリンピックの五つの輪とそのモットー“より速く、より高く、より強く”はIOCの専有財産とされ商業的使用は禁止された。

開会式に関しては、チームは開催国のアルファベットの順番でスタジアムへ行進しなければならないと定められた。しかし例外があって、憲章の規則にはないものの1924年以来の伝統でギリシャが先頭に、そして開催国が最後に行進する；トランペットのファンファーレと鳩を解き放つことに続いてオリンピックの火が走者によってスタジアムに持ち込まれトラックを一周したあと聖火として灯される。勝利の式典は1932年のロサンゼルス以来今日なお習慣的に行われているように、そして閉会式は旗手以外の選手は参加しない形で、詳細なルールが書き込まれていた。

前の憲章ではアマチュアの定義に1頁半がさかれていたが、新しい版では“オリンピック大会開催に適用される一般規則”がわずか5行の定義を含んでいるにすぎない。その定義によれば、アマチュアとは直接間接のいかなる種類の物質的報酬もなしに、その国際競技連盟のルールに従って競技に参加する者である。

この公式化は一見したところ以前の版のものに比べてより単純で明確であるように見える。しかしこれはその後何年もの間、この問題の最高権威としてのIOCに、議論のあるケースを解決するための解釈の問題を引き起こすことになった。

これに続く文節で、憲章はどの選手がどの国を代表して参加資格があるかという問題についてはるかに詳細に扱っている。これは多くの植民地や領土が未だに宗主国によってさまざまな形で支配されていたという観点から見れば決して簡単な問題ではなかった。

規則はまた多くの追放や亡命の例にも取り組もうとしていた。

これまではその都度、新たに決められていた女性の参加については、以下の競技に参加が許されると明記された。陸上、体操、水泳、カヌー、フィギュアスケート、スキー、ヨットそして芸術展示である。

憲章の第4章に含まれた残りの細則には以下のようなものがある。冬季競技で一種目に付き一国からの参加数の制限は4、選手への賞状は4位迄から6位迄へ、選択競技が実施されるに必要な国の最低数の定めなど。

最後にIOCは開催都市の組織委員会の権限を弱めて自己の立場を強化した。以前は組織委員会は大会の“完全なコントロール”を自己の権利として要求することによってオリ

ピック大会を指揮する責任を負っていたが、ここでは IOC は“一定の責任”を組織委員会に委託ことができるとなっている。

1.3.4. アマチュアリズムの問題

バイエラツール会長の下では、ジークフリード・エドストレームが IOC の中でアマチュア規則の解釈の最も熱烈な守り手の一人であったが、今やブランデーがこのスウェーデン人の同僚からその役割を奪った。

当時会長代行であったエドストレームと将来彼の後継者となるブランデー、そしてアバデア卿の3人は1945年8月のEC会議に出席した後、この早い段階で“ECは、アマチュアスポーツの高い理想を強調するオリンピックムーブメントの重要性に世界の注目を集める必要があると感じた”と宣言していた。

次の年のセッションで、国際スキー連盟との紛争はIOCの有利に解決されたと発表したのはブランデーであった。

事実この数日前、ポーでの kongress で FIS は1948年のサンモリッツの冬季大会に参加しようと思うスキーインストラクターは1946年8月1日以降その職業を實踐してはならないと決定していた。

しかしIOCはサンモリッツ大会のアイスホッケーのトーナメントを巡る論争では新しい譲歩をせざるを得なかった。なぜなら二つのアメリカのチームはプロによって監督されていることが分かったのである。

新しい憲章には上に述べたように、非常に短いアマチュアの定義しかなかった：“アマチュアとは、喜びのためそしてそれから得られる身体的、精神的あるいは人間同士の付き合いの利得のためにのみスポーツに参加し、そして常に参加してきた者である。そしてアマチュアにとってスポーツに参加することは一切の直接的或いは間接的物質的利益無しの、当該国際競技連盟の規則に従ったリクレーション以上のものではない”。

しかしながら失われたサラリーの補償についての決定、スポーツのプロやスキーのインストラクターの除外等はそのままだに残っていた。そしてこの立場を緩めることを支持するIOC委員は少なかった。

二人のノルウェー人、オラフ・クリスチャン・ディトレフシモンセンとトマス・ファーンレーは1950年のコペンハーゲンセッションに二つのアマチュアの定義の公式化を提案していた。その主な点は国際競技連盟自身がそれぞれにアマチュアを定義することを許すというものであったが、そういうわけで投票で完全な敗北を喫した。

大多数はブランデーを支持した。彼は“STOP”と題した政策スピーチを用意していた。

その中で彼はオリンピックムーブメントの歴史の中で彼が輝かしいエピソードであると

考えるものに基づいて、これらの成功がいつにかかってアマチュアの理想に対する揺るぎない尊敬のせいであり、この原則からのいかなる逸脱も必ずオリンピック大会の死を意味することを示そうとした。

ストップ！ アベリー・ブランデー

IOC がオリンピック大会参加資格の条件を放棄し、各国際競技連盟に誰がその競技に参加できるかを定めることを許すという提案は、他のある種の助言や傾向と同じようにオリンピックムーブメントに対する大変な危険を孕んでいます。ですからその歴史とそれに含まれている基本的な哲学を振り返ることが必要になるのです。

わずか 60 年足らずの間に、クーベルタン男爵の呼びかけに応じて 1894 年のパリのコンGRES で慎ましく始まったオリンピックムーブメントは、その高い理想の他に、金もなく、銃もなく、何の後ろ盾もないのに、地球の隅々まで広がりました。

1896 年のアテネの第一回オリンピック大会には、わずかの国と一握りの選手しか参加しませんでした。今日、三桁を超える国内オリンピック委員会が存在し、事実上、文明国でこれのない国はありません。すでに参加選手の数制限しなければならなくなって久しく、競技を見たいと願う全ての観客を受け入れることは最早不可能です。

数百人のジャーナリストが 25 の言語で大会をレポートしています。

競技の結果は沢山の放送局が放送しています。映画はすべての国で何十万という人々に見られています。こうした刺激によって何百万という少年少女がアマチュアスポーツに引き付けられ、それから利益を得、世界はフェアプレーと良きスポーツマンシップの美德を学んできました。

この目覚ましい発展は他に例を見ません。これはオリンピック大会が、この物質主義の時代の最中にあって、先見性のあるクーベルタン男爵によって定められ、近年 IOC によって強化されてきた人間性の繁栄に資する規則のもとに運営されてきたからです。

オリンピックムーブメントに関わる者は誰もそこから利益を得ることは許されません。

選手も役員もアマチュアでした。IOC 委員は自分の時間を割くだけでなくかかる費用も自分で負担しました。オリンピックムーブメントに携わるすべての者は貢献だけを宗とし、それで利益を得ることなど考えもしませんでした。

いかに費用がかかろうと困難があろうと、オリンピックムーブメントに携わる非常な名誉のためにそれは喜んで担われてきました。オリンピックが占める高貴な位置と公衆の尊敬は、この商業主義と政治的意味合いが一切ないことによるものです。

公衆の関心が非常に高まったので、一夜にして有名になり、選手や監督は莫大な金を得ることが可能になりました。その結果、選手や関係者がオリンピックムーブメントから直接或いは間接に利益を得ることを許そうとする大きな圧力が生まれました。

圧力はある時はこの方向から、ある時は別の方向から、さまざまな方向からやってきます。しかし目的は常に同じです：創立者が賢明にも書き上げた基本概念に従ってこの半世紀間に築かれた世界的な尊敬の念を金儲けに利用しようとするのです。

ビジネスはビジネス、スポーツはスポーツです。これを混ぜることは不可能です。

これはオリンピック大会はアマチュアに限ると決められた時から認識されていました。もしこの制限が無くなったら、その瞬間からオリンピックの存在の理由はなくなります。

もし選手が金を払われるとしたら、IOC 委員や無償のスポーツ指導者たちはどうして自分たちの時間や金を提供しなければならないのでしょうか？もし他の者が儲けるためだとしたら、選手は何故、彼らの時間と努力を捧げなければならないのでしょうか？

オリンピック大会が生き残るためには、厳格にアマチュアのものであり続け、もし利益があればアマチュアスポーツの更なる発展のためにのみ使われねばなりません。

これが IOC の機能であり、強化されてきた規則の理由です。

もし各国際競技連盟が自分たちにいいようにことを運べば、その結果の混乱を想像するのに大した想像力はいりません。

オリンピックが成功するように管理するには、IOC のような独立したどこにも偏らない組織が存在しなければならないことは誰も認めるでしょう。結果が全てを語っています。

IOC はこれまで決してどの競技連盟の物事にも干渉することを企てたり望んだりしたことはありません。オリンピック大会に参加しようとする者にその規則に従うことを要求するだけであり、またそうしなければなりません。

参加することで報酬を与えられる選手、教えたりコーチすることで支払われる者、スポーツのために政府やクラブに後援されていた者、プロになると決めた者、仕事で余分な支払いを受けている者、或いは書くことやラジオの放送でお金を得ている者、はアマチュアではないし、どんなスポーツ団体も彼を言葉の手品でアマチュアにすることは出来ません。

これまで IOC はスキー教師に関して 1946 年の度重なる交渉の末、彼らを満足させ、議論を終わらせるために国際スキー連盟と特別の譲歩を含む協定を結びました。

支払いを受けるスキー教師はアマチュアではありません。そしてオリンピック大会に彼らの場所はありません。なぜ決着のついた問題をもう一度蒸し返さなければならないのでしょうか？

事実 1947 年に、すべての国際競技連盟の代表と IOC によって指名された委員会が何か月もの研究と議論の末すべての関係者が受け入れられるアマチュア規則が採択されました。

アマチュアリズムは抽象的な確固とした本質であり日によって変化したり変えたりできるようなものではありません。

オリンピックムーブメントに対するこの主要な危険は国際アマチュアスポーツ連盟の代表が 1946 年 9 月にスイス、ローザンヌで IOC と会合した時に彼らに認識されていました。

そこで彼らは“アマチュアスポーツに対する彼らの献身と世界中全ての国でオリンピックの理想に完全に従い全ての政治的あるいは商業的影響を排除してその発展に専念することを再確認しました。そして彼らはこれらの考え方を実行するために全力をもって戦う決意を宣言しました”。これらの危険は、各国オリンピック委員会と国際競技連盟そして IOC の間の緊密なそして活発な協力によってのみ克服されます。このような協力は、この問題がより大きな力を持ち危険がさらに高まっている今日、かつてないほど必要になっています。

確かに、どんな国内組織も、もし政府がスポーツを個人的あるいは国家的権力拡大の政治的手段としてコントロールし利用しようとしたら、効果的に抵抗することはできません。

オリンピック規則は国内オリンピック委員会は独立して自律でなければならないと規定しています。

自由で独立したスポーツ組織を持たない国は国際的に仲間として認知されることはできません。

この条件は諸般の状況のせいでスポーツ発展のための金が政府から来ざるをえない国々に説明しておかなければなりません。

一方で強い国が弱い国の選手を遠ざける傾向がありますが、この傾向は強まってはなりません。

いつの日かこれは逆転することもあり得るのです。

もしある国あるいは異なった政治信条の選手が排除されるならば、次には異なった人種あるいは宗教の選手が排除されることになるでしょう。

オリンピックは根本原則の第一条に定められているように全てのアマチュアに開かれていなければなりません。

問題は、オリンピック大会が IOC のような偏らない組織によってオリンピックの原則に完全に合致した純粋で理想主義的な態度で運営されるかどうかなのです。

もし各競技連盟が自分たちだけの条件によって参加するということになれば、IOC はその職責を放擲する以外になくなるでしょう。

オリンピックムーブメントの成長と発展そして世界中で勝ち得ている尊敬は、それがアマチュアのものであり、政治的或いは商業主義的な影響力から自由であるという事実によるのです。

この原則の放棄は、オリンピックの弔鐘を鳴らすことになるでしょう。

1.4. ドイツの再承認とドイツ分割の問題

1.4.1. 1948 年ロンドンにおけるドイツ参加の企て

第一次世界大戦の後と同じように、IOC は第二次大戦が終わって再び敗戦国にどう対処するかという問題に直面した。今回、この敗戦国の戦争における罪は全く疑いの余地のないものであった。1944 年 10 月 28 日、この問題についてクラレンス・アバデア卿はこう言わねばならなかった：

“もしオリンピック大会が 1948 年どこかで開催されるとしたら、1920 年の大会に関する IOC の合意に従って、少なくともドイツと日本は招待されないと貴下に保証して欲しいと私は思うのです”。

この問題はその年の終わりに、アメリカで公然と論議された。そして新しいIOC副会長、アベリー・ブランデーは1945年1月9日、当時の会長代行、エドストレームに彼がメディアの代表との会話に用いた極めて如才ない外交官的な態度について報告した：

“ドイツと日本がオリンピック大会に招待されるかどうかという質問に対する私の答えは、これらの敵国が政治的、商業的に認められた時に、彼らは間違いなく、スポーツにおいても認められるでしょう、というものでした”。

エドストレーム自身は、1945年1月1日の戦後最初の回状で、非常に控えめな言葉使いでドイツ人IOC委員、メクレンブルグ公爵とカール・リッター・フォン・ハルトの運命に関する懸念を表明しただけであった。彼らについてエドストレームは、公爵が今はロシア人によって占領されているバードドーベルランにいたことがあるということと、フォン・ハルトがヒトラーの最後に残った国土防衛隊の中でベルリンで活動していたことを知っているだけであった。

しかし彼が新しいIOCの刊行物発行の決定を発表した時に、ディエムの“オリンピックシエルントシャヴ”、この最後の号は1944年秋であった、の再発行は彼の計画の中にはないことを明確にした。

ディエムは大戦の後でも自分自身を国際オリンピック研究所の所長であると考えていて、IOCの公式の知らせを含む以前と同じ形で再刊することを何回もエドストレームに提案していたのである。

しかし最後の分析の結果IOC会長は、ディエムとの個人的な関係がいかに親しいものであってもこの時代にオリンピックムーブメントの中にレジスタンスに参加していたという性格づけのはっきりしないドイツ人にそのようなポジションを与えることはできなかった。

1946年に新しいIOCブレッティンが発行された時、ディエムはそれに記事を書くことを許されたが、二三のIOC委員はその記事は彼の名の下に発表されてはならないと抗議した。

しかし、終戦の年に戻れば、1945年8月の最初の執行委員会の2頁の手書きの議事録に見る限りドイツの問題はあまり言及されていない。出席した三人のメンバー、エドストレーム、ブランデー、アバデアはこの点について意見が同じであることに確信があったので、新副会長はクラレンス・フォン・ローゼン伯爵に対し1945年10月2日、招待状は“世界の国々に受け入れられている国内オリンピック委員会を持つ”国にのみ送られるであろう、と通知することができたのである。

これは前に述べたように、以前に彼がとった線に従ったものであった。つまり、オリンピックの敗戦国との協力については国際政治のルールを指針とするということであり—最近設立された国際連合が判断規準となり得る。

1948年の大会にドイツと日本の選手の招待を避けようという意図がありながら、ブランデーの公式化された言い方は日本とドイツのNOCの承認取り消し、そのIOC委員の追

放という問題に踏み込む必要を避けるものであった。それを取り上げれば、大戦の終わりでまでファシズムに対し中立であった、或いは戦争が終わって勝利者の側に名乗り出た国々の何人かの IOC 委員の態度に関する不愉快な問題を引き起こしかねなかったであろう。

そういうわけで、1946 年 10 月のニューブレッティン の最初の号のリストにはドイツと日本のオリンピック委員会が、住所はなしで、載っていた。そしてメクレンブルグ、フォン ハルト、副島道正伯爵、高石真五郎、永井松三の名も IOC 委員の名簿の中にあった。

第一次世界大戦後は、ドイツ人はオリンピック参加にほとんど興味を示さなかった。

新しいドイツ NOC の結成とドイツ選手の大会参加—1928 年のアムステルダム大会—は大変に骨の折れる交渉によって実現したものであった。

今回は反対に、ドイツは最初からオリンピック共同体のメンバーとしてのその地位の再獲得と維持を求めている。

フォン ハルトは依然としてブッヘンバルトでソビエトに拘束されていたが、ディエムとメクレンブルグ公爵は後にイギリス占領地域となる所に逃れ、ドイツスポーツの迅速な再統一に向けての努力の先頭に立っていた。彼らは IOC が誰も追放しなかったという事実に関心を持ち、所を求めることができた。

エドストレームとブランデーはディエムとフォン ハルトに対する個人的繋がりを否定しなかったばかりか、彼等とその家族に機会あるごとに食料の包みや衣類を送っていた。

しかし IOC 指導者は当然のことながら、同時に、ヒトラーのドイツの手でひどい目にあった国々からの委員の感情を考えなければならなかった。そして紆余曲折の末、ローザンヌにおける戦後最初のセッションにはドイツ人は一人も出席しなかった。

エドストレームは最初ディエムを招待していた。ディエムは何回か IOC のために働き続けたいと言っていたし、ロンドンの大会開催についても協力すると言っていたのである。

しかし 1946 年 5 月 21 日付の手紙とそれに続く 2 通の手紙でディエムは、結局のところ自分の出席は適当ではないだろうと言ってきた。

メクレンブルグ公爵は、もしドイツが 1948 年の大会から除外されるならば IOC を辞任すると言っていたが、ドイツを追放しようとする会議には出席したくないとしてローザンヌへは来なかった。いずれにせよ占領当局は彼に外国へ行く許可を与えなかったであろう。

IOC は 1946 年 9 月 4 日から 6 日までローザンヌで会議を持った。このセッションの議事録には、これをエドストレームは後に公爵とディエムに送ったが、1948 年大会のドイツと日本の参加については一行も触れられていなかった。

しかしながら、IOC は国際オリンピック研究所、これは戦前は事実上ドイツの施設であった、をローザンヌに移し、季刊ブレッティン を IOC チャンセラー、オットー・メイヤーを責任者として発行する決定をした。

ディエムの IOC に対する公的な活動はこうして、法的には、終わったわけだが、彼はエドストレームからブレッティンに書き続けるようにとの要請を受け取った。この手紙の中に、IOC 会長は手書きで次の言葉を付け加えている：“不幸なことに、いまだにかなりの反ドイツ感情があります”。

1945 年 12 月 17 日の連合軍統制委員会の決定に従ってすべてのドイツスポーツ組織が 1946 年 1 月 1 日までに解散させられていたという事実にもかかわらず、IOC は反対に何の決定もせずにドイツ NOC をブレッティンのリストに載せたままにしていたので、ディエムはいまだにドイツが 1948 年のオリンピック大会に参加できるチャンスはあると見ていた。

1946 年 10 月 18 日、彼はメクレンブルグに助言した：“ドイツに関しては、我々ができるだけ早く再びオリンピック委員会をつくるべきです”。

NOC 設立の許可を求めた彼の申請が 1947 年 2 月 5 日にアメリカ軍当局によって拒否された後、彼は連合軍統制委員会に対して運試しをしたが返事を受け取ることはなかった。

ドイツオリンピック委員会設立の次の企ては、連合軍統制委員会の同意に従って 1947 年 4 月 18 日から 20 日までフランクフルトで開かれるドイツスポーツ会議で行われるはずであったが、再びアメリカ軍当局によって潰された。

新しい NOC の規約をすでに起草していたディエムにとっては誠に残念なことに、アメリカ軍当局はいろいろな役員の出席を禁じたのである。

エドストレームはドイツ NOC 設立の計画のニュースに肯定的な反応を示していた、“結局これがドイツのサンモリッツとロンドンへの参加のための最初の条件である”。しかしそれにもかかわらず、彼自身は 1947 年 4 月 1 日付けのメイヤーへの手紙でドイツオリンピック委員会承認のチャンスについては非常に懐疑的であるとしている：

“承認されるべきオリンピック委員会は幾つかあります... そしてもしドイツ委員会がその時に準備されていればドイツもそうでしょう。しかし私はドイツが受け入れられることは、今のところ、けしてないだろうと思っています”。

ロンドン大会参加を求めるドイツ人達にとって時間は迫っていた。そしてメクレンブルグはオリンピック委員会の設立を精力的に進めていた。これはどんなことがあっても IOC セッション（1947 年 6 月 19 日から 21 日）の前に実現しなければならなかった。

1947 年 5 月 28 日、彼はディエムの新しい活動の拠点ケルンで、ディエムと共にドイツの競技連盟の何人かの代表と会った。そして連合軍統制委員会の許可は未だおりていなかったが、6 月 8 日に“暫定的な”委員会を設立することに合意した。

これはドイツの IOC 委員と“主要な競技”（陸上、サッカー、体操、ボート、ホッケー）の各代表一人からなっていた。

まさにこの日、公爵はエドストレームに電報を打った：“6 月 8 日オリンピック委員会

が設立されず”。そして長い手紙がこの電報に続いた。

およそ 100 人が集まった 6 月 7 日/8 日のフランクフルトでのスポーツ会議で活発な議論の末、6 人のドイツオリンピック委員会が設立された。IOC の同意が得られればメクレンブルグが最初の会長となる。

ディエムがメンバーとなることは、少なくともドイツスポーツ界の幾つかのグループによって表明された彼の第三帝国での活動に対する反対のために問題外であった。

彼が委員になればその委員会を国の内外の攻撃の矢面に立たせることになるだろう、というのであった。

ディエムやメクレンブルグと違って、この会議の参加者の多くは委員会設立によってドイツのロンドン大会参加を達成しようというよりは、より穏当な目標“ドイツがオリンピックの理想のために働くことから除外されない”、ことを望んでいた。

その後の展開はこの遠慮がちな考え方をした人達のほうが正しかったことを証明した；
というのは 1947 年 6 月 19 日から 21 日のストックホルムでの第 40 回 IOC セッションで、
バーグレー卿はロンドン大会の準備状況についての彼の報告の中でドイツと日本は NOC
がないので招待されないだろうと述べたのである。

議事録の別の部分“ドイツ”という標題のもとでは、はっきりと次のように述べられている：“フランクフルトで設立されたオリンピック委員会は承認を拒否されている”。

エドストレームが恐れたように、IOC 委員の多数はまだドイツをオリンピック共同体の中に再び認める用意ができていなかった。特にイギリスは、次の大会の開催者として、ドイツ人が参加し、勝つ可能性さえあるのを見たいとは少しも思はなかったのである。

ドイツ（そして日本）の参加に反対する決定がプレスによって流されていたので、エドストレームは 1947 年 7 月 7 日の手紙でメクレンブルグに次のように書いた：

“当オリンピック委員会はドイツオリンピック委員会の承認は西側諸国によって新しいドイツが形成されるまで起こらないだろうという見解を取っています。それ故 1948 年ロンドンへのドイツの参加は不可能なのです”。

この文章はすでにオリンピックムーブメントにおけるドイツの地位が更に複雑なものになることを暗示していた：東と西のドイツの別々の発展は占領軍となった元の連合軍、一方はソビエト連邦、そして一方はイギリス、アメリカ、フランス、の間に生じた緊張の結果によるもので、この緊張は包括的な東西紛争に拡大し、いわゆる冷戦のうちに極度に高まり、そのメンバーが鉄のカーテンの両側からきている超国家的な組織である IOC に影響を及ぼさずにはおかなかった。

ドイツでは、関係者は当然のことながらストックホルムの IOC セッションでの決定に失望した。

メクレンブルグはエドストレームに抗議し再び IOC からの辞任を考えた。そしてディエムはできたばかりのオリンピック委員会を解散することを考えた。

しかし二人はすぐに、公爵の IOC からの辞任は彼らの目的を助けることにはならないことに気付き、オリンピック委員会を主として 1952 年大会を目指して“いわばそれとなく存在し続ける”ようにすることに同意した。

1.4.2. 招待と取り消し

その次の IOC セッション、オリンピック大会の時にロンドンで開かれたセッションにもドイツの参加はなかったが、その後の 1949 年、ローマのセッションへのドイツの参加は二年前既に起こっていたと同じような込み入った問題に付きまといわれることになった。

最初、エドストレームはメクレンブルグとディエムを招待していた。しかし 1949 年、IOC 内部に公爵がゲッベルスの“片腕”の一人であったという噂が立ち始めた。

ディエムが 1949 年 2 月 23 日のエドストレームの質問に答えて保証したように、これは全くの作り話で、人もあろうに公爵のような人に対しては全く根拠のないものであった。

しかし IOC 会長はひと月後、次のような理由で公爵の招待を取り消した。“世界大戦の間にドイツの力のもとに被害を被った国々の間に、貴方のローマへの出席に対する非常な抵抗が起こっているのです”。

同じ日、1946 年 3 月 16 日、ディエムにも、彼を IOC 委員に選出したいと思っているので出席をしないようにと要求した。

メクレンブルグは招待取り消しに非常に怒って、エドストレームに 3 月 21 日辞任の手紙を書いた：“今日、私は IOC を去ります”。しかしエドストレームは辞表を受け取らなかった。彼の指示によってディエムは公爵と相談の上それを撤回させることができた。

ディエムはメクレンブルグに、ドイツの委員がいなければドイツオリンピック委員会の承認などさらに難しくなるだろうと説得したのである。

4 月初め、ディエムは思いがけず他の招待を受けた。今回はボナコッサからであった。

そして 4 月 18 日、エドストレームも公爵とディエムに日本の委員も出席するのでやはり来るべきであると書き送った。

一日後、EC はローザンヌで再びこの件について議論し、侯爵と日本の永井委員がローマに来るならば出席を許すと決定した；しかしディエムを IOC 委員にするのはドイツ国が設立されるまでは認められないことになった。この結果ディエムは再び“除外され”家にとどまらざるをえなかった。

ドイツ国の設立までドイツに関するすべての最終決定を延ばすという EC の政策は、IOC にも採用された。ドイツオリンピック委員会の不承認は続き、メクレンブルグを新しい西ドイツの委員とみなすこともディエムを委員として選出することも拒否された。この国の設立は今や時間の問題になっていたが、まだ存在しなかったからである。

エドストレームは5月3日この結果をディエムに通知した。しかし公爵とディエムはエドストレームの一週間後に良いニュースを伝えられるだろうという言葉に大いに力づけられた。ローマの決定に照らして、彼らがドイツオリンピック委員会を確立し、活動させることを望んでいると伝えられるだろうというのであった。

しかし、これはさまざまなドイツ競技連盟の間の意見の相違のために、当面妨げられることになった。

1.4.3. ドイツ NOC の設立と承認

そして1949年9月24日、前日のドイツ連邦共和国成立宣言を記念して開催された大規模な青年とスポーツの祭典に際して、メクレンブルグの招請によるドイツ NOC の制定会議が開かれた。

ウイリー・ダウメによれば、後にドイツハンドボール連盟になる団体の当時の会長であったテオドル・ホイス第一代連邦大統領自身が“ボンにおける現在のこの偉大な日々を NOC 設立の日とするように”と助言したのである。

IOC 会長からの挨拶のメッセージが読み上げられ、それに続いて規約とメクレンブルグを会長としディエムを名誉総務主事として含む幹事会の選挙が満場一致で採択された。

ディエムは NOC の役割についてスピーチを行い、その中で彼は既に1952年大会の準備について言及していた。

1949年11月5日のケルンでの最初の NOC 総会の後、これは委員会を拡大し規約を追加し幹事会を拡大したものであったが、公爵とディエムは IOC に11月24日、規約と会員の名簿を提出し1950年5月のコペンハーゲンの次のセッションでドイツ NOC の承認を公式に要請する手紙を書いた。

ディエムはすでにスイスに IOC チャンセラー オットー・メイヤーを非公式に訪ねた際に承認の要請を告げていた。その時メイヤーは新しい NOC がドイツ全体を代表できるのかどうかを問うた。

この要請から他の問題が起こった。NOC に属するドイツ競技連盟はそれぞれの国際競技連盟のメンバーにならないといけない。これはほとんどすべてのケースで難しい交渉を必要とした。

1950年5月15日から17日まで、IOC は第44回セッションのためにコペンハーゲンに集まりそこでドイツ NOC の申請について詳細な議論がされた。

またドイツ人は一人も出席していなかった；というのは IOC 委員のデンマークの首都への招待は 1 月初めに送られていたが、その中にメクレンブルグはあったがフォン ハルトはなかった。彼のソビエト拘束からの最近の解放はまだ知られていなかったのである。そこでエドストレームは 1 月 12 日、公爵に彼がデンマークにいとドイツの申請に悪い影響を及ぼしかねないので出席を控えてはと懇請した。

しかし公爵は親しい関係にあったデンマーク王家からも招待を受けていたので、大変丁重ではあるが二通の手紙で抗議した。がしかし結局、エドストレームの希望に従った。

ディエムはローザンヌにチャンセラー メイヤーを訪ねたとき既に、彼自身はコペンハーゲンに行かない方がいいだろうと告げていた。

コペンハーゲンでのドイツ NOC の承認についての議論を始めるに当たってイギリスの高等弁務官ブライアン・フーバート・ロバートソンの手紙が読み上げられた。彼ははっきりと承認を支持していた。

IOC セッションは最後には基本的に肯定的な結論に達した。

その正確な言葉使いはセッションの会議の合間に一つの委員会によって公式化された。

“ピエール・ド・クーベルタン男爵によって定められた原則に従って、その原則はオリンピック大会の目的は全世界の若者を平和な競技に集めることであると規定している、IOC は新しく作られたドイツ連邦共和国のオリンピック委員会に暫定的な承認を与えた。この国の NOC に対してオリンピック大会への将来の参加を検討する IOC の EC に代表団を送るよう招待状が送られることになる。この討論の完全な報告書が EC によって IOC の決定のために提出されるであろう”。

従って、IOC はドイツ NOC の無条件承認を行おうとしているようには見えないが、1952 年オリンピック大会へのドイツ選手の参加に関しては裏口を開けておいたのである。

1950 年 5 月 21 日にフランクフルトでドイツ NOC の幹事会があった時には、全てはotto・メイヤーの電報に従って運ばねばならなかった：“暫定的に承認された。1952 年大会への参加は未だ条件付きである”。

ディエムは、その根拠は何であれ、“IOC の全体セッションは... ドイツの再承認を保留なしに決定した”と信じていた。そして彼はドイツ代表団のローザンヌへの招待の主な理由は分割されたドイツの代表の問題であると考えた。

しかしながら 5 月 23 日付けのメイヤーからの手紙は電報の内容と 1950 年 8 月 28 日/29 日の EC との討論のスケジュールを確認していた。そして次の日の日付のエドストレームからの手紙はさらにはっきりと雰囲気は“未だにドイツと日本に対して敵対的である”と述べており、状況が違うことを彼に教えずにはおかなかった。

IOC は戦後秩序を全面的に受け入れるには未だにはるかに遠かったのである。

こうして NOC は次の幹事会で EC に対し公式の謝罪を行うことを決めた。これはローザンヌの会議で代表团によって伝えられる。代表团は、IOC 委員としては初めての出席となるフォン ハルト、ディエム、ペコ・ボーウェンスドイツサッカー協会会長、マックス・ダンツドイツ陸上競技連盟会長、そしてダウメであった。

ボーウェンスを除いて予定された代表团のメンバーはパスポートを発行されなかった。

そこでドイツアマチュアボクシング連盟会長ゲオルグ・ディートリッヒとドイツ体操連盟会長ウォルター・コルプが彼らの代わりにスイスへ行った。

そこで彼らはディエムによって書かれた以下の声明を手渡した：

“ドイツの若い男女スポーツマンは、ほとんど世界中至る所に大変な災厄をもたらしたナチス体制の犯罪者の凶悪な行為を強く非難している。彼らはここに深い遺憾の意を表す。彼らは、平和の建設に向かって共に進んで貢献しようとする意志を証明するために、世界中の若い男女スポーツマンと直ちに団結することを許されるよう望んでいる。平和こそが、人類の恩人、ピエール・ド・クーベルタン男爵が生涯を捧げた第一の目標であった”。

代表团との討論の後、執行委員会は以下の決議文を草した：

- “1. 執行委員会は、昨日ドイツ代表团が提出した謝罪を受け入れる。そして代表团との合意に基づき、この文をブレッティン に公表し、プレスに発表する。
2. 執行委員会は全会一致で、IOC 委員が1951年5月、ウィーンにおいてドイツオリピック委員会に対し完全な承認を与えるよう、勧告する。
3. 執行委員会はヘルシンキの1952年大会にドイツ選手の参加を勧告する。オスロの冬季大会は除く”。

NOC 幹事会は1950年9月30日の会議で、ローザンヌでの話についてのボーウェンスの報告に留意して、冬季大会への参加に関しては更なる発展を待つことにした。

とくにディエムが“これから1952年までに、ドイツとノルウェーの間の理解ためには多くのことができるであろう”と強く信じていたからでる。

しかしエドストレームはフォン ハルトに1950年1月4日、オスロへの参加は全く不可能だろう、という見解を示していた。

オスロへの道には、メクレンブルグ公爵が1951年11月6日会長をやめ、フォン ハルトが彼の後継者となったときにさらに障害が起こった。

フォン ハルトは、ノルウェーの新聞“スポーツマンデン”にスポーツジャーナリスト、ウィリー・マイスルが書いた、フォン ハルトは元ナチス親衛隊の将軍であって辞任すべきだという中傷に、全く事実でないと反撃することができた。

彼の声明は以下のようなものである：

“私は決してナチス親衛隊の指導者ではなかった。親衛隊隊長でもなかったし、親衛隊

の将軍でもなかった。私は全く親衛隊に属したこともない。[...] 私はたまたま第三帝国の名誉スポーツ指導者に指名されたため、突撃隊の名誉指導者の地位を与えられただけである”。

それにも拘わらず、フォン ハルトへの攻撃はノルウェーの冬季大会へのドイツ参加の可能性に衝撃を与えることにならざるを得なかった。フォン ハルト自身はどんなことがあってもオスロへ旅することは出来なくなった。

その後、1951年5月7日から9日のウィーンでのIOCセッションでフォン ハルトはノルウェーの委員、オラフ・ディトレフ・シモンセンとドイツの参加希望について話し合う機会があった。そして二人は、ドイツは他のすべての国と同じように招待されるが、もしノルウェーの抵抗があまりに強ければ参加を遠慮するだろう、という合意に達した。

結局ウィーンでは上に引用した執行委員会前の声明の結果か、あるいは強まっている東西二極化のためか、IOCの雰囲気—主として西側の国の委員—は西ドイツNOCに対して明らかに寛大であった。

IOCはウィーンのアメリカ大使と共に、メクレンブルグとフォン ハルトのためのブランデージの介入を支持した。彼らはオーストリア入国のビザを得られず、無理に入国しようとして追い返されていたのである。

セッションの最初の日、二人のドイツ人が遅れてウィーンに到着する前に、IOC委員は反対投票なしでドイツ連邦共和国のNOC承認を決定していた。

フォン ハルトとメクレンブルグがまだIOC委員であるかどうか、新しい選挙が必要かどうかという議論は、エドストレームがIOCのメンバーシップシップは生涯のものであるという規定に言及して投票に及ぶことを拒否したので、二人にとってよい結果に終わった。

西側ドイツ統制委員会イギリス高等弁務官、ロバートソン将軍の手紙

1950年5月10日、

親愛なるバーグレー卿

お手紙を差し上げますのは、来るべき国際オリンピック委員会の会議で、ドイツ連邦共和国が1952年のヘルシンキオリンピック大会に参加を招待される合意を得られるよう貴下に最大限のお力添えを頂きたいと心から願うからです。

ドイツに対する連合国側の政策の目的はドイツがあらゆる意味で平和を愛する民主主義の国となることです。この目的は確実にすべての国の賛同を得、ドイツ自身の責任ある世論によって真に望まれているものであります。

最近の過去にドイツに起こった全ての怖い出来事の後で、私たちはこの国の若者たちの新しい出発を助けなければならない、と私はかたく信じております。彼らは将来のリーダーです。何としても彼らに、彼らの国の将来の幸せは他の国々との協力にかかっており、その国々は彼らに善意と激励を与える用意があると信じさせなければなりません。今日、ドイツの若者が自分たちの将来について途方に暮れており、過去に幻滅を感じているのは当然のことです。

私は、ドイツを国際スポーツの場に再登場するよう招くことは、ドイツの若者に平和の追求と、彼らと他の国の若者との交わりの発展に彼らの協力が求められていることを示す最善の方法の一つであると思います。そのような交わりの再開は非常に重要です。何故なら、ナチ体制の暗黒の日々のドイツは世界の他の部分から切り離され、その孤立こそが憎しみと不信を育てる条件であったからです。

ドイツに滞在した五年間、私はドイツの若者のスポーツに捧げる情熱、その力、彼らが示すスポーツ精神に大きな満足を感じていました。

{まさにこのドイツの若者がスポーツに示す情熱を考えると、私には、この若者たちを平和と民主主義の大義に引き入れることが可能であると思われるのです。}

(この部分はフランス語版のみ)

敬具

ジェネラル ロバートソン

1.4.4. 二つのドイツの歩み寄りの難しさ

一方、セッションの直前、4月22日、GDR(ドイツ民主主義共和国)にもNOCが設立された。しかしその承認申請はウイーンセッションによって適当でないとして拒否され、二つの委員会はドイツ全体のための共同委員会を作るよう勧告された。その委員会が一つのチームによってオリンピック大会に代表を送るべきだということなのであった。

もしこのレベルで合意が不可能なら、両サイドとECの間で協議しなければならない。そのための日時は5月21日、セッションが終わって二週間も経たないうちに予定された。

しかし、連邦共和国にとって東側地域、GDRの代表との交渉は、当時、尋常のことではなかった。全ドイツ省の代表、そして連邦共和国首相自身さえドイツスポーツ界の代表に東側地域との組織的なスポーツの接触を一切控えるように説得しようとしていた。

東側地域の適切な選手をオリンピックチームに加えるなら、せいぜいのところ連邦共和国NOC独自の責任においてというなら考えられるだろう。

この干渉にも拘わらず、そしてNOC指導者の他のメンバーの多くはIOCの提案に非常に懐疑的であったけれども、NOC幹事会の過半数は交渉に賛成であった。交渉は5月17日ハノーバーで行われたが無駄であった。

しかし驚いたことに、1951年5月21日と22日のローザンヌでの執行委員会との議論では、出席者はすべての国はただ一つの委員会を持つことができ、これは既に承認されているドイツオリンピック委員会のことである、という共通の見解に達した。さらに、

“一つの合意がなされた。それによって1952年大会のドイツチームはその住む所に拘らず最善のドイツ人アマチュアによって、そしてオリンピック規則に従って作られるであろう”。

この合意はドイツ連邦のNOCの期待を遥かに上回るものであったが、その為に東ドイツ代表はドイツ社会主義統一党書記長、ウォルター・ウルブリヒト自身によって非難された。

そして西側プレスによっても激しく批判された。

それにもかかわらず西のNOCは合意された線を固く守り、7月13日の次の幹事会でベルリンで予選会を開くことを決定した。これは夏の大会とガルミッシュ・パルテンキルヘンでの冬の大会を目指す東の選手も大仰な手続きなしに参加できるというものであった。

しかし1951年9月初め、GDRNOCは会議を開きローザンヌの合意は無効であると宣言し、今一度IOCによって自分たちが承認されることを要求した。そして今回が最後通告であるとした。

これに続く時期、東ドイツの選手をオリンピックの準備に加えようとする試みは益々難しくなった。そしてフォン ハルトは 1951 年 9 月半ばに、プレスに次のように告げた、

“西の NOC は、そのメンバーに対する相変わらずの侮蔑にも拘らず、関係する IOC 委員への直接の攻撃にも拘らず、ローザンヌで非の打ちどころのない決定を見た合意についての混乱した解釈にも拘らず、依然として NOC（東の）の代表とオリンピック大会への全ドイツチーム派遣を確実にするためのあらゆる方法を議論する用意があります”。

両側の使節団の会合は更に、1951 年 11 月 15 日カッセルで、20 日ハンブルグで行われたが、第一回目と同じように成果は無かった。

東西ドイツの敵対する兄弟の間の合意が不可能に見えてきたので、1952 年の夏の大会を開催するフィンランドは東側ブロックが GDR NOC との連帯のために大会をボイコットするのではないかと恐れる声を上げ始めた。

そこで組織委員会会長、エリック フォン フレンケルはドイツ連邦共和国の NOC に対してあらゆる機会を捉えてもっと柔軟な態度を取るよう説得を試みた。

エドストレームも IOC 会長として当然のことながらできるだけ多くの国々の選手がヘルシンキ大会に参加できるよう願っていた。しかし一方で西ドイツの立場に気遣っていたので 1952 年初めに再び仲介を試み、二つの NOC の代表を 2 月 8 日コペンハーゲンに招いた。

GDR の使節団はデンマークの首都に遅れて到着し、何回も勧められたにもかかわらず会議の部屋に現れず、IOC 代表が空しく去るにまかせた。そして IOC セッションで彼らの意見を述べるためにオスロへ行ってしまった。

そこでは彼らは発言を許されず、書面にした声明を手渡すことができただけであった。

しかし執行委員会は再び GDR NOC に救いの手を差し伸べた；2 月 11 日、すべての国はただ一つの NOC の承認を得ることができると確認した上で、以下のように決定した：

“それ故、ヘルシンキ大会に一つのドイツオリンピックチームを組織するために西と東のドイツの代表からなる特別委員会を構成することが必要である。この委員会は IOC 委員としてのカール フォン ハルト博士の議長のもとに東と西のドイツそれぞれの代表 3 名から成る。ドイツチームはベルリンのオリンピックスタジアムで行われる特別の試合において選ばれなければならない。この試合においてはベストの選手がその住居がこの国の東か西かに関わりなく選ばれる”。

この決定に従ってフォン ハルトは 1952 年 3 月 16 日に会合を召集したが、3 月 15 日の日付けの返事は 18 日まで届かなかった。この返事の中で IOC の批判と西ドイツ NOC に向けられた悪態に続いて、これからの交渉は“同じ権利を基礎としてのみ”始めることができるという意味のことが述べられていた。

フォン ハルトは 21 日の手紙でこの非難を退け次のように結んだ：“1951 年 3 月 15 日の手紙によって貴方は IOC のオスロ決議に基づいて計画された作業委員会の合同討議を妨げている”。彼は次の日付を提案することはしなかった。

一週間後、西ドイツ NOC 幹事会は単に“それにもかかわらず、東側地域の選手を予選に招待する”という意図を確認するにとどまった。

この基本事項に関して GDR からの譲歩が期待できないので、そして二か月に及ぶ仲介が膠着した戦線に少しの軟化の兆しももたらさなかったので、フォン フレンケルは 5 月 26 日、調停の最後の試みを行った。

彼は東ドイツ NOC に対し、GDR チームが結局大会に参加できるようにヘルシンキでの IOC セッションで GDR のメンバーシップ申請を支持すると書いた。この試みが失敗すれば GDR の選手は西ドイツチームに統合されることになる。

6 月 9 日、フォン フレンケルはベルリンへ飛んだ。そこで彼は東側の NOC 会長クルト・エーデルの大歓迎を受けた。そして GDR 政府の迎賓館に泊められた。

二日間の交渉の後、議定書がまとめられその中に次のように記録された。当 NOC としては IOC によって承認されることを期待しヘルシンキへのエントリーを提出している。そしてフォン フレンケルは GDR が独立してヘルシンキに参加することは出来ないという意見であるが、東と西の別々の予選会を提案する。

しかし 6 月 11 日の朝、この文書が両者によって調印されるはずであった時、エーデルはサインを拒否した。フォン フレンケルは空手で去らなければならなかった。

彼はフランクフルトに飛びフォン ハルトに会い、彼の行為について最初から説明した。

フォン ハルトは既に 6 月 5 日、GDR の選手は統一予選会に参加するという条件においてのみ西ドイツチームに加えられるであろう、西ドイツ NOC はベルリンの GDR NOC からのサインがあったとしても別々の予選会には同意しないだろうと返事していた。

そういうわけで、ヘルシンキオリンピック大会には西ドイツ選手だけからなる一つのチームがドイツとして参加することになった；それに、たまたまザールラントのチームが加わった。当時は未だザールラントは連邦共和国の一部ではなかったのだが。

1.5. IOC と冷戦の始まり

1.5.1. ソビエト社会主義共和国連邦(USSR)

第二次世界大戦後に起こった東西分裂のオリンピックムーブメントの活動に対する衝撃は、勿論ドイツの代表問題に限らなかった。

アメリカ合衆国とソビエト連邦の世界的スーパーパワーとしての台頭とヤルタ会談（1945年2月4日－11日）とポツダム宣言（1945年8月2日）による世界を米ソの影響力の下地域への分割は、二つの政治システムの冷厳な敵対関係に導き、そのもっとも悲劇的な側面は疑いもなくすさまじい軍拡競争による恐怖の均衡であった。

この争いの代理戦争は世界中のスポーツ競技場でも闘われた。もはやオリンピック大会は祝福された孤島ではなく、その手段として使われることになったのである。しかしこの問題の爆発的な性格はエドストレーム時代の終わりまでは完全には姿を現さなかった。

最初、ソビエト連邦を参加させるかどうかは、ごく一般的なオリンピック参加国の問題の一つであった。

帝政ロシアは、IOC 設立メンバーの一人としてブートウスキー将軍を有したことを誇りにしており、1908年と1912年のオリンピック大会に選手を送ることができた。

その後継国家、1917年の10月革命で出現したソビエト社会主義共和国連邦は“ブルジョアスポーツ”を完全に否定、それと共にオリンピック大会も拒否した。

その代わりに、1921年にレッドスポーツインターナショナルの設立に参加し、その後援の下に1928年モスクワで第一回国際スパルタキアードが開催された。

IOC は、このイベントが国際社会主義労働者スポーツによって組織された労働者のオリンピック大会とされたので、オリンピックの理念とシンボルの悪用であるとして批判したが、モスクワの新しい指導者のオリンピックムーブメントに対する無関心は、IOC に既得権と新しい要求の間に起ったであろう難しい選択をうまく回避させることにもなった。

こうした状況下で、IOC は今や全く虚構となったロシア NOC 承認をそのまま続けることができた。そして亡命してパリに住んでいたプリンス レオン・ウルソフが1933年に死ぬまで IOC 委員として残ることを許した。

ソビエト連邦は1933年に国際連盟加盟を認められ、その前年にアメリカによって承認されていたが、自ら長い間孤立の状態にとどまっていた。

しかし今や、第二次世界大戦で西側同盟国と共にヒトラーのドイツと日本に対する勝利者となった後、ソ連はアメリカ合衆国と共に世界第二の勢力の役割りを担っていた。

共通の敵の敗北のすぐ後、階級の敵との一時的な同盟は必然的に敵対関係に変質し、ソ連は西側の経済と社会制度に対する共産主義の優越性を証明しようと決意した。

そしてスポーツは彼らがそのために選んだ闘技場の一つとなった。

1945年8月の第一回執行委員会では、この戦後に出現したバランスオブパワーの問題は議論されなかったが、エドストレームとブランデージの間の往復書簡は、その後の IOC が世界の二つのブロックへの分裂を非常な懸念をもって見ていたことを示している。

そして“労働者のスポーツとロシア”のテーマは1946年9月の次のEC会議の議題として現れている。

そこではUSSRのIOC委員が選出される前に、ソビエトの競技連盟はそれぞれの国際競技連盟に加入しなければならないという結論が出された。これは次の日のECと国際競技連盟との合同会議で国際競技連盟によって支持され、次のIOCセッションによって承認された。

ECの側のソビエト人に対する不信は、国際競技連盟へのそのような加盟が行われる前にその規則が守られることを確かめるように、とのECの助言に表れていた。

ソビエトスポーツの役員は既にECによって示された方向に動き始めていた:IAAFとの交渉で、当時まだ会長代行であったエドストレームのロシア語の知識は大変役立った。

ソビエトはまだIAAFのメンバーではなかったが、EC会議の直前に開かれたオスロのヨーロッパ陸上選手権大会にUSSRの選手が参加することが合意されていた。

さらにこのイベントと同時に開かれるIAAFコンGRESSにソビエト代表団がゲストとして出席するだろう。

ソ連はIAAFに所属するまで更に二年待たなければならなかったが、国際ウエイトリフティング連盟には1946年に加入した;そして次の年ヨーロッパレスリング選手権大会に選手を送った。

1947年のECと国際競技連盟との次の会議でソビエト競技連盟の承認が再び議論された。主としてロンドン大会への招待が可能かどうかに関してであった。

組織委員会会長のバーグレー卿は以下の議事録を書き留めている。国内競技連盟が国際競技連盟に加入したらNOCが設立されなければならない、もしIOCがそれを承認したら招待されるであろう。

大会の前にこの手続きが完了するにはあまり時間が残されていなかった。いずれにせよ、USSRは早期に参加することにあまり熱意を持っているようには見えなかった。

その結果、1948年大会はソビエト選手なしで行われた。

1949年と1950年もIOCの組織に関する限りUSSRの参加は見られなかった。

それにもかかわらず、IOCのリーダーとソビエトの役員との接触は続いていた。その間にエドストレームがとくに指摘したのは次のことであった。IOC委員を囚人として長く拘束し続けているような国は会員としての申請の際に困難を経験するだろう。

多分この指摘が1950年の新年にソビエトがドイツのIOC委員フォン・ハルトの解放を決定する理由の一つとなったのであろう。

この障害が取り除かれ、IOC の国内オリンピック委員会設立のための条件がソビエトの数多くの国際競技連盟への加入によって整うと、USSR の NOC は 1951 年 4 月、モスクワで設立され、直ちに IOC セッションによる承認を申請した。セッションは 5 月にウイーンで予定されていた。

同時に、NOC 会長コンスタンチン・アンドリアノフが新しい NOC によってソ連の IOC 委員として選出されるよう推薦された。

EC は 5 月 3 日の会議でこの新しい状況を議論し、セッションに対してその承認と USSR からの IOC 委員への選出を勧告した。しかし通常のやり方と違って、候補者を提案することは控え、これはセッションの事案であるとした。

セッションは 5 月 7 日、会議の最初の日はこの件を議論した。そして長い議論の末、ほとんどすべての発言が賛成であったので、ソビエトの申請は反対票なしで受け入れられた。

委員の大半、出席者 34 人のうち 24 人がアンドリアノフの選出に賛成した。そして彼は既に到着していたので、エドストレームは午後の会議で彼を皆に紹介することができた。

しかしソビエト体制の独裁的な性格のために、IOC は過去のファシスト国家との場合と同じように、オリンピックムーブメントの根本原則の一つを譲歩せざるを得なかった：USSR の NOC もアンドリアノフ自身もクレムリンの政府から独立ではないだろう。

1952 年のオスロ冬季大会にはまだソビエトの選手はいなかったが、フィンランドの組織委員会、そしてとりわけその会長のフォン フレンケルにとって大きな喜びとなったことに、夏のヘルシンキの大会にはフィンランドの東の隣人から大選手団が参加した。フォン フレンケルはソビエト NOC の設立のために疲れを知らず奔走したのであった。

このチームは非公式な国別ランキングでアメリカに次ぐ 2 位の成績を挙げてセンセーションを巻き起こした。

なお、フィンランドは二次世界大戦のあと何年も、ソ連からの圧力の下にあり、常に、友好的な中立性を守らなければならなかった国であったことは注意しておくに値する。

1.5.2. 東ヨーロッパ

他の東ヨーロッパの国々の状況はソ連のそれとは根本的に違っていた。アルバニアを除いてそれらの国々にはすべて戦前に NOC があり、ほとんどが IOC 委員を持っていた。

大戦後ソビエト領に併合されたバルチック三国のオリンピック委員会は問題にならなかった。これらの国々からの IOC 委員について言えば；エストニア人、ヨアキム・プークはソビエトの収容所で死亡したようであるし、ラトビア人、ジャニス・ディクマニス、フォン ハルトのとりなしで危うく同じ運命を逃れたが、1947 年半ばに辞任していた。

“ビッグブラザー” の政治支配下に次々に陥った他の国々の NOC は、少なくとも形式上は、存在を続けた。しかし戦前のそれらの国の IOC 委員で 1946 年末まで生き残っていたのはわずか三人であった：ポーランド人、イグナシー・マツゼウスキーは戦時中にアメ

リカに逃れることに成功したが、奇妙なことに 1946 年 10 月の IOC ブレッティン 第一号にはもはや名前が載っていなかった。ハンガリー人、ニコラス・ホルシー ジュニアは父親の親ナチ政策のために祖国では今や好ましからざる人物であった。そしてユーゴスラヴィア人、スベトミール・ジュキックはイギリスの戦犯収容所にいた。

チェコスロバキア人、ヨゼフ・グルッスは、1946 年のローザンヌセッションでグート・ヤルコフスキーの後継者として選出されたが、1929 年以來の NOC 会長であった。というわけで彼が東ヨーロッパ諸国からのただ一人の“正規の” IOC 委員であった。彼の祖国の共産主義者による支配の結果、1951 年に NOC 会長を辞任させられ、IOC 委員としては最後まで国からの圧力の的となった。それでも 1965 年までその任に留まることは許された。

IOC が新しい東ヨーロッパの委員を認めることにことさら熱意を示さずに 1947 年が過ぎ去った後、EC と 1948 年のサンモリッツ冬季大会に関連して開かれたセッションは再びこの問題に取り組んだ。

ポーランドについてはジェルジー・ロートが、亡命中 1946 年にスコットランドで亡くなったスタニスラス・ルーパートの後継者として選出された。1946 年後半のフランジョ・ブッカーの死の後空席となっていたユーゴスラヴィアの二番目の委員にはスタンコ・ブルーデックが選ばれた。彼はユーゴスラヴィア NOC の設立メンバーで 1947 年以來会長であった。

会議の終わりにハンガリー人委員ホルシーが追放されたのに辞任に同意しなかったのも、セッションは 1928 年のオリンピック文学競技の金メダリスト、フェレンク・メッツを後継者に指名した。彼は長年ハンガリー NOC の事務局長として勤め、後に副会長となった。

新しく選ばれた三人の委員のうち誰も心から新体制を支持してはいなかったが、それぞれの政府と、少なくとも充分に年をとるまで或いは死ぬまで、IOC に留まることが許されるよう折り合いをつけることができた。

ブルーデックが候補者となったことは、たまたま IOC が大戦前に全体主義国家との間に既に経験していた紛争を引き起こすことになった。しかしこれは将来、西と東のイデオロギー的な敵対関係のスポーツによる競争に大きな役割を演ずることになる。

EC に紹介された時、このユーゴスラヴィア人候補者は、明らかに体制と彼自身との間に距離を置くことなく、次のようなことを述べた。彼の国では選手は政府によって報酬を支払われている。そしてユーゴスラヴィアのスキーヤーはオリンピックの準備のために強化合宿で何か月も過ごすことができる。

ブランデーとオランダ人委員シャルーは、ブルーデックをセッションで委員として承認のために指名すべきかどうか公式に投票することを要求した。指名に賛成の投票の方が多かったが、彼らのブルーデック委員指名に対する保留は議事録に記録された。

1948 年のロンドンセッションで IOC は、ブルガリアの委員としてウラジミール・ストイチェフ、チェコスロバキアの第二の委員としてのウイドミンスキーの選出、そしてハンガリーとポーランドの二番目の委員選出の動議を、拒否或いは先送りにした。

1948 年末のジュキックの退任で、IOC は今や共産主義勢力のものとなったブロックに戦前から残っていた最後の委員を失った。

こうして 1949 年の初めに、ユーゴスラヴィア、ポーランド、チェコスロバキア、ハンガリーの IOC 委員はそれぞれ一人になった。これらの 4 つの国の選手は 1948 年の夏と冬の大会に既に参加していたが、ブルガリアとルーマニアはサンモリッツには参加したもののロンドンの大会にはチームを送らなかった。

1952 年のオスロ大会の際に開かれたセッションで、ブルガリアはついに成功し、最初 4 年前に立候補が可能であるとして推薦されていたストイチェフが IOC 委員に認められた。

同じ時に、USSR がその大きさとスポーツにおける重みに相応しく、第二の委員を認められた。

そしてアルバニアを除くすべての東側ブロックの国がヘルシンキの夏の大会に参加した。

1.5.3. 中国

オリンピックムーブメントの中で東ヨーロッパの国々と西側との間に平和的共存の形としてある種の暫定協定が達成されたのに対して、極東では IOC 内部に新しい紛争を巻き起こす政治的混乱が起こっていた。

1948 年のロンドンオリンピック大会には蒋介石の軍事独裁の下にあった共産化以前の中国から一つのチームが参加したが、1950 年までには毛沢東の率いる共産主義者が中国本土全体を征服していた。

いわゆる国民党中国は台湾島に撤退せざるを得なくなり、アメリカの庇護のもとに彼ら自身の国を作ったが、これが西側によって昔の中国の正当な後継者とみなされた。

その結果、中国本土では中華人民共和国が成立を宣言し、1950 年に USSR と相互援助条約を結んだが、国連加入からは締め出されていた；IOC もこの西側の線に従って 1951 年 6 月のブレッティンに台北（台湾）の住所を載せた。そこに IOC が中国 NOC として承認していた国内アマチュア競技連盟の事務所とほとんどのメンバーが避難していた。

しかしその間に、人民共和国に新しく作られた全中国競技連盟が自らを正当な中国 NOC とみなし、IOC とストックホルムの中国大使館を通じてフィンランド組織委員会に接触してヘルシンキへの招待を要請した。

フィンランドの赤い中国の大使もその為にフォン フレンケルに対して運動した。

そして 1952 年のオスロ冬季大会の間に、新しい団体の代表チェンチペ（Cheng Chi-pai）が IOC セッションに承認の申請を提出した。

しかしどの国際競技連盟が人民共和国の国内連盟を参加させているか分からなかったし、エドストレームがチェンチペに説明したように、国際競技連盟を通じるのがこの承認を得られる道なので、IOC は取りあえず最終決定を避けることができた。

さらにブランデーは、いかなる決定をするにしてもその前に三人の中国人 IOC 委員に相談すべきであるという意見であった。

1932 年から 1939 年の間に何回か中国の外務大臣を務めた 王正廷 は 1922 年に最初の中国人 IOC 委員として選出されていた；中国銀行の頭取、孔祥熙は 1939 年に中国の二番目の IOC 委員となったが毛沢東の革命を逃れて当時は香港とニューヨークに住んでいた；最後に中国 NOC の総務主事であった 董守義 は 1948 年のストックホルムセッションで IOC 委員に選出されていたが中国本土に残り、中国委員会の前の本部のあった南京から北京に移っていた。

こうしてセッションはこの三人に手紙で接触することを決めたが一なんとか住所が分かるのは 孔祥熙 だけであった—それに国際競技連盟に人民共和国の国内競技連盟を承認しているかどうかをたずねなければならなかった。もし過半数が否定的な回答をすれば、人民共和国の選手は招待されないであろう。

“中国問題”はヘルシンキの夏の大会の際に開かれた会議で再びかなりの時間をとった；人民共和国の選手団がレニングラード—現在のセントペテルスブルグ—でフィンランドに入ろうと待っていたので、非常に差し迫った問題となっていた。彼らの NOC は未だ承認されていなかったのだが、全中国の唯一の代表であると主張して招待を待たずに選手団を送っていたのである。

セッションでエドストレームは 7 月 17 日の朝、まず何よりも台湾の NOC だけが承認されていることを確認したが、執行委員会はヘルシンキ大会には二つの中国はどちらも参加さすべきではないという意見であった。

フォン フレンケルは承認されている台湾の NOC は大会から排除されるべきではない、そして人民共和国の選手も同じように参加を許されるべきであると主張した。

ベルギーの委員ゼールドライエルスはフィンランド人を支持し、サッカー、バスケットボール、水泳を含むいくつかの国際競技連盟は共産中国からのメンバー加入を認めていることを指摘した。

この最初の議論の後、二つの中国の代表が彼らの主張を説明するように招かれた。

台湾のスンホグン(Sun-hoh Gun)は NOC 委員 25 人のうち 19 人が現在台湾に住んでいることを指摘した。一方チェンチペは六億の中国人を代表して話しているのだと強調し、国民党中国の NOC の即時追放を要求した。

エドストレームはこの要求を受け入れようとせず、長い議論の後、次のような決議草案の選択肢を投票にかけよう提出した：“ヘルシンキ大会にはどの中国チームも参加できない” 或いは “大会に両方の中国チームが参加できる”；第一案が 22 票、第二案が 29 票を獲得した。

フランス人委員フランソア・ピエトリによって提案されたより綿密な動議は、執行委員会の反対にもかかわらず、出席した委員 53 人のうち 33 人の賛成を得た：

“IOC は、全中国競技連盟と台湾の中国国内オリンピック委員会のそれぞれの状況（原文のまま）に関する最終判断を保留するが、その結論は主として二つの国の国際的地位の正確な決定を待つものとし、この二つの組織の選手の参加については、ヘルシンキ大会の組織委員会の合意を得て、国際競技連盟によって承認されているそれぞれの国内競技連盟の種目に限り、許可するものとする”。

次の日ブランデーは、参加許可は赤い中国の NOC 承認を意味するものではなく、IOC が旅をしてきた選手に対する同情からその規則を破った例外的な措置であって、いかなる場合も先例とはならないと理解されるべきである、という声明を発した。

エドストレームは赤い中国の代表団から、彼が出した手紙に対して返事を送ってこない IOC 委員、董守義 が死んだのではなく北京に住んでいると聞いて、董 に直ちにヘルシンキに来るよう要求した。

董 は三日後 8 月 2 日、執行委員会の最後の会議に間に合うよう到着した。

しかし彼は一人ではなく、中国語しか話せないのといって通訳を一人連れてきた。

エドストレームはこの IOC 委員がアメリカで学び何年も中国の YMCA で働いており、1948 年に流暢な英語で会話したことを思い出して、怒って彼を通訳と共に部屋から追い出した。

董 はそれにも拘らず IOC に残り 1955 年から 1957 年まで再びセッションに参加した。

そこで彼は上手な英語を話し、確信を持った共産主義者の立場をとってブランデーを激しく攻撃し、台湾追放を要求した。

しかし人民共和国が、その NOC は 1954 年に IOC によって承認されていたのだが、1958 年 8 月 25 日、オリンピックムーブメントから決別した時に、董 は IOC 委員をやめなければならなかった。

IOC の決定にもかかわらず、1952 年のヘルシンキオリンピック大会には中華人民共和国からたった一人の選手しか参加しなかった。

1.6. オリンピック大会

1.6.1. ロンドンとサンモリッツ、1948 年

第二次世界大戦が終わって、組織としては比較的傷つくこと少なくこの時期を生き抜いた IOC は直ちにその本来の仕事、すなわちオリンピック大会の開催に取り組んだ。

ロンドンはすでに 1939 年のセッションで 1944 年大会に名前を挙げられていたが再び関心を示した。そして 1945 年 8 月のイギリスの首都での会議に出席した執行委員会（EC）の三人の委員はウェンブレスタジアムを訪れた後この立候補を支持した。

ロンドンが郵送による投票で成功をおさめ、次の年のローザンヌのセッションで追認された。

これについては、二回の大会の休止とそのための IOC の収入の不足があったので、財政的な面が果たした役割を過小評価してはならないだろう：大会組織委員会はローザンヌに対して 5,000 ポンドと利益の半分を送金することを申し出ていた。

バーグレー卿の率いるロンドン組織委員会はすでにかなり前から存在していて、セッションの前の日に開かれた執行委員会と国際競技連盟代表団の評議会の合同会議で準備状況の進展、選手の宿泊の計画、競技場、競技プログラムについて報告していた。

プログラムはそれぞれの競技の代表者と一つ一つのポイントごとに検討された。ただし陸上競技は例外であった。というのはひと月前に IAAF のコンGRESSで合意が成立していたのである。従って IOC セッションはそれを承認すればよかった。

さらにバーグレー卿からの提案でセッションはイギリスの日曜日には競技を行わないことを決めたので、大会は憲章に定められているよりも二日間伸びることになった；準備期間が短いことから、セッションはまた組織委員会に対し、参加国が 6 つより少ない競技または種目をキャンセルすることを許可した。

ロンドンにどの国を招待するかという問題に直面して IOC は、1944 年にアバデア卿が既に主張したように（上記参照）、1920 年に作られた伝統に従い NOC のある国だけを招待することにした。占領下にある地域、すなわちドイツと日本は彼ら自身の統治組織ができるまで無視することが可能になったのである。

プログラムの詳細については、IOC は 1946 年に採択された線に従い EC と国際競技連盟の間の合意にほとんど任せた。

例えば、1947 年の IOC 議事録にはロンドン大会のプログラムに採用された 3 つの新しい女性の陸上競技種目については何らかの議論が行われた形跡がない。

しかし IOC は提案された女性のための新しい競技の導入に全て賛成する用意はなかった。1946 年のセッションで推奨されていたホッケーのトーナメントと馬術競技への女性の

参加は拒否した。一方最初のカヌー競技と体操の団体には賛成した。

IOC ブレッティン でロンドン組織委員会はその準備の進展についてオリンピックファミリーに対してかつてないほど詳しく伝えた。1947年4月に暫定的なプログラムが公表され、その年の9月にプログラムの最終版が続いた。

1948年の冬季大会の開催地に1946年のローザンヌセッションは前年の執行委員会の勧告に従ってサンモリッツを選んだ。中立国であったスイスは、大きなスポーツ大会を開催するための比較的良い条件を提供することができた。

FISは、1946年10月1日以後報酬を受け取っての指導を行っていないスキーインストラクターには参加を許すというIOCが受け入れることのできる妥協案、に譲歩して、スキーがオリンピックプログラムに再び含まれることになった；アルペンの複合種目と共に滑降と回転が別々の種目として初めて予定された。

1948年のオリンピックの年はこうしてサンモリッツの冬季大会で始まった。

1月30日から2月8日まで続き、凡そ700人の男女の選手が28ヶ国から参加した。

上に述べたスキー種目、これは男女別々に行われた、と共にスケルトンも1928年と同じ場所で行われた。今回はデモンストレーション種目として、これまで何回も行われた軍隊パトロールレース、これにはIOCは1946年に反対の意向を示していたが、と共にノルディックスキー、ピストル射撃、滑降、フェンシング、乗馬から成る冬の五種競技が行われた。

スイスNOCはこの両種目に“本物の”メダルを与えられるようにと努力した。しかし1948年8月の、二つの異なった近代五種競技を統一する競技連盟の結成も状況を変えることは出来なかった。

サンモリッツにおけるIOCと組織委員会の間の最も深刻な対立はアイスホッケー競技によって引き起こされた。二つのアメリカチームが出てきたのである。このためにセッションの議論の時間の大部分が費やされた。

一つはアメリカホッケー協会（AHA）の派遣したチームで、AHAは国際アイスホッケー連盟（IIHF）に承認されている団体で1947年のプラハでの世界選手権に参加していたが、アメリカNOC（USOC）には加盟していなかった。このチームは正しくエントリーの手続きをしていた。もう一つは全米体育協会（AAU, Amateur Athletic Union）からのチームで、AAUはUSOCに属していたが、4日遅れでエントリーしてきた。

ECは仲裁役として、二つのチームとも試合には出られないと決定した。しかしこの決定をするに際して大会組織委員会を考慮に入れていなかった。

スイスからの猛烈な抗議があって、そのスポークスマンの一人はレイモンド・ガフナー、当時のスイスアイスホッケーリーグ会長だった、AHAのチームは試合することが許された。

これに対してブランデーは AAU がアメリカの全てのアマチュアスポーツを代表する組織であると反撃した。

ド ポリニャックとゼールドライヤーは何とか IOC に、二つのチームを締め出すという EC の最初の決定を確認させたが、組織委員会はそれにかまわず物事を進め、AHA チームは最初の試合を行うことができた。

三人からなる IOC の調停使節の、この試合はオリンピックの試合には入れないという提言に対して、国際アイスホッケー連盟はすべてのチームを引き上げてチューリッヒで世界選手権を行うと脅しをかけた。

これにも拘わらず、IOC は 1 月 30 日使節団の勧告を確認して AHA チームを認めた組織委員会に抗議し、LIHG からアマチュアアイスホッケーを管理する国際連盟としての承認を取り消した。

しかし多分この決定がスイス側と国際プレスに巻き起こした大変な抗議のために、IOC は組織委員会が提案した妥協案を結局受け入れた。つまりトーナメントは続けるがこのアメリカチームはオリンピックの成績には勘定しないということになった。

そして冬季大会のちょうど約 6 か月後、7 月 29 日から 8 月 14 日まで夏の大会がロンドンで行われた。

1936 年ベルリンで始まった聖火リレーが、最初、イギリス組織委員会の側にためらいがあったが、執行委員会の申し入れに従って復活した。その道筋はドイツを避け、ローザンヌのクーベルタンの墓で未亡人出席のもとに記念式典が行われた。

ロンドンでの開催は戦争の後の経済的な困難もあり、この“30 代の人たちのための大会”が成し遂げたものが全体として戦前のものに劣っていたのは仕方がないが、ロンドンはおよそ 10 万の観客の前で競った 59 ヶ国の選手の“オリンピック”の名に相応しい競技を目の当たりにした。

この大会ではまた、ロンドンとその周辺に放送されたテレビによって、さらにおよそ 50 万の人々がこのイベントを共に楽しむことができたのである。

1.6.2. ヘルシンキとオスロ、1952 年

1952 年に二つのスカンジナビアの首都、オスロとヘルシンキで、冬と夏の大会を開催する責任者達は、1948 年の主催者、イギリスとスイスに比べて十分な時間があった。

IOC は 1948 年のストックホルムセッションで二つの北欧の都市にオリンピックを委託した。これは初めて、正式な指定の手続きを守って行われたのであった：それぞれの立候補都市は 30 分のプレゼンテーションを行った；それに続く議論では、その国籍から依怙贔屓をされると考えられる委員は討論から外された；その後で、委員たちは一つの立候補都市が絶対過半数を得るまで投票を繰り返した。

ヘルシンキは 1940 年大会のために精力的なキャンペーンを行ったことがあったにもかかわらず、アムステルダムとアメリカの 5 つの都市に対して二回の投票を勝ち抜かなければならなかった。一方オスロは、第 1 回の投票でコルチナとレイクプラシッドにはっきり差をつけた。

ヘルシンキでは、既に何度か名前の挙がったエリック・フォン フレンケル市長を頭に組織委員会がすぐさま結成された。

フィンランド人と IOC の間の議論の二つの大きなテーマは、この主催国がある程度従属的な関係にあったソビエト連邦からのチームの初めての参加、そしてドイツと日本のオリンピック大会への復帰であったが、これらは仕事の最初の部分で扱われた；三番目は、いつものように、プログラムの確定であった。

ヘルシンキはオリンピック開催都市としては比較的小さかったし、大戦の経済的な後遺症にまだ悩まされていたので、贅沢で華やかな大会にはしたくなかったし、不可能でもあった。

したがって組織委員会はプログラムの拡大には興味を示さなかった。反対に縮小することを望んだ。フィンランドの利益の代弁者として、フォン フレンケルはとりわけチーム競技が膨れ上がることに反対し、サッカートーナメントを前もって予選を行い 16 チームに制限することを提案した。そしてフェンシングの団体戦と女性の体操を共に削除するよう提言した。

フィンランドでは、未だに女性のためのスウェーデン体操の伝統が根強く、女性が競争するスポーツ全体に対して敬遠する風潮が一般的に強かったのであろう。

そしてフォン フレンケルは、いわゆる健康への害を理由に、女性の陸上競技プログラムを半分にすることを提案した。

しかしながら 1948 年のロンドンのように国際競技連盟が執行委員会と共同してプログラムの構成には最終決定権を握っていたので、当然のことながらどちらもプログラムの削減に賛成する筈はなかった。

従ってフォン フレンケルが 1949 年に詳細な計画書の形で IOC の委員会に提出したフィンランドの提案が全く無視されてしまったのは、ほとんど驚くに当たらない。

フィンランド人の“これ以上大きく育った大会”は誰も組織することができなくなるだろうという警告にもかかわらず、プログラムは 1950 年のコペンハーゲンセッションでロンドンに比べて 13 種目、合計 145 試合増えることになった。

国際ホッケー連盟だけがオリンピックでのトーナメントのチームの数を 12 に制限することに同意すると宣言した。一方オリンピックのサッカーで予選をする案は 1960 年まで実施されなかった；ヘルシンキではエントリーした 23 チームすべてが試合することができた。

しかしIOCはコペンハーゲンでフィンランド人の要求を一つだけ受け入れた:フォン フレンケルは芸術競技を、これには普通、ごくありきたりの水準の作品が受け入れられていたが、芸術展示に変えるべきだと要求していた。ギリシャのIOC委員ボラナキの抗議によって1951年のセッションは、芸術競技はオリンピック憲章に従って開かれるべきだとしてコペンハーゲンセッションの決定を覆した。しかし組織委員会はIOCの要求を満たすにはもはやあまりに時間が足りないといって屈伏しなかった。

この芸術競技を芸術作品の単なる展示に止めたことは、クーベルタンのオリンピックについての理念、大会は身体的能力の達成と同時に知的、芸術的な業績の競争であるべきだという考えからの決別を印すものであった。

1952年のオリンピックイベントはいつものように冬季大会で幕を開け、オスロで2月14日から24日まで、第6回オリンピック冬季大会として30ヶ国およそ730人の選手が参加して行われた。

プログラムは1948年のものと同じであった;過去何回も行われたスキーパトロールだけが最終的に削除され、デモンストレーション競技としてのバンディーに置き換えられた;アルペンスキーでは男性と女性の複合種目が消え新しく導入された大回転に取って代わられた。ノルディックスキーでは女性の5キロレースが初めて行われた。

夏の大会は7月19日、フィンランドの首都で始まった。

挑発にも近い態度で、組織委員会はパーヴォ・ヌルミを今や伝統となった聖火リレーの最終ランナーに選んだ。このフィンランドの走るアイドルは、アマチュア規定に触れたとして1932年IOCから生涯出場停止の処分を受けていたのである。聖火リレーは1940年に予定されていたヘルシンキ大会でも計画されていた。

ヌルミのスタジアム周回への嵐のような歓声は開会式のハイライトとなり、IOCと、ヌルミの同国人が彼の処罰に責任があると考える退任するエドストレーム会長に対する抗議のデモンストレーションとなった。

何人かのIOC委員は当然のことながらこの挑発に非常に苛立った。

ヌルミはオリンピック聖火台に火を灯すと、松明を1912年と1920年のオリンピックノルディックスキーチャンピオン、ハンネス・コールマイネンに渡した。彼はそれで取り消された1940年大会を記念する第2の聖火台に灯した。

ヘルシンキ大会はフレンケル自身が“貧乏人のオリンピック”と書いているが、臨機応変の対応によって特徴づけられた。スタジアムの収容能力は臨時に付け加えられた木製のスタンドによって増やされた。そして大勢の観客が地元のホテルやレストランの収容能力を上回ったので、多くが野外の屋台で食事を取り、若者たちはテント村に泊った。

それにもかかわらず、大会は競技のやり方の非常な正確さで際立った。

そして何よりも、フィンランドの人達の大変なホスピタリティがあった。
カール・ディエムはそれを“高潔な心温まるオリンピック”と名付けて評価した。

1.7. 地域大会

1.7.1. 第二次世界大戦後の地域大会

1947 年の初めの会議でインドの IOC 委員ソンディは西アジア大会と極東大会をアジア選手権の形で復活したいと述べた。

インド NOC のためらいにもかかわらず、ソンディはロンドンオリンピック大会に参加したアジアのチームの代表と 1948 年 8 月 8 日彼の提案を討論した。代表たちの大多数はアジア連盟を結成し、4 年ごとにアジア大会を開くことに賛成した。そして第 1 回大会は 1950 年ニューデリーで行われることが予定された。

ソンディは時の IOC 会長も説得することに成功し、エドストレームは 1948 年にロンドンで開かれた IOC セッションで地域大会復活の提案をした。

1949 年 2 月にニューデリーで開かれた会議でアジア大会のための連盟が設立された。

そして IOC の規約に従った規約を採択し、4 年毎に大会を開く意志を再確認した。この大会は陸上競技と水泳競技と同時に芸術競技も含むことになっていた。

1950 年の大会の開催都市にニューデリーが決定した。そしてマニラが 1954 年の大会を開催することも決まった。

アフガニスタン、インド、ビルマ、パキスタンが直ちに新しく作られた連盟のメンバーになった。一方ネパール、セイロン、インドネシア、タイはそれぞれの国のスポーツ連盟の賛成を得た後で参加することになった。

最初のアジア大会は準備段階で起きた組織的な困難のために二度にわたって延期せざるを得なかった。しかし 1951 年 3 月 4 日ついに最後の準備が整った；11 ヶ国からの 478 人の男女スポーツマンが 4 万の観客の前を行進した。そして以下の競技で競い合った：陸上、水泳、水球、自転車、重量挙げ、サッカーそしてバスケットボールであった。

パンアメリカン大会のプロジェクトは大戦の初期に現れた。それまで一つの大陸に限られていた地域大会を広げるためであった。

1940 年にパンアメリカン kongress で表明された意図に従って、この大会の第 1 回は 1942 年にブエノスアイレスで開催が予定されていた。しかしこのプロジェクトはアメリカが戦争に次第に深く巻き込まれたために棚上げせざるを得なかった。

ブランデーはパンアメリカン大会委員会の議長に選ばれ、このプロジェクトを潰さないために大きな役割りを果たした。彼は南アメリカ大陸全体を頻繁に旅した。

ブランデーは 1946 年ローザンヌで開かれた戦後第 1 回の IOC セッションで、交渉についての報告書を提出し、第 1 回パンアメリカン大会はブエノスアイレスで IOC の後援の下に 1950 年に開かれるであろうと発表した。

第 1 回パンアメリカン大会が開かれるためにはまる 1 年待つことが必要であった。その式典とプログラムはオリンピックの式次第から多くの着想を得ていた。

その時以来この大会は規則正しく 4 年毎に開かれてきた。

この大会に先立ったのは、中央アメリカとカリビアン諸国の大会（バランキージャ、1946 年）とボリビア大会（リマ、1947 年）であった。

アフリカ大会は、大戦の前は植民地勢力によって妨害されていたのであるが、国際的な協議事項の中に再び登場した。

エジプトの IOC 委員、モハメッド・ターヘル・パシャがエジプト NOC と共にそのようなイベントを開催する可能性を考えていると発表した。彼はボラナキが 1932 年にギリシャの市民権を得、後にギリシャの IOC 委員になったので、その後継者となっていた。

しかし、アフリカのどの国もそのようなイベントに参加するに十分な力のあるチームを持っていないことが、すぐ明らかになった。

その結果、1948 年のサンモリッツの IOC セッションで、計画されていたアフリカ大会を地中海諸国の地域大会に置き換えることが決定され、第 1 回を 1950 年にする可能性が言及された。

しかしエドストレーム会長が、同じ年にヨーロッパが陸上と水泳の選手権大会を計画していることを指摘したため、IOC はこの大会は次の年まで延期することを勧告した。

1951 年 9 月にターヘルはアレキサンドリアのスタジアムで第 1 回地中海大会を開催した。これは他の地域大会と同じように、地中海に接する国々の国際的な定期的イベントとなった。

1950 年代の最初に、IOC と執行委員会は計画中の地域大会の準備についての定期的な報告を受けた。そして必ず起こる困難を処理するための委員会をつくることを決めた。

1951 年のウィーンのセッションでパンアメリカン大会の式次第（オリンピックの旗と宣誓が使われていた）が批判的となった。

そして地域大会のためにオリンピックのシンボルを付けた旗を作ることはターヘルの意図であったが、それが禁止されたので、地域大会に関する物事を検証するために再び作業グループが設置された。

ブランデー、ボラナキ、ターヘルから成るこのグループは 1952 年のオスロセッションで報告書を提出したが、それは明らかに皆が完全に満足するものではなかった。

オスロでもう一つの委員会が作られブランデー、ボラナキそしてマッサールが入った。

二日後に地域大会の規則の草案が作られた。それによれば、地域大会は以下のような

ければならない：

“オリンピックの理念に奉仕し、IOC の後援と監督のもとに置かれ、4 年毎に、可能な
らオリンピックの第3 年目に開かれ、アマチュアだけが参加可能で、NOC を持つ国だ
けに開かれており、オリンピックの優勝者は参加を禁じられ、オリンピックの式次第(旗、
聖火、賛歌、鳩の解放) に準拠して祝われ、“オリンピック”そして“オリンピック”
の言葉の使用は禁じられ、プログラムはIOC、当該NOCそしてIFによって作成される”。

この提案もまた受け入れられなかった；提案に対する留保は、とりわけ大会の時間内の
準備とオリンピック優勝者が出場できないことに関わっていた。

委員会は提案を修正することを求められた。1952 年のセッションの間に新しい案文がブ
ランデーによって提出されたが再び激しい議論を巻き起こした。

フランソア・ピエトリは、結局のところ、地域大会がオリンピック大会に対する脅威と
なっているのだと考え、この二つのイベントの間の一切の混乱を解消すべきだと考えた。

同じ考えで、ロドルフ・ウイリアム・ゼールドライエルスは炎の持つ象徴性を使うこと
の禁止を求めた。

1946 年以來のギリシャの IOC 委員ジェアン・ケトセアスは、そうではなくて、IOC はオ
リンピック聖火の使用だけを禁ずることができると考えていた。

ブランデーは誰も地域大会の開催を妨げることは出来ないし、IOC 後援の条件は幾つ
かに限られるし、限るべきだと指摘した；彼の意見では、IOC が管理できるのはオリンピ
ックエンブレムの保護に関係した分野だけである。

このプロジェクトは最終的に採択され、EC は幾つかの追加を挿入しその規則を公開す
る仕事を任された。その規則は 1952 年 11 月のブレッティン に掲載された：

国際オリンピック委員会の後援を受けるために、そしてオリンピックの旗を掲げること
を許されるために、地域大会は最小限以下の要求に従って行われなければならない：

1. 大会はアマチュア選手に限られなければならない。大会は 15 日間以上の期間に延長
されてはならない。
2. 競技者は国際競技連盟のメンバーである国内競技連盟に属していなければならない。
そして参加国は国際オリンピック委員会に承認された国内オリンピック委員会を持って
いなければならない。
3. オリンピックムーブメントの高い理想（これらの大会はそれに奉仕しなければならないが、クーベルタン男爵はオリンピック大会を補うためにこれらの大会を開催するこ
とを薦めている）をさらに広めるために、大会は国際オリンピック委員会によって承認
された国際競技連盟によって管理される競技スポーツに限られなければならない。大会
は見本市や展覧会のような他のイベントと一緒に開催されてはならない。また他の重要
な競技大会が同じ時に行われてはならない。

4. 大会はオリンピック大会の前後12ヶ月以内に開催されてはならない。大会は同じ地域で4年に1回以上度重なって開催されてはならない。参加選手は指定された地域の者に限られなければならない。
5. 大会の式典はオリンピック大会のものに似ていてもよいが、同じであってはならない。大会に異質なイベント、特に政治的性格のものが結びついてはならない。拡声器はスポーツの目的のためにのみ使われねばならず、政治的演説は許されない。商業的あるいは政治的な介入は一切あってはならない。
6. 審判員や役員の指名を含む大会のための技術的準備のすべての管理は国際競技連盟の手の内になければならない。プログラムにある競技のそれぞれの国際競技連盟の代表者が、施設が十分であり、整っていること、従うべき競技規則を確かめるために、大会開会の前に十分な時間的余裕をもって参加できるよう準備されなければならない。
7. それぞれの国際競技連盟の権限外の紛争を収める目的のためにのみ、オリンピック規則49条に記されているものに似た国際控訴裁判所が設置されなければならない。
8. 大会の規則と規定はIOCと関係国際競技連盟全ての承認を得るために提出されなければならない。それらはすべての参加者が十分に知ることができるように、二つ（フランス語と英語）或いはそれ以上の言語で準備されなければならない。
9. IOCの代表が出席するための用意がされなければならない。その委員はIOCに対する大会の完全な報告書を準備しなければならない。
10. “オリンピック”と“オリンピアド”という言葉、五つの輪、オリンピックのモットーより早くより高くより強くは地域大会に関連していかなるやり方でも使ってはならない。また松明リレー、炎があってはならない。オリンピック旗はただ一つの場所で使うことができる。それはスタジアムの大会の旗を掲げたセンターポールのそばの旗竿の上である。
11. 組織、競技場、建物そしてすべての他の施設は、大会の少なくとも1年前に準備されていなければならない。
12. 特定の地域の大会に参加できる国々は彼ら自身の地域連盟或いはそれに似た団体を組織し、その地域の国際オリンピック委員会の委員、国際競技連盟の代表を含む統括評議会或いは委員会を指名することができる。

ブランデージ会長(1952－1972)の時代

オットー・シャンツ

ストラスブール（フランス）

人文科学大学教授

2. アベリー・ブランデー会长の時代(1952-1972)

2.1 アベリー・ブランデー

引き継がれていったIOC会長の任期に従って章分けされているこの本全体の構成からすれば、アベリー・ブランデー会長の任期二十年(1952年から1972年)の間のIOCの歴史について書かねばならないのであろう。しかしこの5つのオリンピックを率い、オリンピックの発展に決定的な影響を及ぼした人物については、その生涯、性格、思想について、いくつかの基本的な事実について述べることから始める必要があるように思われる。

この第五代IOC会長の、いまだに多くの論議を呼ぶ存在である。

ある人々は、彼を頑迷な理想主義者として、“スレイヴァリー（奴隷）ブランデー”とあだ名し、“ナチ”と非難し、同時に“共産主義者”とも呼んだ。しかし一方で彼は、“彼の政治的、道徳的行為を支える原則の一貫性”、あるいは“彼の精神と行動の独立性、エネルギー、自己鍛錬、不動の意志”によって賞賛された。

「私は奇妙な生き物だ。」と彼は自分自身について言っている。「私は孤立主義者、帝国主義者、ナチ、共産主義者と呼ばれた。しかし私に言わせれば、私は老荘哲学の信奉者だ。」

2.1.1. シカゴにおける子供時代と思春期

アベリー・ブランデーは1887年9月28日、ミシガン州の工業都市デトロイトで生まれた。彼が6才のとき、両親はシカゴに移った。シカゴに移って間もなく、評判の高い石工であった彼の父、チャールズ・ブランデーは家族から去った。アベリーと四才年下の弟は母親の下に残った。ブランデーは中等教育をクレイン手工業学校で受け、その後土木工学を学ぶためにキャンペインのイリノイ大学に入った。

才能のある聡明な学生であった彼の興味は、けっして技術的な学科だけに限られなかった。

彼は手工業スクールにいる間に、作文コンクールで優勝していたし、大学時代、彼の文学的センスは、彼に“ザ・スクリッパー”という雑誌（へっぽこ文士という意味）の編集長を勤めさせることになった。

彼の美術に対する趣味は生涯を通じたもので、世界中を巡った多くの旅の途次、彼はアジア芸術の膨大な収集を行った。それは1959年、サンフランシスコの“M.H.ヤング記念博物館”に贈呈された。その時、その凡そ三千点の作品を収納するために、博物館は新しい棟を建てねばならなかった。

2.1.2. 経営者、実業家

1909年に、彼は“理学士”として卒業し、いくつかの建設会社で最初の職業経験を積んだ。この間に蓄えられた金は、1915年に“アベリー・ブランデー社”を設立するために必要とした資本金の元となった。

この会社は第一次世界大戦後のブームから利益を得て、1920年代のシカゴの建設業界の第一線に位置を占め、大いに栄えた。ブランデーは大プロジェクトを専門に手がけ、彼の建てたビルディングのいくつかは、今なおミシガン湖畔の“ウインディーシティ”（風の強いシカゴの俗称）のスカイラインを形造っている。

彼は真面目でフェアな事業家という評判のおかげで、1929年の大恐慌とそれに続く不況に破産を免れ、生き残ることができた。

30年代になって彼は、株と不動産の取得に活動の中心を移した。彼はリスクをとることを恐れず、結果としていくつかの大変なもうけを生む取り引きをものにした。

彼はまた、彼の活動的なアスリート及びスポーツ役員としての評判に助けられた。彼はこのことを自分では認めようとしなかったが。

この非常にさえない出自の男に、アメリカンドリームが現実のものとなった。

新聞配達少年が百万長者になった。彼は自分自身の努力でそうなったことを非常に誇りにしていた。

フランスのスポーツ紙“レキップ”が、ブランデーのアマチュア問題に対する態度を批判し、「金メッキ張りのライフスタイル」のかどで咎めた際に、彼はIOC事務総長（Chancellor¹）、オットー・メイヤーに手紙を書き、「彼らに言ってやってください。私の持っている一銭たりとも、私自身の努力で得たもの以外はないと。」と自己弁護している。

2.1.3. スポーツマン

非常に早くから、ブランデーはスポーツに熱烈な関心を示していた。

彼はサッカー、野球、バスケットボール、その他のボールゲームをやったが、一番好きなのは陸上競技であった。この競技では、結果はアスリート自身の責任であり、その評価も彼一人のものである。

“陸上競技では、成功するか失敗するかは他でもない競技者自身の責任である。球技場ではベストプレイヤーであっても、負けチームの一員であらねばならないこともあるが、陸上競技では普通、一番速いランナーが勝ち、ベストのジャンパーが金メダルを得る。”

¹原注145頁：スイスでは行政組織の長、首相、州知事等、役割としては事務総長か。当時のIOCの構造からみて単なる事務局長の地位をはるかに越えていた。兄弟はスイスのIOC委員。

1905 年、大学最後の年、彼は地方紙によって“今年の人、発見された才能”として注目されている。

“私はどの個別の種目にもとくに優れていると言うわけではない。”と彼は自分自身について語っている。彼の強みは万能性にあった。大学の一年の時、国内選手権の“オールラウンド²”種目で3位になっている。

ブランデージにとって、彼の現役スポーツマンとしての経歴で最も重要なものはストックホルムオリンピック大会への参加である。国内予選の後、ストックホルム大会に招待された彼は、土木建築監督の職を辞し、いくらかの借金をし、バッグを詰めて大会に出発した。

五種競技で彼は6位になったが、アマチュア規定に触れたオリンピックチャンピオン、ジム・ソープの失格によって5位に繰り上がった。

十種競技では彼は1500メートルで途中棄権した。このことを彼は“心から嫌悪”している。後に彼はこれを、“許すべからざる弱さの瞬間”と呼んだ。

この誤りをつぐなおうとする気持ちは、彼をその後の競技の成功に駆り立てた。1914年、1916年、1918年、彼はアメリカ合衆国の“オールラウンド”種目のチャンピオンになった。

彼はこの競技を「十種競技よりはるかに難しい」と考えている。

ブランデージがスポーツでの成果をあげるために用意できた環境は、けっして恵まれたものではなかった。彼は適切な施設や器具を使うことはほとんどできなかったのも、トレーニングのために自分の創意工夫の才を生かすほかなかった。

さらに彼は、トレーニングを自分の研究と職業上の義務の妨げにならないようにしなければならなかった。彼は何ごともおろそかにすることは許されないと考えていた。

こうした環境は彼の性格に刻印を押し、後にアマチュア問題に対して彼の下した決断は、疑いもなく彼自身の体験に基づいている。

2.1.4. スポーツ界のリーダー

ブランデージはスポーツ選手としての現役活動を終わると、再びビジネスに専念した。

しかし少しでも余暇があると、彼はアメリカ陸上競技連盟（AAU）にそれを捧げた。

そしてその役員になった。1925年には、アメリカで最も強力なアマチュアスポーツ連盟であるこの組織の第二副会長に選ばれていた。

²原注:オールラウンドは十種競技に似ているが、一日で行う。100ヤード競走、砲丸投げ、走り高飛び、半マイル競歩、16ポンドハンマー投げ、棒高跳び、120ヤードハードル、取っ手付き65ポンド重量投げ、走り幅跳び、マイル走

三年後の1929年にはAAU会長に選ばれた。この職を彼は1934年に辞任するまで続けたが、1935年には再選されている。

1929年、彼はまたアメリカオリンピック協会(AOA)の会長になった。これは事実上アメリカオリンピック委員会会長になることを意味した。

彼の任期はたまたま1936年のドイツでのオリンピックが近づいて、スポーツと政治の関係が非常に微妙になった時期に重なった。

1935年ヒトラーの政府がいわゆる“アーリア人法令”(ドイツ民族の血と名誉を守るためユダヤ人とアーリア系ドイツ人の結婚、性交渉を禁じた。)を施行したとき、ブランデーは“ジューイッシュタイムズ”のインタビューに答えて、ベルリンでのオリンピック開催に反対すると述べた。

ところが、しばらく後、彼はナチのオリンピック憲章を遵守するという約束に盲目的な信頼を置き、1936年オリンピックへのアメリカチーム参加について最も熱烈な支持者となった。この大会は政治的な目的に悪用されたのであった。

多くの研究者は彼の強烈なベルリンオリンピックボイコット反対を非難し、これは彼の反ユダヤ的傾向と、ナチ政権に対する共感の程度を示すものだとしている。

この1936年オリンピック大会のボイコットを巡る争いはまた、ブランデーのスポーツにおける国際的リーダーとしての経歴の始まりと時を同じくしている。

1936年のベルリンでのIOC総会の間に、彼はアーネスト・ヤンケに代わるアメリカのIOC委員に選ばれた。ヤンケはボイコット運動に支持を表明したために追放されたのである。1936年7月30日にブランデーは初めてIOC総会に参加した。

八年後、バイエ-ラツールの死後会長代理を務めていたエドストレームは彼をIOC副会長に指名した。1946年、大戦後の第一回総会でIOC委員はこの指名を拍手をもって承認した。

大戦の間、ブランデーは地域大会の組織化に専念していた。

第十二回オリンピック開催の不可能が確実になるや、彼はその代わりになるものを探し、1940年、ブエノスアイレスに飛び、1942年の第一回パンアメリカン大会の準備のためのパンアメリカンスポーツ委員会の設立に参加した。

彼はただ一人ラテンアメリカ人でない参加者であったが、この組織の会長に選ばれた。

2.1.5. 頑固で理想主義的な一匹狼

ブランデーは孤高の人であった。“気難しいシカゴ人”は近づき難かった。

彼の友達仲間は限られていた。ジークフリード・エドストレームとカール・リッター・フォン・ハルトだけが彼の“ビールクラブ”のメンバーであった。

そして彼の信頼を勝ち得ていたのはカール・ディームとウイリー・ダウメだけだった。

彼が 1927 年に、ミュージカルタレントでシカゴ生まれのエリザベス・ダンラップと結婚した時、すでに 40 才を過ぎていた。彼女は彼より三つ年下だった。

彼は自分ひとりの努力で成功したのであり、長い間、自分に関するあらゆることを自分ひとりで処理していた。そして 1950 年、彼は若いスイス人、フレデリック・J・リュウグゼッガーと出会い、個人秘書として契約した。そしてやがて彼に全幅の信頼を置くようになった。

彼は IOC を、権威主義的なやり方、“独裁的な断固とした態度”で導いた。

彼のライフスタイルはアメリカ中西部の大平原を切り開いた開拓者の“奮闘する生涯”を反映するものであった。

彼は自分自身に厳しかったが、同じ厳しさを同僚に要求することを当然と考えていた。

しかし彼に最も近い友人たちは、外部の人々にはおそらく思いもかけぬユーモアのセンスを彼に感じていた。

彼に関する世間の評判は、頑固で、時として喧嘩腰だというものであった。

彼とジャーナリストとの関係は一種“心からの暖かい嫌悪”という色彩を帯びていた。

“ブランデーは、ジャーナリストが憎むことを愛するような種類の人間であった。”

しかし彼は揺るぎなく断固として自己の理想を守り、喧騒に巻き込まれることをけして恐れなかった。この態度が彼のビジネスとスポーツ界のリーダーとしての成功の双方に寄与したことは疑いがない。

2.2. アベリー・ブランデーのオリンピック理念

組織体としての IOC の歴史は、その運命を決めるのに二十年にわたって最も重要な役割を演じたこの人物の基本的な理念について知ることなしに理解することは不可能である。

ブランデーのオリンピック活動の基礎となったのが、どの種類の哲学的立場なのかを理解するのはけして容易なことではない。彼は、思想家ではなく行動の人であり、この無限の可能性に満ちた国で、新聞配達少年から百万長者への道をまるで小説のようなやり方で切り開いた、独立独行の男たちの一人であった。

彼のオリンピックの理想についての理解はピエール・ド・クーベルタンによって形造られた、クーベルタンは彼の精神的父親であるといってもけして過言ではない。

しかし彼のフランス語の知識はクーベルタンを原文で読めるほど十分ではなかった。

彼の図書室にあるクーベルタンの著作は読まれないままになっているし、その多くはページを切られてもいない。

それにもかかわらず、2冊の「オリンピックの理念」の英訳本には、彼自身の手による膨大な注釈が書き込まれている。この作品集はケルンにあるドイツスポーツ大学のカール・ディームによって出版されたもので、オリンピックの理想についてのクーベルタンの主なスピーチやエッセイが含まれている。

2.2.1. クーベルタンの知的遺産の相続

ブランデーは自分自身を、クーベルタンのオリンピックの理想の真髓の守り手であるとみなしていた。この聖杯は商業主義や政治主義に対して断固として守らなければならないのである。“クーベルタンはオリンピックの復興に取りつかれ、ブランデーはオリンピック大会の防衛と継続に取りつかれていた。”

彼がなぜクーベルタンの理想の断固とした守り手になったかについては、いろいろな説明が可能である。先ず心に浮かぶのはブランデーその人から来るものである。

彼は回想録の中で、ストックホルムオリンピック大会参加の経験を通じて自分は“クーベルタンの教えに回心”した、と書いている。彼のストックホルム大会参加は彼の生涯を決定した。その瞬間から彼は、オリンピズムの原則と道徳的価値がこの世のほかの領域にも移されれば、世界を“より健全な、より幸福な、より平和な”場所にすることに貢献できると信じた。

ブランデーにとってさらに重要な経験は、1938年のカイロのIOC総会に続いてオリンピックで行われた、クーベルタンの心臓を埋葬する記念式典への参加であった。

これは彼にとって最初の古代オリンピック遺跡訪問であり、彼の心を深く揺り動かし、彼のオリンピックの理想の宣教師的な熱情を強めることとなった。

回想録のなかでブランデーは、クーベルタンがオリンピック大会を通じて実現しようとしたものを5つにまとめている。彼によればクーベルタンは次のように信じていた。

“オリンピック大会は—

1. 体育とスポーツの国家プログラムが、より強く、より健康な若者を作るだけでなく（そしてもっと重要なことは）アマチュアスポーツの性格形成の働きによって、より良い、より幸福な市民を作ること全世界に知らしめるであろう。
2. 生活のほかの領域でも大きな価値を持つフェアプレーとよいスポーツマンシップの原則を示すことになるう。
3. 芸術展示を通じて美術に対する興味を目覚めさせ、それによって生活に対するより自由な、よりオールラウンドな態度の形成に貢献するであろう。
4. 人々にスポーツはゲームであって金を得る手段ではなく、スポーツに対する献身はそれ自体の価値を持つものであることを教えるであろう。—アマチュア哲学：生活

のすべての面で満足と利益に導く生き方の哲学、なぜならそれは重苦しい制約を課する物質主義と反対のものであるから。

5. 国際的友好の基礎を置き、それによってより幸福な、より平和な世界を導くであろう。”

このリストは非常に複雑なクーベルタンの実際の意図と比べると、明らかに不完全なものである。クーベルタンの著作を綿密に分析したレンクは、クーベルタンのオリンピック理念として次の6つの目的と価値を主なものとしてあげている。

1. 人間を完成すること
2. 古代と近代の特質の調和
3. 宗教的つながり
4. 社会的な出会い
5. 独立性
6. 国民の教育の手段としての大会

クーベルタンの著作についてのこの二つの解釈を比べてみれば、ブランデーが異なった点にアクセントを置いていることが明らかになる。

彼はクーベルタンの考えのうち以下のものを引き継いでいる：

一人間を完全なものにすること。そして
—国際的理解。

彼がクーベルタンの目的として挙げた最初の3つは、人間を身体的に、芸術的に、そして知的に完全なものにし、騎士道の行動を植え付けることによって、性格形成に資することに関するものである。

5番目のポイントは社会的な出会いに関するものであり、そこでは国際的友好のみが強調されている。彼自身はオリンピックムーブメントを“今日の世界で最も重要な社会的な力である。”と書いているのだが。

第4点はクーベルタンの仕事の、非常にブランデー的な解釈を示すものである。

アマチュアリズムは、クーベルタンの著作についての他の人の解釈では、それほどの重要性をもって考えられてはいない。

ブランデーは彼のスピーチと著作のなかで、クーベルタンの“*religio athletae*”（スポーツマンの宗教）に基づいて「スポーツの宗教」について繰り返し言及している。しかしこの言葉がクーベルタン自身の考えをどれほど正確に反映しているかは、綿密に分析する必要がある。

また同じことが言えるのだが、スポーツの政治的経済的独立という言葉も、これを彼は公理のように見なしていたのだが、ブランデーの著作とスピーチの中に繰り返し現れている。

(※原著者注: クーベルタンはオリンピズムは宗教であるべきだと考えた。彼はそれに”religio athletae” (スポーツの宗教或いはスポーツマンの宗教) の表現を与えた。彼はスポーツは単なる筋肉の運動よりもより高い目的につながるべきだと考えた。ラテン語では”religere”は “より高い何ものかにつながる”を意味する。)

しかしながらアマチュアの理想は、ブランデーにとって全く違った次元の意味合いを持っていた。彼にとって、それはオリンピックムーブメントにとって絶対的な必要条件であった。

2.2.2. ブランデーのオリンピックの基本理念における目的と価値

2.2.2.1. 人間の完成についての考え方

“オリンピックの理想は完全な人間である”。ブランデーの見解では、この理想は古代ギリシャの黄金期に達成されていた。そこでは心と身体の調和したトレーニングが求められていた。

彼はしばしば、クーベルタンがオリンピック大会を単にスポーツの普及を促進する手段と考えていた、と主張した。そして次のように述べた。

“... [オリンピズム]の真の目的は、高度にトレーニングされたエリートスポーツマンによるいくつかのメダルや記録破りのはかない栄光にあるのではなく、アマチュア規則の最高の原則によって育てられた強く健康な若者の進歩にある。”

彼の考えは、すべての国の政府が、オリンピック大会によって、“より強くより健康な青少年”を育てるために、国民の教育とトレーニングプログラムと若者のためのスポーツ大会の導入を勇気付けられねばならない、というものであった。

ブランデーの考えでは、この種のスポーツプログラムはまた、社会的不正を挫き、物質主義と闘い、健康を増進することに役立つはずであった。

2.2.2.2. オールラウンダーの理想

ブランデーは、教育は一面的でなく、オールラウンドな技能を教えるべきである、と信じていた。クーベルタンと同じように、彼は専門化に反対であった。

そして“ブランデーにとって、アマチュアリズムは、多くの活動のエキスパートであったルネッサンス人についての基本理念が表現されたものであった。彼らはその多くの活動のどれかの専門家というわけではなかった”。

ブランデー自身もこのオールラウンドな業績を達成していた。

彼はオールラウンダーであることを誇りにしていた。のちにスポーツの役員として、オールラウンドな技術を必要とする近代五種や十種競技のような種目を繰り返し支持した。

彼はスポーツにおいて、競技者としてまた役員として非常に活動的であったが、スポーツ以外の世界で、二つのまったく異なった分野で偉大な仕事を成し遂げた。

建設業と芸術の世界である。彼は建築業者として、また東洋美術の収集家として名声を築いた。この能力の多様性は、彼の伝記の一つに“アベリー・ブランデーの四つの側面”というタイトルを選ばせているくらいである。

2.2.2.3. 芸術への貢献

クーベルタンのように、ブランデーはオリンピックムーブメントのなかで芸術の役割が強められることを望んだ。彼にとって芸術は“より幅広い、より豊かな生活”に貢献するものであった。技術を学ぶ学生であった間にも、ブランデーは芸術と文学に関心を持っていた。彼はイリノイ大学の文芸月刊誌の編集者であったし、大学の最終学年では文学、哲学、美学のコースをとっている。

しかし彼の芸術についての見方は、理論的な性格であるというよりは実際的なものであった。彼はスピーチのなかで、スポーツマンに芸術に関心を持つよう勧めているが、彼はまた、芸術家にスポーツをするよう勧め、古典古代の芸術家がスポーツの試合にインスピレーションを求め、トレーニング場や試合場で研究した例に倣うように促している。

彼はまた繰り返し、オリンピックのプログラムに芸術が統合されるように主張している。たとえばモスクワにおける第60回IOC総会における彼のオープニングスピーチは、以下のようなものである：

“完全な人間の発達という我々の目的の追求という点で、たぶん我々はオリンピックプログラムの美術部門に十分に力を入れていないといえるでしょう。第17回オリンピック大会で、我がイタリアの友人たちが、歴史の中のスポーツ、そして芸術の中のスポーツの素晴らしい展示をしてくれたことは事実です。私は東京では、日本人がその美を愛する繊細な感受性をもって再びプログラムのこの部門に注意を払ってくれると確信しています。たとえそうであっても、私の意見では、もっと多くのことがなされなければなりません。たとえば、我々はすべての参加国に1時間を与え、その国が特に誇りに思う興味ある文化活動を展示するようにすべきでしょう。これは競技である必要はなく、体操、音楽、オペラ、バレエ、演劇、フォークダンス、あるいは何かほかの活動の単なるデモンストレーション、あるいは展示でもいいのです。”

2.2.2.4. 性格を養う場としてのスポーツ

彼の前のクーベルタンと同じように、ブランデーは現代の教育があまりに知識に重点を置きすぎて、身体的な価値ばかりでなく、道徳的な価値を無視していると苦情を言った。

スポーツの中に、彼は若者に基本的な倫理的な態度を養う手段を見ており、それを生活のほかの分野に移すことができると考えていた。

“性格のない知力危険です。フェアプレーとよきスポーツマンシップの道徳的、精神的価値は、正直、正義、公平、誠実、人間の尊厳、に基礎をおいており、より良い世界に不可欠なものです。もしこれらがスポーツの友好的な試合場で養われるのなら、それは他の分野でも疑いもなく受け入れられるでしょう。”

2.2.2.5. “スポーツの宗教”

ブランデーは何回も何回も、紛れもない宣教師的な情熱をもって、クーベルタンの“*religio athletae*”〈スポーツマンの宗教〉をモデルとした“スポーツの宗教”を説いた。

彼はクーベルタンについては、一般的な言及しかしていないし、クーベルタンの実体も、単純で明解な解釈を許すものではないのだが、ブランデー自身、この言葉を使うときに非常にはっきりした意味づけをしていたと言い難い。従ってブランデーが“スポーツの宗教”という言葉に何を理解していたのか正確に定めることは難しい。

それはプラトンの神をアイデアとする“遊戯する人間”の現代的な世俗的な変種であったのだろうか、あるいはブランデーが“人道主義の宗教”について話すとき、死後の世界について言及しない“有限性の宗教”を意味していたのであろうか？

それともそれは単に世俗化し物質主義化した時代の超越、より高い価値の必要を表現したものだっただろうか？

ブランデー自身が言っているように“20世紀の物質主義への反逆—報酬を求めることのない理想への献身”を意味するものであろうか？

あるいはブランデーはクーベルタンの宗教的な範疇を、ロマンチックな社会的な考え方で置き換えようとしたのであろうか？たとえば彼がオリンピズムについて語る時、その中では“身分制度や人種や家柄や富による不正のない”社会運動として語っているのだ。

東京での第63回IOC総会のオープニングスピーチで、彼はオリンピックムーブメントを宗教の中の宗教とまで呼んでいる。“オリンピックムーブメントは20世紀の宗教です。この宗教はほかの宗教のすべての基本的な価値を含んだ普遍的な魅力を持つものです。”

ブランデーにとってオリンピズムの基本的な価値は、普遍的な原理であった：

“キリスト教徒、イスラム教徒、ヒンズー教徒、仏教徒そして無神論者、すべての人たちは{オリンピックムーブメントの}根本原理である、普通の正直さ、お互いへの思いやり、フェアプレー、よきスポーツマンシップを尊敬しています。これらはすべての宗教のエッセンスなのです。”と彼はほかの演説でも主張している。

彼によれば、オリンピズムはその基礎にすべての偉大な世界宗教と共通する“黄金律”を持っている。

ブランデーには、“*religio athletae*” はアマチュアリズムと分かれ難いものであった：

“クーベルタンによって用いられた適切な言葉‘スポーツの宗教’は {...}、最高の道徳律を含むフェアプレーとよきスポーツマンシップである騎士道的なアマチュア規則にたいして選ばれたものです。それは人道主義的な宗教—黄金律のように悪に対する善を象徴するのです。どんな哲学も、どんな宗教も、これ以上に崇高な心情を説いてはいない。だからアマチュアスポーツマンが普遍的に称えられ尊敬されるのです。”

おそらく、ブランデーはクーベルタンの “*religio athletae*” の考えを深くは研究してはいなかった、と考えるのも誤りではないであろう。クーベルタンの著作が彼にとって、英語に翻訳されたいくつかの部分的な引用の形でしか触れることができなかったことを考えても。

したがって彼は “スポーツの宗教” に対して彼自身の解釈を与えたと考えられる。

彼が多く批判をした “20 世紀の物質主義” に対置するものとみなし、物質的な価値に代ってより高い価値に帰るものとして、すべての宗教に受け継がれている “黄金律” のように、普遍的に受け入れられるものとみなしていたのだ。

彼はスポーツの価値を他の分野に移すことのできるものと固く信じていたので、オリンピックを、戦争と階級闘争によってこなごなに引き裂かれた人間性の救いとなるメッセージである、と考えたのである。

2.2.2.6. 平和の理想

ブランデーはオリンピック大会を寛容と民主主義の範例と考えた。それは肌の色や宗教や出自や政治的信条にかかわらず世界のすべての国を一つにするものである。

“社会のシステムや、政府や、その他のいろいろな種類の人間のつくった組織の衝突の真っ只中であって、その理想、騎士道精神、そしてフェアプレーは損なわれることなく光輝く。そしてオリンピックの聖火は、国々と人々の間のよりよき理解への道を照らす。”

ブランデーはオリンピックムーブメントが政治家に模範を示すことができると考えていた：

“…世界の政治家たちがアマチュアスポーツの試合場にあるフェアプレーとよきスポーツマンシップの原則を採用しさえすれば、もはや戦争の必要はなくなるであろう。”

ブランデーはクーベルタンと同じように、古代ギリシャのイメージを変質させている。彼もまた、古代のオリンピック大会の間、オリンピックの平和が支配し、古代ギリシャ人の世界全体が武器を置いたと信じていた。

今日、我々はこの考えが誤りであることを知っている。そして、いつの日か近代オリンピック大会が戦争の砲火を沈黙させるだろうというブランデーの望みは非現実的に見える。彼の言葉“我々はオリンピック大会を全世界に広げた。おそらく我々はオリンピック休戦も世界に広げることができるであろう。”は、現在の世界の政治情勢に照らしてみればあまりに楽観的であるように見える。

この平和の理想を損なわないために彼は、クーベルタンの考えに追随して、チーム競技と国のランキングに反対した。彼は、これは過剰な国家主義をもたらす危険があると考えたのである。

2.2.2.7. オリンピックの独立

彼は、オリンピックムーブメントが政治家たちに民主的な平和な共存の模範を示す義務があると考えたが、それにもかかわらずブランデーは“スポーツは政治的な権限をもっていない、だからスポーツの諸関係は、民主的な組織や人権擁護のシステムがあるかどうかによってつくられてはならない。”と固く信じていた。

ブランデーはこの絶対的に非政治的な立場をオリンピズムの強みであると考えていた：

“オリンピックムーブメントは高い理想を基礎としているからこそ強力であり、重要なのである。それはこの世界で政治的、人種的、宗教的差別から完全に自由である数少ない事業のひとつである。それは規則を守るすべてのアマチュアを差別なく受け入れる。そして世界の尊敬と支持を受けているのである。”

しかしながら同じ主旨で、スポーツはブランデーにとって、政治とは厳格に無関係であるべきものであり、政治的な圧力の道具として使われてはならないものだった：

“何人かの誤った考えを持つ人たちはオリンピックスポーツが政治的な道具になると考えているようだが、これはとんでもない誤りだ。オリンピックに関することの中で政治的な活動が許された瞬間に、オリンピックはお終いになる。”

ブランデーは全生涯を通じてスポーツと政治を切り離そうと戦った。

しかしこれは彼のスポーツの役員としての経歴の中で明らかになっていったように、時として彼を彼自身と矛盾するようになってしまふ、不可能な企てであった。

スポーツの人気の高まるにつれ、スポーツはますます政治的な力によって弄ばれるようになっていった。

2.2.3. “マチュアリズムの哲学”

アマチュアという考えはブランデーのオリンピズムについての概念の核心である。

その上にこれまで述べたすべての価値と目的が置かれている。

アマチュアリズムが取り除かれたならば、オリンピックの理想はカードの家のように崩れ去るだろう、とブランデーは考えていた。

ブランデーにとって、すべてのスポーツの倫理的な要素とオリンピックムーブメントは、アマチュアリズムの上に築かれていた：

“マチュア問題は精神の問題とかかわるので、いつまでも我々と共にあるだろう。もしオリンピック大会が存続すべきものであるとすれば、アマチュアのものであり、アマチュアのもので残らねばならない。もしそれがアマチュアのものでなくなれば継続することは許されないだろう。”

歴史的な観点から、ブランデーは彼の議論を古典ギリシャ黄金時代の競技者のアマチュア資格に根拠付け、古典世界のスポーツの衰退を増大するプロフェッショナリズムのせいにした。

第 67 回 IOC 総会のオープニングスピーチで、彼はクーベルタンとユーリピデスを引用している：

“クーベルタン男爵は、優勝者が高価なプレゼントや莫大な報酬を受けることで本来の純粋さを失ったとき、古代オリンピックで何が起こったかを正確に知っていました。そして、プロフェッショナル競技者の一団が出現した時、有名な悲劇詩人で、自分自身も成功した競技者であったユーリピデスは、次のように叫びました。‘ギリシャの何万もの悪のうち、プロの競技者族より悪いものがあるのか’。”

ブランデーはギリシャのアマチュア神話の犠牲となったのだ。何人もの歴史家が納得のいくように証明しているように、そんなアマチュアは決して存在しなかった。

石工の息子で 20 世紀の市民であるブランデーにとっては、ビクトリア朝時代に存在した階級の壁の導入などは考えることもできないことであった。

その時代には肉体労働者はすべてのスポーツから締め出されていた。

直接あるいは間接にスポーツによって金を得た者は排除されねばならない。

“オリンピックのアマチュアあるいはオリンピック大会参加者であるためには、選手はいつも、いかなる物質的な報酬も受けることなく、趣味としてスポーツをしなければならない。彼はスポーツの他に、生活の中に目的を持っていなければならない。彼の生活を現在も将来も支える主要な職業を持っていなければならない。オリンピックのアマチュアは技術よりスポーツマンシップを、世評より高潔さを、成功より名誉を重んじなければならない。”

しかしブランデーによれば、アマチュアリズムは彼の会長在任中に制定されたオリンピック憲章の規則 26 の定義のうちに収まるものではない。ブランデーにとって、それはそれ以上のものであり、まさに知的な立場であった：

“アマチュアリズムが良心の問題であって限定するのが難しいのは事実であるが、それは友情や、愛や、慈善のように尊いものであって、もしこれがなければ世界は惨憺たる場所になるであろう。”

それは生き方の哲学であり、そこに含まれるのは

“騎士道精神、相手に対する思いやり、フェアプレーと良きスポーツマンシップに対する献身、そしてある道徳的価値への支持、この価値はスポーツにとって欠くことのできないものであると同時に、ビジネスの世界、産業、政治、美術、そして他のすべての生活の分野に適用できるものである。それはプロスポーツにさえ適用できるものである。プロの世界ではそのゲームを‘愛する’ものだけが卓越した成功を収めることができるのだ。”

ブランデーの目には、アマチュアリズムは“生き方の哲学であり、報酬や謝礼よりも、いま取り組んでいる仕事そのものの神聖化であり、献身である”。

そのような生き方に対する態度は、芸術家や科学者たちの中にも見られるものであり、彼らは経済的な見返りは二の次にして、彼らの仕事自体に心を奪われているのである。

“ショウペンハウエルやそのほかの多くの人たちが言っているが、偉大な芸術は金を目的にしては決して生まれなかった；画家、作家、音楽家は報酬や謝礼よりも、現在取り組んでいる仕事自体に心を捧げていたに違いないのだ。”

同じことがスポーツにも適用される：

“アマチュアスポーツでは良いプレー、それ自体が最高の報酬であり、そこには精神の高揚と有頂天の喜びがあることを教える。それは物質的な報いを考えることなく、それ自体のために何かを行うことからやってくるものである。アマチュア選手は良いプレーをしたゲームに心の浮き立つ喜びと高揚を得る。これは生活の手段としてスポーツをする者には決して経験することのできないものだ。”

ブランデーにとってスポーツは：

“楽しみ、気晴らし、遊び、リクレーション、自由、自発的な、楽しい—喜びのためにする何ものかであった。それはあなたが欲しないのにやらなければならない、支払いを受けるためにする仕事とは正反対である。”

ブランデーのアマチュア問題に対する態度を決定した要素は疑いもなく、彼自身の経歴と業績であった。少なからず清教徒的労働の倫理のおかげで、彼はスポーツと事業においていかなる援助も受けることなく、完全に自分自身の努力によって成功した。

現代のスポーツマンは、彼が自分のスポーツ歴を考えると“甘やかされた子供”に見えたに違いない。彼は学生時代、トレーニングするためのスポーツ用具を高校の工作室で自分の手で作った。自分自身の経験から、アマチュアとしてスポーツと経歴の両方で最高の成功を収めることは可能なことである、と彼には見えた。

彼は自分自身の経験を他の人に適用し、彼らに同じ要求をすることをためらわなかった。スポーツと仕事の世界で根本的な変化が起こっているにもかかわらず。

ブランデーの見方によれば、若者の全面的な調和のとれた教育の目標はアマチュアリズムを通してのみ達成できる。プロ選手は一面的な専門家になってしまうのだから。

“ほとんどの競技会は少年少女や若い男女のためであり、スポーツの重要さをあまり誇張して教えるべきではない。それは、教育を受けることや商売や職業について学ぶことを、妨げるようなものであってはならない。”

アマチュアリズムだけが、スポーツマンの、そしてまた国際オリンピック委員会の、金主からの独立を保証するのである。プロスポーツの選手は金に依存するようになり、自由を失う。

ブランデーはオリンピック大会の偉大な成功を以下の事実によるものとした。

“オリンピックはアマチュアのために、アマチュアによって組織され、誰もそこから利益を得ていない。この秘密の力によって祝福されている人たちは、もし大会が商業化されたならこの力は失われてしまうと言うだろう。オリンピック大会についても、そのアマチュア的性格を失うならば、疑いもなくその魅力は失われてしまうだろう。金が絡んだ瞬間に、それはビジネスになりスポーツではなくなる。”

しかしもし大会がビジネスになるならば、道徳的な価値もまた危険にさらされることになるだろう。友情は敵対心に代わり、騎士道精神は勝とうとする意志に席を譲り、物質的報酬を得るために不正な手段に頼ろうとする誘惑はあまりにも大きくなるだろう。

“プロ選手にとってスポーツは職業であり、彼の第一の目的は勝つことである。より多く勝てばより良い報酬を受けるのだから。アマチュア選手も勝つことを欲する、しかしそれは、彼にとって一番重要な価値を実現するやり方においてである。”

そしてブランデーは、もしオリンピックムーブメントがビジネスになれば世界はオリンピックに背を向け、オリンピックはその模範となる性格を失う危険があると考えていた。

“…世界の支持と尊敬を集めているオリンピック大会の高貴な理想的な精神を守り、一瞬たりとも墮落しないようにするためには、オリンピックが意味するアマチュア選手に参加を限ることを続けなければならない。”

ブランデーは、スポーツに対する信頼性は、全体としてアマチュアスポーツによってのみ守られていると信じていた。彼にとって“アマチュアスポーツだけがスポーツであった。なぜならもしアマチュアスポーツでなければそれはスポーツではなくービジネスなのだから”。

ジャーナリストに、彼が一番好きな小説の主人公はだれかと聞かれたとき、ブランデーは“私は、あまり小説は読まないが、たぶんドンキホーテが私の理想に最も近いだろう。”と答えた。

風車にむかって突撃したセルバンテスの主人公のように、アベリー・ブランデーは、現代スポーツマシーンの容赦のない前進に直面して、己のスポーツについての理想主義的な考えを守るために、生涯を通じて疲れることなく戦ったのである。

2.3. IOCの世界政治へのかかわり

1952年7月9日、第20回近代オリンピック大会の開会式で、ヘルシンキスタジアムにオリンピック聖火をともしたのは、かつてのスターランナー、フィンランドのパーヴォ・ヌルミであった。

この名誉が、1932年アマチュア規則違反のために追放されたヌルミに与えられた事実は、スポーツの、そしてまたオリンピック大会の容赦のない商業化を象徴するものである。

この商業化に対してIOCは、この大会の終わりに就任した新会長アベリー・ブランデーを先兵として、以後20年間戦い続けることになるのである。

ヘルシンキ大会ではまた、第2の象徴的な出来事が印された。

ソビエトチームの初参加である。東側陣営の指導的な力が競技場に足を踏み入れ、世界のスポーツスタジアムに、東西対立の影が及ぶようになることを告げたのであった。

さらに政治的な火薬庫があった。これはアベリー・ブランデーの任期中のIOCの運命を決定的にするものであった。

それまで IOC は競技場を、主としてはるか北方の国々に置いてきた。若い南の国々はまだ国内の政治や死活的経済問題にとらわれていて、北極圏の端の大会に出場することなど考えられもしなかった。しかしこれから数年の間に状況は劇的に変化する。

ブランデーの任期中、IOC の政策は3つの要素によって支配された：メディア現象としてのスポーツの経済的魅力的増大、東西の冷戦、植民地支配のくびきを振り払ったばかりの発生期の国家意識。

アメリカ人の IOC 会長が倦むことなくスポーツと政治の分離を説いたにもかかわらず、IOC それ自身のルールによって、そのような分離は事実上不可能になった。

オリンピック参加選手をそれぞれの国の代表とみなすことによって、“国家”概念にまつわるあらゆる種類の紛争がオリンピックの組織に持ち込まれることになった。

さらに大会を世界中の多くの候補地の一つに与えるという行為は、政治的な立場をとることを意味した、というか、少なくともそう解釈された。

オリンピックのシステムは外の世界から隔絶した自治ではない；その誇り高い独立は幻想である。それは例えば、国家間の相互作用というような他のシステムと密接に関わっているからである。それゆえ IOC の決定は国際政治の背景を考慮に入れて検証されねばならない。アベリー・ブランデーの在任期間中、この構図は、主として冷戦と非植民地化によって決定された。

1950年代と60年代に文化的、社会経済的変化がスポーツの世界に大きな変貌をもたらした。技術の進歩が通信に革命を起こし、とりわけテレビジョンは技術革新のおかげで驚くべきスピードで進歩した。

同時にスポーツはメディア上の大きなショーとなり、広告主や産業の金鉱となった。

スポーツへの関心が高まるにつれ、同時に、その政治的影響力も増した。

これらの進歩に対する IOC の反応は極めて不活発なものであった。

その原因の一つは IOC の構成にあったが、会長の性格によるところも大きかった。現実とブランデー会長の高い理想との間の溝は、彼の20年間の在任期間中に絶え間なく広がり続けた。

2.3.1. “冷戦”

1952年7月16日、技術者でシカゴの建設業者であったアベリー・ブランデーは、理事会（Executive Board 日本ではいつからか理事会と呼び習わされている。）によって、老齢のため退任するジークフリード・エドストレームの後継者として推薦された。

IOC のリーダーシップはヨーロッパ人の手に残った方がいいだろうという理由で、ニュージーランドの委員、サー・アーサー・ポリットが推薦したデンマークのプリンス・アク

セルと、ソビエトの委員アンドリアノフが推した当時 IAAF の会長であったロード・バーリーが対立候補となった。

秘密投票で 30 対 17、棄権 2、でブランデーが最終的に勝者となった。

しかしこのブランデーのはっきりした勝利の最終結果は人を欺くものである。この決定は 25 回目の投票でようやく決着したのである。

ブランデーは退任するエドストレーム会長の支持を得ていたが、ヨーロッパと英連邦の委員の陣営の強力な反対を克服しなければならなかった。彼らはヨーロッパ人を会長にしたいと思ったし、それがかなわない場合は、イギリス人を会長にしたいと思っていた。

反対する第 2 のグループは共産主義国の代表たちで、アメリカ合衆国の代表が IOC 会長になることを防ぎたいと思っていた。

アルマン・マッサールが“アングロサクソンとラテンの公平なバランス”をとるために、スイスの委員、アルバート・メイヤーによって指名され、副会長に選ばれた。

退任するジークフリード・エドストレームは IOC 名誉会長となった。

IOC のトップにアメリカ市民が選ばれたことと、ソビエト連邦のオリンピックの舞台初登場に、我々は当時の国際政治の両極の反映を見るのである。

世界を変えた第 2 次大戦のあと、1945 年の国際連合の設立は、人間の理性の勝利と持続する平和への希望をもたらした。

しかしこの希望はすぐに消えた。世界は二つの勢力圏に分かれ、二つのブロックの間の止まるところを知らない軍拡競争は“恐怖のバランス”を導いた。

このバランスは後に、非同盟諸国の熱望によって複雑なものになっていった。

2.3.1.1. ドイツ問題

ヨーロッパにおいて 2 つの陣営は対立し、ドイツは民主主義の西と共産主義の東に分かれた。チャーチルとスターリンとトルーマンは、1945 年ポツダムでの会談で、ドイツを占領地として分割したにもかかわらず、ドイツは一つの経済単位と見なされることになっていた。ドイツの分裂はちょうど 4 年後、西のドイツ連邦共和国と東のドイツ民主共和国の建設によって現実のものとなった。

1949 年に西ドイツは NOC を設立し、1950 年のコペンハーゲンの IOC セッションで仮承認された。そして 1951 年のウィーンにおける総会でオリンピックファミリーの正式なメンバーとして認められた。

GDR（東ドイツ）は続いて 1951 年に NOC を設立したが其の承認には時間がかかった。

1952 年のオリンピック大会に、統一ドイツチームを送ろうとした交渉は成功しなかった。

GDR は 1953 年のメキシコシティでの総会で、IOC が承認申請を再考してくれるように望んだ。しかし IOC 事務総長のオットー・メイヤーは GDR の NOC に書類で約束しておきながら、この件を議題から落としてしまった。

たぶんこれはまったくの不注意からではなく、メイヤーが GDR 代表団のローザンヌとコペンハーゲンでの行動に憤慨していたからであろう。

ソビエトの IOC 委員アンドリアノフが決議を要求したが、ブランデーは GDR の IOC に対する不躰な行動を指摘した。論議はつぎの総会まで延期された。それは 1954 年のアテネで予定されていた。

1953 年 6 月 17 日、前日東ベルリンのスターリン通りの建築作業員によって始まったストライキは、全面的な反乱に発展した。これはソビエトの軍隊によって情け容赦なく、流血を伴って鎮圧された。

最初、建築労働者は高い仕事のノルマにたいしてストライキをしたのだが、すぐに基本的な政治要求が出始めた。人々は国家の組織に対する不満を表し、ドイツの再統一と自由選挙の実施を要求した。この反乱は東ヨーロッパと西ヨーロッパの対立を決定的に硬化させた。

アテネでの IOC 総会で GDR の NOC を承認する件は再び議題にのぼった。

ブランデーは IOC にたいする GDR の新聞の下品なキャンペーンについて会議に報告したが、その件にかかわらず、彼は GDR の申請を再審査することに賛成であった。

アンドリアノフは総会に対して、GDR NOC 会長クルト・エーデルがアテネに来て個人的に謝罪することを希望していると告げた。

彼は必要なビザを得ることができず、そうすることはできなかった。しかし彼は GDR の新聞の IOC に対する攻撃は止むことを約束した。

アンドリアノフは、自分もドイツ統一チームの大会参加を歓迎すると強調した。しかし、今や IOC はドイツ連邦共和国の NOC とザールの NOC を承認していた。GDR もザールと同じ扱いを受けねばならなかった。

ドイツ連邦の IOC 委員、カール・リッター・フォン・ハルト博士は GDR NOC の承認はドイツ統一チームの可能性を排除してしまうとして反対した。

議論に続いて行われた投票では、出席していた委員は GDR NOC の承認を 31 対 14 で否決した。

1955 年 5 月 9 日、連邦共和国が NATO に参加し、5 日後にワルシャワ条約が締結されて 2 つの国の再統一の希望はさらに衰えた。

同じ年 GDR はソビエト占領地域としての立場を解消し、ソビエト連邦によって主権国家として承認された。GDR の独立性をさらに強化したこの新しい政治情勢の中で、GDR の NOC は 1955 年のパリの総会で、IOC の承認を再び要請した。

ブランデーはモスクワへの旅の間に、GDR 代表団から GDR の独立した NOC の問題について前もって接触を受けていた。

彼はその相手に対して、1951 年にローザンヌでサインされた協定書について話した。それはまだ IOC にとって有効なものであった。当時、西ドイツ NOC 会長カール・リッター・フォン・ハルトと東ドイツの会長クルト・エーデルは、統一オリンピックチームに同意していた。

しかしソビエト連邦と GDR の国家主席ウォルター・ウルブリヒトの圧力で、GDR 代表団はその署名を取り消さねばならなかった。この直ぐ後、クルト・エーデルは会長の職を解かれ、ハインツ・シェーベルに変わった。

パリでは、GDR 代表団は再びしぶしぶこのローザンヌ協定を認め、その見返りとして NOC に対する仮承認³を 27 対 7 で与えられた。

ブランデーは GDR NOC の IOC 加盟承認を得ようとする努力を詳細に述べたのち、IOC 委員に対し GDR 加盟を直ちに承認するか、仮承認を与えるかの選択を迫った。

何人かの東側ブロックからの IOC 委員は直ちに承認するよう発言し、カール・リッター・フォン・ハルトは仮承認を主張した。

ブランデーは、ドイツ統一チーム結成はスポーツの政治に対する勝利であると考えていた。1956 年のコルチナダンパッツォにおける IOC 総会で、彼は次の言葉でカール・リッター・フォン・ハルトを祝福した：

“我々は政治がこれまでなし遂げられなかったことを、スポーツの分野で獲得した。”

後のスピーチでも、彼は繰り返し、ドイツ統一チームの結成を“スポーツの政治に対する重要な勝利”であると自慢した。

GDR の指導者は、オリンピックの舞台からさらに排除されることは彼らの評判を傷つけることを、完全に理解していた。その結果ドイツ統一チームの結成を暫定的な措置として同意した。

残る問題はそのチームが一緒に現れるときに、どちらが主役を務めるか、そしてチーム編成の基準をどうするか、であった。

選手選抜の基準は競技成績によることはすぐに決まったが、選手の数で優る連邦共和国チームが団長を指名する権利については厳しい交渉が必要であった。

³ 原注：しかし付帯条件として統一チームができなかった場合、両国が再統一した場合、この承認は無効になると規定されていた。

国歌についての論争が一番長い時間がかかった。最初は、勝利者がドイツのどちらの部分に属するかによって、それぞれの国歌が演奏されることが同意された。

混合チームが勝った場合は国歌は演奏されないことになっていた。

しかし大会の直前になって、二つの国歌はベートーベンの“歓喜の歌”に変えるべきだという GDR 代表団の提案が最終的に受け入れられた。黒、赤、金の地の上の五輪マークがチームのエンブレムとして選ばれた。

連邦ドイツのリーダーがこれらの交渉で勝ちをおさめた。選手の数で勝っていたこと、IOC の承認を得ていたことのおかげで、彼らは優位にあった。

コルチナダンペッツォのドイツ統一チームは、西側の選手 58 名、東側の選手 18 名であった。この割合はメルボルン大会でも似たようなものであった。そこではドイツ連邦共和国代表選手は 138 名、ドイツ民主共和国の選手は 37 名であった。

この間、連邦共和国において、ドイツ統一チームに対する反対の声が次第に高まってきた。ハンガリーの政治的な事件に照らして、人々が連邦ドイツの選手が GDR の代表と共に戦うのを見たくないと思ったのは理解できることである。GDR はハンガリー人民を血にまみれた暴力で鎮圧したシステムを代表するものだと考えられていたのである。

ブダペストで最初の大きな反対デモが起きたのは 1956 年 10 月であった。

ハンガリー人は共産主義のくびきを振り捨てようとしたが、この蜂起はソビエトのタンクによって情け容赦なく鎮圧された。

この出来事は、ドイツ混成チームに影響を及ぼさざるを得なかった。メルボルンへの出発の直前に、チーム主導者の二つのグループの間が緊張した。

FRG と GDR の選手は別々に大会へ向かい、別々に宿泊した。彼らが共にしたのは、長い交渉のすえ何とか同意されたユニホーム、エンブレムそして勝利の歌だけであった。

1959 年、オリンピック大会で守られるはずであった儀典について再び論議が起こった。

この年の 10 月 7 日に GDR はハンマーとコンパスのエンブレムをつけた国旗を採用したのである。

丁度 4 週間後、連邦共和国の政府はこれに反応する決定をした。いくつかの例外（例えば船舶）を除いてこの旗を掲げることは公共の秩序を乱すものとして禁止したのである。

この規則は連邦ドイツ領内のスポーツ行事にも適用された。東ドイツ選手の名譽を讃えて GDR 旗を掲揚することは許されなくなった。連邦共和国はオリンピック大会でドイツ統一チームは連邦ドイツの旗の下で戦うべきだと考えたが、GDR は自分たちの選手はハンマーとコンパスの旗のもとに出場すべきだと主張した。

IOC 会長は調停にたち、妥協案を提案した：二つの国旗のどちらもオリンピックスタジアムに現れてはならない。その代わりにドイツ統一チームは第三の旗、つまり黒、赤、金の地で、赤のところに白い五輪を付けたものの下に戦はなければならない。この賢明な提案は、特に連邦ドイツ政府からの多少の抵抗に会わなかったわけではないが、最終的に受け入れられた。

ドイツ連邦首相アデナウアーと外務大臣フォン・ブレンターノは、二つのドイツのあいだのスポーツの関係を心よく思っていなかった。

1960 年 7 月、アデナウアーはドイツ連邦のスポーツ界の指導者に対して、なぜ彼がドイツ統一チームに反対であるかを説明した。

そこに出席していた当時の NOC 会長、ウイリー・ダウメによれば、アデナウアーは自分の立場を次のように説明した：

“ドイツ分裂の事実がこのことによって覆い隠されるよりも、世界がこのことを何度も何度も思い出す方が良いのだ。そしてさらに、交渉の結果スポーツチームが結成されれば、ソビエトが占領している地域の当局者とはドイツ統一について交渉することはないという、自分の主張が弱められる。”

GDR でもドイツ統一チームに対する態度は、1950 年代初期のように楽観的に考えられることはなくなっていた。その当時はドイツ統一スポーツチームのための接触が、二つの国家の社会主義の下での再統一のためにイデオロギー的な影響を及ぼす手段、と考えられていた。しかし今や、GDR の国家主席、ウォルター・ウルブリヒトは“二つの国家”理論を広め始め、GDR の最大の関心事は、連邦共和国と並んで完全な国家として承認されることになっていた。

1960 年のスコーバレー冬季大会の際さらに、GDR を刺激する出来事が起こった。

アメリカ国務省は東ドイツのジャーナリストに入国ビザ発行を拒否し、東ドイツジャーナリスト協会はこれに抗議し、IOC 会長にこの問題について電報を打った。

サンフランシスコでの第 56 回 IOC 総会で、長い議論の末、ジャーナリストたちの怒りは支持された。ブランデーは以下の決議を読み上げた：

“IOC は全世界を通じての報道の自由を深く信じることを声明したいと望む。同時に IOC は、オリンピックの重要な原則の一つが、世界の若者が、いかなる国の国民であるか、また個人の人種、宗教、政治信条を理由に、大会参加を差別されないことである、ということを述べたいと思う。”

しかし役員の入国ビザ発行が拒否されたこと、に対する東ドイツ NOC による抗議は受け入れられなかった。IOC によって定められた同伴役員の制限数を超えていたのである。

モスクワの承認を得て GDR 政府は、1962 年 8 月 13 日ベルリンの東側の部分と西側の占領区域を分ける壁を築いてドイツの分割を固定化した。GDR 政府がこの措置を取ったのは、有能な労働者が果てしなく西側へ脱出して、GDR 経済を瀕死の状態に追い込んだからである。東ドイツと西ドイツの国境もまた塞がれた。

ドイツ連邦政府はこのドイツ分割の象徴に対して、直ちに両ドイツ間のスポーツ関係の断絶をもって応えた。

二つの国の代表が、IOC 事務総長、オットー・メイヤーの仲介によって交渉の席に再び座ることができたのは 1962 年末のことであった。メイヤーの助言は両者がそれぞれに自分のチームを選び、両者が受け入れている同じ旗のもとに戦うというものであった。

しかしドイツ連邦のダウメ NOC 会長はこの提案は GDR NOC を事実上承認することになる危険があると考え、ブランデーに警告した。ブランデーはメイヤーの提案を拒否した。

結局 1964 年大会については、1960 年の統一ドイツチームと同じ条件で参加することが同意された。問題は 1964 年の東京での IOC 総会で再検討されることが条件となっていた。

しかし GDR の 15 年に及ぶ努力が実を結び、その国内委員会が、東ドイツの名の下に完全な NOC として認められたのは 1965 年のマドリッドにおける IOC 総会に於いてであった。

ただこのために、グルノーブルとメキシコシティーで GDR の国旗が掲揚されその国歌が演奏される懸念をなくすために、過渡的な解決策を見つけねばならなくなった。オットー・メイヤーの提案が再び取り上げられ、IOC は以下のように決めた：

“…1968 年の冬季大会とメキシコシティーにおけるオリンピック大会においては別々のチームとなるが、同じ旗じるしの下に行進し、同じ賛歌と同じエンブレムを使用する。”

この総会の間に IOC はまたベルリン問題について態度を決めた：“西ベルリンはドイツに属し、東ベルリンは東ドイツに属する。”

1968 年のメキシコシティーでの IOC 総会で、IOC 委員は東ドイツの NOC を“G.D.R.のオリンピック委員会”として圧倒的多数で承認した。

1972 年のドイツ連邦共和国におけるオリンピック大会で、GDR 代表団は 20 年に及ぶ戦いの末、初めて、ミュンヘンスタジアムで自分自身の旗の下に行進した。

2.3.1.2. ザール問題

二つのドイツ問題に比べれば、ザールの問題は非常に小さい意味しか持たなかったし、感情的な反応を引き起こすこともなかった。

ザールラントがオリンピックの舞台に表れたのは非常に短かった。彼らがオリンピック大会に独立したチームとして参加したのはヘルシンキだけであった。

そして1955年の国民投票の結果ザールは1957年1月1日にドイツ連邦共和国に参加することになり、ザールラント NOC は解散した。

ザールラント NOC のメンバーの、1956年オリンピック大会にドイツ連邦チームのなかで参加したいという要求は許されなかった。しかし1956年に、彼らが将来のオリンピックでドイツ連邦の一員として参加する許可を与えられた。彼らはすでにオリンピック大会にザールラントとして参加しているので、厳密に言えば、これはIOCの規則違反であったけれども。

2.3.1.3. 中国問題

IOC が取り組まねばならなかったもう一つの問題は中国であった。

1949年10月1日、毛沢東は中華人民共和国設立を公式に宣言した、蒋介石の率いる軍事政権は台湾に逃れ、そこでアメリカの経済的軍事的支援を受けた。

第2次世界大戦の前にIOCによって承認されていた中国のNOCのメンバーの大多数もまた台湾に移った。その際中国NOCの本部も台北に移した。

IOCには中国の委員が三人いたが国民党中国の崩壊のあと台北に居を定めた者はいなかった。王正廷 (C.T.Wang) は香港に、孔祥熙 (X.Komg) はニューヨークにそして董守義 (Tung Shou-yi) は共産主義者の征服の後も北京に残っていた。

台北のNOCと同じように、赤い中国のスポーツ連盟を傘下に収める全中国体育連盟も中国スポーツの唯一の代表であるとして、IOCにNOCとしての承認を求めた。

ヘルシンキでのIOC総会で両者は承認されなかった。しかしフランスの委員フランソア・ピエトリの提案で国際競技連盟のライセンスを持つ中国人選手はヘルシンキ大会への参加を許された。

北京のNOCを承認することは、アメリカに支えられた蒋介石の軍事政権の主張をひどく弱めることになるし、台北NOCを承認すれば、世界で最も人口の多い国を無視することになる。しかし両方を認めれば一つの国に一つだけのNOCを許すオリンピック憲章を冒すことになる。

中国本土からの選手は大会の開会式から 10 日過ぎるまでヘルシンキに到着せず、競技に参加するには遅すぎた。この大会ではたった一人の中国人水泳選手が競技に参加できただけである。

国民党政府は競技をボイコットし、台湾当局はメディアから大会の情報を一切締め出してヘルシンキ大会を無視しようとした。

結局東西両陣営の強い政治的圧力のもとに、IOC は二つの NOC を承認する決断をした。

1954 年のアテネにおける総会で、IOC は 23 対 21 でこの解決策を支持した。

長期的な観点にたてば、自らを普遍的な存在であるとする IOC は、中華人民共和国を排除することはできなかった。

国民党の中国も、共産主義者の中国も、この二重承認に満足しなかった。

そして両者とも、自分たちが唯一の代表であると主張し続け、相手の追放を要求した。

1955 年、台湾は巧妙なやり方をした。中国本土に同じようにすることを求めながら、自分たちが唯一の代表であるという主張を取り下げた。

中国本土は台湾の例に倣うか、非論理的に見えないために大会をボイコットし、台湾だけが競技をするチャンスを残し、世界の目に中国の正当な代表が台湾であるように見えるようにするか、しなければならなくなった。

第 51 回 IOC 総会で共産主義中国の代表、董守義は台湾をオリンピックファミリーから追放することを要求した。

ブランデージにとっては、この要求の背後にある理由はまったく政治的なものであると思われた。彼は、もし次の総会でも同じ要求を繰り返すのならば、書面による理由説明が必要になるだろうと告げた。政治的な理由で国民党政府の中国を追放することは正当化できない。

事態は予想された通りになった：中華人民共和国はメルボルン大会をボイコットしたのである。

“百花斉放”のスローガンの下で比較的自由であった時代のあと、1957 年の末に中華人民共和国では国内政治の極端な変化が始まった。

毛沢東はそれまでかなり穏当であった改革政策を急進化した。“大躍進”政策で国民生活のすべてを集団化しようとした。

この国内変革は中華人民共和国の外交方針の硬化を伴った。台湾の参加に抗議して、中国は 1958 年の東京における第 3 回アジア大会をボイコットした。

そして IOC と北京の関係ははっきりと悪化した。

ブランデーと IOC 委員董守義の間に、何回か、お互いを政治のためにスポーツを悪用していると非難する手紙のやり取りがあったあと、8月19日づけの手紙で、中華人民共和国はオリンピックムーブメントから離脱することを宣言した。

その手紙には IOC とその会長に対する直接的な攻撃の言葉が含まれていた。

ブランデーは“アメリカ帝国主義者の忠実な召使い”と書かれていた。

しかし人間関係がこの離脱の唯一の決定的理由ではないという推測は、これに続く主要な国際競技連盟からの脱退で証明された。中国は政治的にも、スポーツでも孤立を選んだ。

“社会主義の兄弟”ソビエト連邦との関係さえ、パワーポリティックスの次元の衝突で急激に冷却した。これは1960年代の末ウスリー河沿いの国境紛争で公然たる武力衝突に発展した。“文化大革命”が進行した時代、中華人民共和国が維持したスポーツ交流は、いわゆる第三世界の国々と卓球の世界選手権に限られていた。

IOC 内部では、共産主義ブロックが、中国の復帰を可能にするために台湾の NOC を追放すべきだと主張した。

エクゼター侯爵、国際競技連盟のうちで最も影響力の大きかった IAAF の会長は、赤い中国のオリンピックムーブメント復帰の道を容易にする努力を支持していた。

彼にとっては、中国人の真の代表は人民共和国であり、国民党政府はごく小さな少数派を代表しているにすぎなかった。それゆえ彼は台北に本部を置く NOC の名前から“中国”を除くべきであると主張した。

エクゼターの提案は1959年のミュンヘンでの第56回 IOC 総会で大幅な支持を得た。

48対7で、台湾の委員会を公式に承認された NOC のリストから除き、その名前を変えた場合のみ、再加盟を考慮するという決定がなされた。

この決定の公式文書は次のようなものである：

“台北（台湾）に本部を持つ中国オリンピック委員会は、中国におけるスポーツを統括していないので、その名称の下で承認を続けることができないと、国際オリンピック委員会事務総長によって通告されるであろう。そしてその名前は公式リストから除かれるであろう。もし別の名の下に再承認が申請された場合、それは国際オリンピック委員会によって考慮されるであろう。”

この決定が知られるとプレス、特にアメリカのプレス、に非常に強い反応を引き起こした。ブランデーと IOC は共産中国の再加入を実現しようとする共産主義者の圧力に屈して、台湾の NOC を追放したと非難された。

ミュンヘンの総会のあとアメリカの通信社“ユナイテッドプレスインターナショナル (UPI)”は、ソビエトの圧力によって台湾が追放されたという報道を流した。

この激しいプレスキャンペーンは、ミュンヘンから帰国して直ちに記者会見をしたアメリカの IOC 委員ダグラス・ロビーによってさらに煽りたてられた。

彼はブランデーの投票の数え方に疑問を呈し、投票の結果は非常に接近したものであったと嘘をついた。彼はこの提案に対する反対票は少なくとも 22 票あったと主張した。

ブランデーはアメリカで集中砲火をあび、アメリカ政府からさえ非難された。アメリカ議会、国務省、そしてアイゼンハワー大統領も彼に対する非難に加わった。

アメリカの国連大使ヘンリー C. ロッジは IOC の決定の修正を求めた。

中華人民共和国と台湾の間の厳しい緊張と、台湾海峡を何か月もの間砲火の煙のくすぶるトラブルスポットにした軍事衝突を、アメリカはまだはっきり記憶していた。共産主義者たちは沿岸砲兵隊によって国民党中国の金門、馬祖島を砲撃したのだ。

これに対してアメリカは、大量の軍事援助を行い、介入すると脅したのだった。

こうした政治的な背景のもとに、多くのアメリカ市民が IOC の決定は侵略者に道を開くために犠牲者を追放したものだと考えたのも理解できないことではない。

この間に台湾の代表とブランデーの交渉のあと、台湾の NOC は“中国 (Chinese) ナショナルオリンピックコミッティー”の代わりに“中華民国 (Republic of China) オリンピックコミッティー”という新しい名前での申請を IOC に提出した。

ミュンヘン決議のあとでは、これは挑発的な行為と受け取られ、回答はあからさまなものであった：“中国という言葉は除かれなければならない”。

しかし西側の政治的圧力が非常に強くなったので、次第に譲歩がなされた。

台湾の申請の数週間あとに、ブランデーは国民党中国の NOC を“中華民国オリンピックコミッティー”名の下に再承認するのを支持すると宣言した。

コミュニケーションで彼は自分の立場と IOC の立場をはっきりしようと試みた：

“5 月 28 日の投票で IOC は国民党中国の委員会をオリンピックムーブメントから追放、あるいは追い立てたわけではない。我々はこの解釈の誤りが広く伝えられたことを遺憾に思う。IOC の行動のただ一つの目的は、台湾のオリンピック委員会の統括の下にある競技者がオリンピック大会に参加できるように認定することであった…”

ブランデーは回想録の中で、この事件全体を誤解、悪意のある間違った解釈、そして翻訳の問題であるとしている。

彼の見方では、真実は“クリスチャンサイエンスモニター”の中のある指導者によって反映されている。そこでは“いわゆる国民党中国の承認の取り消し”について語られており、“オリンピック精神が東側と西側の政治家によって踏みにじられた”ことに遺憾の意が表明されている。

スポーツから政治を排除することを生涯の目的としていたブランデーは、東西冷戦の最前線の間に捕らわれてしまった。両陣営は彼に対して非難と告発を続けた。

ミュンヘンで彼は答えて、宣言した：“本当に、私は共産主義者、ファシスト、ナチ、帝国主義者なのだろうか？私はそのどれでもない、私はいかなる性格の政治とも無関係であった。”

1959年10月2日のパリでの理事会で、ブランデーはこのことをさらに明確化させた。この会議の議事録に次の文が見える：

“ある国のスポーツ組織はその国の名前を付ける権利がある。‘中国オリンピック委員会’の名前は誤りであった。この委員会は自分自身をフォルモーサあるいは台湾委員会と呼ぶべきであった。しかしこの国のこの部分の委員会が自分たちを‘国民党中国’のオリンピックコミッティーと呼ぶのを妨げることは不可能である。なぜならこの地域はこの名前で国際連合によって承認されているからである。したがって我々は我々のリストの中でその名前と呼ぶ。しかし解釈としては台湾であり中国ではない。”

理事会はIOCのフランス人副会長マッサールの動議、すなわち台湾NOCはまだ追放されたわけではないので、その承認についてはこれ以上の議論は行わないことにしよう、という提案に賛成した。さらに、次のIOC総会にIOC規則の改正草案を提案することを決めた。そして次のような記者発表を行った：

“10月2日のパリにおけるIOC理事会の会議において、主としてある通信社による不正確な記事のために2,3の国で台湾の選手のオリンピック大会参加の問題について非常な誤解が生れたことが留意された。事態を疑いもなくはっきりするために、理事会はIOCに対し、IOC規則書の71ページのパラグラフ1を次のように書き直すことを勧告した。（結果的にほかの部分の修正を伴う）：

‘以下のオリンピック委員会は、IOCによって、それらが活動している地域の名前の下にIOCによって承認される。’

この規則の解釈は普遍的に適用される。そしてこのことは以下の事実を強調することになる。IOCは政治問題には関心がないので、その国がその国内オリンピック組織をどういう名前と呼ぶかということは、その権限外であると考ええる。

IOCによって承認されたその地域の名前と境界は、本質的にIOCの決定事項であって、すべての国際的オリンピック活動で使用されなければならない。”

この修正草案はGDRと北朝鮮の国内委員会の承認についての議論にも、新しい基礎として援用された。

1960年のサンフランシスコにおけるIOC総会でこの修正案の提案は承認されたが、台湾NOCの名前についての議論が再び火を噴き、結論は同じ年のローマでの次のIOC総会に先送りされた。ここでは出席したIOC委員は次の決議を35対16で通した：

“1959 年のミュンヘンでの総会で IOC によって下された決定に関連して、台湾からのチームは開会式と競技に、オリンピックスポーツを統括するオリンピック委員会がある地域の名前のもとに参加することになっているが、それは台湾である。

当然のこととして以下の事実が留意された。すなわち台湾オリンピック委員会は、これはまさに国内事情によるものだが、将来：中華民国オリンピック委員会となるであろう。”

台北はしぶしぶながらこの決定に従った。1960 年、ローマオリンピックスタジアムで“フォルモサ”の名の下に行進したとき、国民党中国代表団の一人が貴賓席の前で“UNDER PROTEST”の文字が書かれた幕を広げた。

1963 年、バーデンバーデンでの第 61 回 IOC 総会で IOC は再び台湾に対して協調的な態度を示した。IOC はフィリピンの IOC 委員、ヴァルガスの要求を受け入れて、台湾からのチームは R.O.C. (Republic of China) の頭文字を競技用ユニフォームの上に付けることを許された。

中華人民共和国のオリンピックファミリーへの復帰は、さらに将来に遠のいたように見えた。さらに、中華人民共和国と IOC 内部に代表団を送っている他の共産主義国との間の溝が大きくなるということもあって、そうした国々からの中国再承認への支持は期待できなかった。これらの国々は、その代わりに GDR と北朝鮮の完全承認を強く望んだ。

台湾の代表団はこの政治的变化から利益を得ることができた。

事実、1966 年の総会で、IOC はヴァルガスとオーストラリアの委員、ウェイアーの、台湾チームは将来“中国（台湾）”の名前の下に競技することを許されるべきだ、という動議を、わずかの差（賛成 26 反対 30）で否決した。それにもかかわらずこの名前の変更は 2 年後に受け入れられた。この新しい名前の承認は、GDR と北朝鮮の NOC の新しい名前の承認と同時であった。

中華人民共和国では国内政治に関する限り、1970 年代初めに、文化大革命以前に優勢だった状況に“わずかな後戻り”を見せていた。

人民共和国の国際政治舞台への本格的な復帰は、スポーツではオリンピックではなく卓球によってなされた。1971 年春のアメリカ卓球チームの招待はアメリカ合衆国との外交関係樹立への道を準備した。この過程は政治史の上では“ピンポン外交”呼ばれている。

同じ年の 9 月、中華人民共和国は国連安全保障理事会のメンバーとして認められた。

国連内では、脱退を強いられた台湾にとって代わった。

中国問題はブランデー会長の任期が終わった後も、IOC にとって重い負担となった。

中華人民共和国の NOC がもう一度公式の承認を受けるには、1979 年までかかった。

2.3.1.4. 朝鮮問題

1910年に日本に属領として併合されていた朝鮮は、日本の降伏のあとソビエトとアメリカの軍隊が占領していた。これはドイツの状況に似ており、国は勝手に北緯38度線で分けられ、二つの完全に異なる存在となった：北の共産主義が支配する国と南の西側が支配するが独裁的な国家である。

占領軍の撤退に伴い1948年8月、南に大韓民国が設立され、すぐに北に朝鮮民主主義人民共和国設立の宣言が続いた。そしてこの二つの朝鮮の間に恐ろしい軍拡競争が始まった。

二つの国はそれぞれのイデオロギーのもとに力による統一を求めた。

両国は二つのパワーブロックの一方に支持された。北はソビエト連邦と中国、南はアメリカ合衆国である。

1950年6月25日、北朝鮮の軍隊は38度線を越え南の首都ソウルを占領した。アメリカと中国の軍隊のこの戦争への介入のあと、1953年7月に休戦が合意され、38度線が境界として承認され、それに沿って非武装地帯が設けられた。

1946年韓国はソウルに本部を持つNOCを設立した。そして一年後にIOCに承認された。

これは1953年に北朝鮮がNOCを設立していたにもかかわらず、朝鮮戦争のあとも、“ナショナルオリンピックコミティーオブコリア”として承認されていた。

1956年北朝鮮の代表は、彼らの委員会が承認されるよう申請した。

メルボルンでの理事会は、ドイツ問題との類似を指摘し、彼らに対し二つのドイツの例に倣って共に働くように助言した。

二つの朝鮮の委員会はこの状況の下ではそれは不可能であると答えた。

メルボルンでのIOC総会で、IOCは再び二つの朝鮮に対しドイツのモデルを採用するよう訴えることを決議した。しかし朝鮮半島の情勢をよく知るルーマニアの委員、アレクサンドル・シペルコがそのような提案は全く無意味であるとしていたし、韓国NOCもそれに同意していた。

1957年、これに続くソフィアのIOC総会で朝鮮問題は再び議題に上った。

ソビエトの委員、アンドリアノフの強い要求で北朝鮮NOCは仮承認を与えられた。

しかしながらこの承認は、GDRの場合と同じように、二つの朝鮮当事者が協議し、統一チームを作った場合のみ、発効するというものであった。

1959年ミュンヘンで、ブルガリアのIOC委員、ウラジミール・ストイチェフは、北朝鮮NOCは統一チームを作るために南のNOCに対して交渉を何回も働きかけているのに、拒絶されているのだから、北朝鮮NOCは承認されるべきだと提案した。しかしブランデーは、両当事者を中立地帯での交渉のテーブルに呼んだ方がいいと考えていた。

アンドリアノフはこの二つの提案に基づいて、北朝鮮の承認のあと、二つのNOCが統一チームを作るよう説得されるべきだという意見を述べた。

このアンドリアノフの計画はあまり説得力があるとは言えなかった。ひとたび二つの NOC が公式に承認されれば、彼らはほかのすべての承認されている NOC と同じように彼ら自身の独立したチームを作ることを主張するのは確実だからである。

この議論の間に IOC 会長は、南朝鮮の NOC からの北朝鮮 NOC と交渉することに同意するという書面による保証を持っていると示唆した。そして彼は韓国側が話し合いを拒否しているというストイチェフの論議を否定した。

結局この総会は、二つの朝鮮 NOC に対し中立地帯の香港で合同会議を持つよう促す書面を書くことを決定した。しかしこの会談は韓国の拒否によって実現しなかった。

朝鮮問題は 1960 年のサンフランシスコにおける第 57 回 IOC 総会、そして次の年のアテネの総会で再び議論された。

この二つの機会でも決定は先送りされ、南朝鮮の NOC はその拒否に固執し、IOC も決定することにあまり熱意を示さなかった。

ブランデーは疑いもなく、ドイツ統一チームの結成に似た更なる“スポーツの政治に対する勝利”の達成を望んでいた。

問題をそれ以上引きずらないために、IOC は結局行動することを強いられた。1962 年モスクワで、韓国 NOC に対して最後通告が突きつけられた。

朝鮮問題のその後の過程は、この会議の議事録によれば次のような言葉で記録されている：

“…北朝鮮のオリンピック委員会はブレッティンの公式リストに暫定的に載せられ、国際オリンピック委員会は、韓国の委員会に対し、オリンピック大会に南北朝鮮を代表する一つのチームとして参加することに関して意見を求める書簡を送る。その回答の期限は 1962 年 9 月 1 日である。この回答が否定的なものである場合には、北朝鮮のオリンピック委員会は 1964 年大会に独立チームとして参加することを許されるであろう。”

予想通り、この最後通告に、韓国は交渉に同意した。

しかし韓国は再び逃げを打って、自分たちが約束したことを実行しようとはしなかった。

北朝鮮は何度か会合を提案したが、韓国から何の反応も得られなかった。

結局、エジプトの IOC 委員、モハメッド・ターヘルが朝鮮の二つの部分の代表を、1963 年 1 月 24 日、ローザンヌで引会わすことに成功した。しかしこの会合は、同じ年の 5 月と 7 月、さらに二回行われた会議と同様、何の結論も出せなかった。

IOC 会長を入れた会合も、8 月 19 日に計画されたが、これも韓国側が北朝鮮との直接交渉を拒んだため実現しなかった。

ブランデーは再び韓国 NOC に対し最後通告を送った：すなわち 8 月 31 日までに統一チームに対する態度をきっぱりと表明せよというものであった。

韓国がこの指定されたデッドラインまでに返事をしなかったので、ブランデーはついに朝鮮統一チームを作る努力が失敗したことを認めざるを得なかった。

ブランデーはこのニュースをバーデンバーデンの IOC 総会で発表した。

そこで、二つの朝鮮のチームが東京大会で参加を許されることが全会一致で決まった：南朝鮮の選手は韓国の名のもとに、そして北の朝鮮は北朝鮮として。

北朝鮮はこの決定に侮辱を感じざるを得なかった。なぜ彼らが自分たちを北朝鮮と呼ばなければならないのか、相手方が全体の国を表す名称を使うことを許されているのに？

事態はさらに論争へと発展した。

北朝鮮は 1964 年のオリンピック東京大会に参加を認められたにもかかわらず出場しなかった。

何人かの北朝鮮の選手は GANEFO 大会（新興国の大会）に参加していた。この大会は IOC と国際競技連盟の後援なしに組織されていた。IOC と IF が非合法的な競争相手と見なすこの大会に参加することによって、選手はオリンピック大会への参加資格を取り消された。

IOC は、インドネシアと北朝鮮代表団からの参加資格を停止されている選手の東京大会参加を許すようにという要求を認めなかった。

北朝鮮の 180 人のオリンピックチームのうちわずか 6 人が参加を許されなかったにもかかわらず、北朝鮮チームの指導者はチーム全体を引き上げた。

北朝鮮はメキシコシティでの次の大会にかなりの人数のチームを送ったが、大会に参加するのはその名称が変更される場合のみという条件付きであった。

北朝鮮は繰り返し、自分たちが将来“朝鮮民主主義人民共和国のオリンピック委員会”と呼ばれるようにと要求していたが、この要求はそのたびに拒否されていた。

最後はグルノーブルであったが、もしこれを受け入れれば台湾や GDR の同じような要求を受け入れざるをえなくなる、という理由であった。

これはまさに 1968 年 10 月にメキシコシティでの IOC 総会で起こったことであった。

そこで、GDR、台湾、北朝鮮の自分たちの NOC の名称を変えるべきであるという要求は、ついに受け入れられた。

韓国の委員、キョン・チャンの、もし北朝鮮 NOC の名称に関するグルノーブルでの決定が変更されたら、韓国がオリンピックをボイコットするという脅しがあったが、以下のような決定が全会一致で採択され、北朝鮮代表団に付託された：

“もし北朝鮮のチームが第 19 回オリンピックアードのメキシコ大会に IOC 第 66 回総会で決定されているように北朝鮮の名前の下に参加するならば、1968 年 11 月 1 日以降自動的に、その名称は D.P.R.Korea に変更されるであろう。もしメキシコシティでの大会に参加しないならば、この決定は取り消され無効となるであろう。”

北朝鮮代表団は IOC 会長に対し問題をついに解決してくれたことを感謝した。しかしこれはただの儀礼的なジェスチャーにすぎなかった。

北朝鮮はこの処置に全く同意していなかった。彼らは“アメリカ帝国主義者の傀儡”の偽善的な決定であるとして“北朝鮮”の名の下にスタジアムで行進するのを拒否した。

開会式のすぐあと、韓国の IOC 委員キョン・チャンはブランデー会長に手紙を書き、北朝鮮 NOC の名称についての決定を、北朝鮮が不参加によって同意を破棄したのであるから、取り消し無効とする、と会長が宣言するように要求した。

しかしキラニン卿とブランデーはあまりに急いで決定することには慎重であった。事実何の決定も行われなかった。

メキシコシティの総会のあと、北朝鮮の NOC は公式な全ての機会に DPRK として記載された。

ブランデーは韓国の激しい抗議に耳を貸さなかった。彼は IOC 総会の決定を、それに関連する語句を議事録から単に消し去るという手段によって取り消した。

この議事録の公式版では、決定は次の語句によって置き換えられている：

“メキシコシティ大会の際の IOC 総会は、朝鮮民主主義人民共和国オリンピック委員会によって参加するチームは“北朝鮮”として競技するであろうことが、満場一致で決議された。将来のオリンピック大会においてはこのチームは“D.P.R.Korea”と称されるであろう。これは朝鮮チームの名称変更ではない。この解決はアベリー・ブランデー会長との話し合いのあと、自由な競争を許すオリンピック精神に基づき、両者によって同意されたものである。”

ドイツ問題と中国及び朝鮮の問題は、IOC がオリンピックそのものの領域にとどまっていることができず、現実の政治にかかわらざるを得ないことをはっきり示すものであった。

ブランデーのスポーツと政治は厳格に分けるべきであるという高貴な言葉は現実となることはなかった。

彼の会長としての 20 年の間に、IOC は二つのパワーブロックの間に挟まれている自身自身を認識せざるを得なかった。オリンピック大会の重要性が増すにつれ、政治的圧力の道具としての意味もますます大きくなっていった。

IOC の決定は政治的圧力にあまりにしばしば脅かされ影響された。そしてほとんどいつもその決定は、一方または他方によって、政治を象徴するものと解釈された。

2.3.2. アパルトヘイト問題

冷戦から生じる問題と共に、南アフリカは、おそらくブランデーの会長期間中に IOC が取り組まねばならなかった最も悩ましい問題であった。

アメリカの新聞“スポーツイラストレイテッド”は、この問題を“スポーツと政治が優位を争う長く続いた戦いの中でも最新の一番深刻な戦い”と呼んだ。

まさにこの戦いの道程の中で、IOCにとって今や対処しなければならない新たな力の基地があることが明らかになった。それは新たに独立へと解き放たれた若いアフリカの国々であった。

2.3.2.1. 南アフリカ問題

1910年5月31日、ケープコロニーにナタール、トランスヴァール、オレンジリヴァーの合併したものが、イギリス帝国の自治領の資格で南アフリカ連邦に編入された。

ケープコロニーの起源は、1652年にオランダの東インド会社とその貿易船のために補給基地を作ったことに由来する。

ケープコロニーでは19世紀においてもなお、金持ちの非白人及びカラード（白人との混血人）が公民権を獲得することが可能であった。しかしこの可能性は1910年までには次第に制限され、政治権力は白人少数者の手に集中するようになった。

人種差別の最初の法的基礎は“原住民土地法”によって置かれた。この法の下で、わずか7.3%の土地が非白人多数者に割り当てられた。非白人はこの区域以外の土地を買うことも借りることも禁じられた。ケープカラード（白人との混血）だけがこの規則の例外とされた。1936年の“原住民信託土地法”は、非白人の保留地を13%に増やしたが、同時にケープカラードから保留地の外の土地を買う彼らの昔からの権利を奪った。

その当時、白人は全人口のだいたい21%であった（非白人660万人とカラードとアジア人100万人に対して白人は200万人）。

1931年、ウエストミンスター憲章の下で、南アフリカ連邦は独立を獲得し、英連邦の一員となった。独立後、差別政治は加速された。

最初の人種差別法は主として経済的な懸念に基づいたものであったが、1948年に国民党の極右派が権力の座に就くと、アパルトヘイト政策として知られるイデオロギーに基づいた人種隔離政策が追求された。

住民は“人口登録法”で人種によって分けられた。

“集団地域法”の下に、非白人は“ホームランド”に追い払われた。その際の移住の方法はしばしば流血を伴った。

日常生活における人種差別は“小”アパルトヘイト法によって支配された。

人種間の結婚は禁止され、病院、教会、海岸、トイレなどの公共施設はそれによって区別して使わなければならなくなった。

2.3.2.1.1. 南アフリカのスポーツ政策

スポーツも社会的なサブシステムであり、全体としての社会組織のなかに織り込まれているので、この政策によって、直接、間接に影響を受けた。

気候の点で、南アフリカはさまざまなスポーツを行うのに理想的な条件を提供した。

この有利な条件を、イギリス人がスポーツの伝統をここアフリカ最南端に持ち込んで以来、白人たちは十分に利用した。この伝統の結果が、好ましい気候条件と結びついたので、スポーツは南アフリカの生活の中で非常に重要な位置を占めることになった。この状況の第一の受益者は白人たちであった。

非白人にとってスポーツをする機会は、意図的に維持された貧弱な社会的状況と、人権の侵害のために、間接的に限られたものになっていた。公共施設の人種が混じって使用することの禁止は、白人と非白人が一緒にスポーツすることを妨げていた。

非白人が使用できるスポーツのグラウンドは、ほとんどがひどい状態であった。

そして彼らの学校に行く期間が短いことと、“バンツエ教育法”、これは実質的に高等教育から非白人の若者を締め出すものである、の影響で学校でスポーツをやる機会はごく限られていた。

プロのボクシングとレスリングを管理する法律を例外として、政府は人種が混ざったスポーツを直接制限するような法律を、通過させるようなことはけしてしなかった。いろいろな機会にそのような法律を作るという脅しをかけたけれども。

政府はスポーツについての公式な態度を、1956年、初めて内務大臣デンゲスによって明らかにした。この声明の重要な点は以下のようにまとめることができるだろう：

- “1. 白人と非白人はそれぞれのスポーツを別々に組織しなければならない。
2. 南アフリカ内部で人種間の試合は許されない。
3. チームの中で人種が混じることは避けねばならない。
4. 人種の混じったチームが海外で試合をしてはならない。
5. 南アフリカで白人の南アフリカチームと試合する国際チームは南アフリカの習慣に従って全員白人でなければならない。南アフリカチームが海外遠征するときには彼らが試合する国の習慣を尊重するであろう。
6. 海外からの非白人のスポーツマンは南アフリカで南アフリカの非白人と試合することができる。
7. 非白人の組織が国際的な承認を求める場合は、すでに承認されている白人の組織を通じて、そのスポーツの規則に従って承認を求めなければならない。
8. 政府は、国際試合で南アフリカの白人を負かすことによって、南アフリカの伝統的な人種分離を変えようとする非白人の活動に対してはパスポートを発行しない。”

最後の二つの項目は国際卓球連盟の行為をあてこすったものである。

ITTFは、イスラエルチームの南アフリカでのツアーの間、非白人観客が締め出されるということがあった後、南アフリカの白人の卓球連盟の承認を取り消していたのである。

こうして1957年の世界選手権で、南アフリカは黒人の南アフリカ卓球会議が代表した。

しかし2年後に、政府は外国旅行を出来なくするために非白人選手のパスポートを取り上げた。

スポーツにおいてアパルトヘイトを管理することを明記した規則がない、という事実は非白人の選手にとって有利であるよりは不利に働いた。何故なら法律の形での証拠がないことは、白人のスポーツ連盟が国際レベルで追放されることを防ぐのに役立ったからである。

2.3.2.1.2. 南アフリカとオリンピックムーブメント

IOC はアパルトヘイトのスポーツにおける実例について、1955 年、国際ボクシング連盟代表のラッセル大佐によって初めて知らされた：

“国際アマチュアボクシング連盟は、その会員の一つによって、ある国で有色人種、すなわち黒人のボクサーが白人のボクサーと試合することができないという状況があることに注意を喚起された。これは我々にはオリンピック憲章の基本原則の違反であるように思われる。”

パリにおける次の IOC 総会で、ブランデーはこの問題を取り上げ“世界のある国々における有色人種の選手に対する差別は、オリンピック精神に全く反するものである”と非難した。しかしこの時 IOC はこれ以上の反応はしなかった。

オリンピックムーブメントのなかでの、南アフリカの態度に対する最初の公然たる批判は、1958 年、ノルウェーNOC によってなされた。

ブランデーへの手紙で、オラフ・ディトレフ-シモンセンはノルウェーNOC は南アフリカをオリンピックムーブメントから追放すべきであると思うと述べた。

これに応じてブランデーは、この問題の深刻な性格を知っており、IOC は遅かれ早かれこれを処理しなければならないであろうことを明らかにした。

その瞬間は次の年にやってきた。

ローマにおける IOC 理事会と NOC 代表との会議の間に、1959 年 5 月 18 日、ソビエトの委員、アレクセイ・ロマノフが人種差別、つまり南アフリカにおけるオリンピック憲章違反について言及した。

ブランデーは、IOC はオリンピック憲章の第一条の侵犯を決して許さないと述べた。

第一条によれば、いかなる国もいかなる個人も、人種、宗教、政治的立場を理由に差別されてはならないのだ。彼はさらに、IOC は南アフリカ NOC と連絡を取り、何か月もの間、人種差別の事実について究明しようとしていると示唆した。

南アフリカの IOC 委員、レジナルド・ハニーはロマノフの非難に反論し、議事録によれば次のように述べた。“南アフリカ NOC は誠実であり、わが国の全てのアスリートはオリンピックの国際基準に達している限り、オリンピック大会に参加しようと努力している。”

ブランデーの質問に対し、彼はさらに、政府がオリンピック大会の参加資格を得たすべての南アフリカ選手にパスポートを発行することを保証している、と請け合った。

一週間ののちにミュンヘンで行われた次の IOC 総会で、南アフリカのアルトヘイト問題が初めて議論された。

以前のローマの時と同じように、レジナルド・ハニーが彼の国では非白人の選手は差別を経験していない、そしてオリンピックの規則は厳密に守られていると保証した。

彼は、これまでオリンピックチームに非白人がいなかったは、ただ単に非白人の成績がまだ国際的水準に達していないという事実によるのだと主張した。

SANOC（南アフリカオリンピック委員会）はそれにもかかわらず非白人のスポーツの発展を助けると主張した。

ニュージーランドの委員、サー・アーサー・ポリットが、最近の英連邦大会の会長という資格で、人種差別を示すものはそこでは見られなかった、とハニーの言ったことを確認した。しかしこれらの見方を評価する時には、この英連邦大会には、非白人の南アフリカ人は一人も参加していなかったことを心にとめておかなければならない。

ハニーの主張は、ブラジルの IOC 委員サントスとソビエト連邦のロマノフ委員によって批判された。彼らは南アフリカによって非白人と白人の間の試合が禁じられているケースを報告した。インドの IOC 委員ソンドーは、そうした差別を防ぐことを保証できるようにするにはどうするかという問題を提起した。

しかし議論の終わりに、ブランデーは、南アフリカ委員の保証と約束を信用すべきだろうと言うことができただけであった。

1960 年のローマでの総会では、1959 年に非白人のスポーツ振興を目的に設立された南アフリカスポーツ協会（SASA）の必死の努力にもかかわらず、南アフリカの問題は議題に上らなかった。この協会は聖職者ミハエル・スコットに率いられた代表団を送っていた。

この代表団は、南アフリカの委員レジナルド・ハニーの出席している理事会によって受け入れられることが決定された。

この会議についての報告から、我々は議論のあと IOC の代表たちは以下のような印象を持ったことを読み取ることになる。

“南アフリカオリンピック協会（委員会）は、1959 年に R.ハニー氏のした約束—必要とされる能力を持つ選手は南アフリカチームからは一人として排除されない—の実行にできる限りの努力をしていた。”

こうした保証にもかかわらず、ローマ大会の南アフリカチームは再び白人の選手役員だけで構成されていた。

この間、南アフリカ政府の人種政策のますますの過激化は、国中を激しい暴力の循環に引き込んでいた。

1960年の春、パンアフリカニスト会議（PAC）による、パス法に反対する平和的なデモが69人のデモ参加者が撃ち殺されるという惨劇に終わった。

PACはアフリカ民族会議（ANC）と共に禁止された。そしてこの二つの組織はそれ以後地下に潜ってテロ活動をするようになった。

1962年に、“ブラックフリーダム”運動の指導者が、“ブラックシヴィルライツ”のリーダー、ネルソン・マンデラその人であるとして逮捕された。彼は後に終身刑を言い渡された。

スポーツの分野でも政府はアパルトヘイト政策を追求し続けた。

新しい内務大臣デ・クラークは1961年と1962年に、彼の前任者デンゲスによって採用された人種的に差別するスポーツ政策を確認した。

1963年初め、政府は議会で、もしスポーツ組織が政府の政策に従わないならば人種が入り混じってスポーツをすることを禁じる法律を制定すると警告した。

こうした背景の下で、SANOC 会長クレッパーはこの政策に反対し、オリンピックの原則を守ることを要求する、勇気を示した。

1962年のモスクワでのIOC総会で、ブランデーは南アフリカ問題を集約し、ローマでされた約束は守られていないと断言した。

総会は圧倒的多数で、南アフリカの委員会がその人種政策をナイロビ総会の前に変更しないならば、IOCは南アフリカオリンピック委員会を一時資格停止せざるを得ないだろうとSANOCに通告することを決めた。

5人のIOC委員がこの決定に反対投票をし、SANOCの即時資格停止を要求した。

その当時IOCには、サハラより南のアフリカからはたった二人のIOC委員がいたに過ぎなかった。つまり南アフリカの委員、ハニーとケニアのレジナルド・アレキサンダーであった。二人とも白人のスポーツ役員であった。

1962年10月7日、南アフリカ反人種差別オリンピック委員会（SANROC）が有名な詩人デニス・ブルータスのリーダーシップの下に設立された。

わずか2日後に、この委員会はIOCにメンバーとしての承認を申請した。しかし、もしSANOCがその人種差別政策をやめたならば、メンバー資格を返上することを示唆してい

た。これが承認されるチャンスはほとんどなかった。というのも実施されている人種差別の主たる責任はNOCではなく政府にあったからである。

政府がアパルトヘイトに固執する限り、新しい委員会ができたとしても何ら基本的な変化をもたらすことは出来なかった。

ナイロビ総会は、ケニア政府が白人のSANOC代表に入国ビザを発行することを拒否したために、急遽ドイツのバーデンバーデンに移さざるを得なかった。

この拒否は1963年に設立されたアフリカ統一機構(OAU)の決議に基づいたものであった。この決議は、OAUのメンバーは南アフリカあるいはポルトガルの代表を含むいかなる会議もボイコットするであろうと述べていた。

IOC事務総長メイヤーの助言で、バーデンバーデンの南アフリカ代表団は初めて非白人の役員を含んでいた。

バーデンバーデンの総会で三人の南アフリカNOC(SANOC)代表は“アパルトヘイト”は国内問題で[あった]ので、IOCを煩わせる問題ではないと主張した。そう主張することによって、彼らは国際連合で彼らの政府が表明したと同じ立場をとったのである。

非白人選手に関して、代表団は、彼らは南アフリカの中で彼ら仲間同士でトレーニングすることができるし、外国で行はれる人種の混じった試合に参加することができる。適切な能力を持つ選手については、彼らが東京の大会に行くことができるよう、パスポート取得が可能になるよう努力すると主張した。

この南アフリカの意見表明の後、IOCはまだ多くのことが残されていることに留意しながらも、進歩があったという評価を下した。

総会は30対20、無効票3で、以下の決議を採択した：

“南アフリカのオリンピック委員会は、オリンピック規則の精神、特に根本原則1、規則24の精神を受け入れることをはっきりと宣言しなければならない。そしてその政府から、1963年12月31日までに、スポーツと国内での試合における人種差別に関する政策の変更を獲得しなければならない。これに失敗した場合、南アフリカオリンピック委員会はオリンピック大会にチームを参加させることを禁じられるであろう、と“通告された。”

南アフリカはこの要求に従わなかった。

1964年初め、SANOCは欠席のまま、以下の声明を含む手紙をIOCに送った：

“バーデンバーデンの会議での決議は政府に伝えました、政府はその決議に意図されているような性質の政策変更を考慮することを拒否しました。”

IOCは今や行動しなければならなくなった。

理事会でIOCは、SANOCは“非白人”選手をオリンピックチームに含むことに同意し

たが、要求されているように、政府の人種差別政策から公然と決別することをしていない、と確認した。

SANOC はさらなる最後通告を受けた。

1964 年 8 月 16 日までに、これは東京大会のエントリー締切日であったが、IOC の要求に従わず、人種差別から決別しない限り、東京大会参加は許されないであろう。

インスブルックでの次の IOC 総会で、ブランデーは、アパルトヘイトは政府の専管事項であると認めたうえで、同時に SANOC はこの政策が人種に基づく差別を否認するオリンピックの原則に合致するものかどうかという問題に直面しなければならないと注意した。

総会はバーデンバーデンの決議の一つ一つの項目について聞き取りを行った後、次の決議を反対 1 票で採択した：

“国際オリンピック委員会は、南アフリカ N.O.C. はこの義務を十分に遂行していないと判断する。こうした状況の下で、バーデンバーデンで可決された決議案はまだ有効であり、南アフリカチームの東京での競技への招待は撤回される。南アフリカ NOC は、規則 24 の義務を遂行した場合、IOC に戻ってこの決定について顧慮を求める資格を得るものとする。”

南アフリカの委員はこの決議を通告された。彼はエントリーの締切の前に IOC の条件を満たすよう全力を尽くすと約束したが、東京大会は南アフリカの参加なしに行はれた。

この春に、別々に行はれた非白人のための南アフリカ大会と白人のための大会のあと、SANOC は何人かの黒人選手を含むオリンピックチームを指名した。しかしこれはアパルトヘイト政策から決別しなければならないという IOC の要求を満足するものではなかった。

政府は人種差別政策についての強行路線を続けていた。そして SANOC 会長ブラウンは IOC の要求を拒否し、もし東京大会から南アフリカの選手を排除するならば、それは政治的差別であると IOC を非難した。

1966 年に SANOC はその資格停止の撤回を企てた。

SANOC は、理事会の行はれるローマに代表団を送って、非白人と白人のスポーツ役員それぞれ同数からなる委員会を作ることに同意すると告げ、このことについては政府も同意していると主張した。

しかし理事会は用心深くなっていた。というのは代表団がもう一度差別をしないというリップサービスをしているのかどうか、確かめるすべがなかったからである。

理事会は、IOC がこの人種の混じった委員会について確証を得るまで、何かの決定を延期するよう提案した。

ローマでの第 65 回 IOC 総会で、SANOC の資格問題は再び議題に上った。

ブランデーは議論を始めるにあたって次のように述べた。メキシコシティでの大会に関して、南アフリカ問題をもう一度現実に基づいて分析することが必要である。しかし彼は、来年まで何の決定もされるべきでないと注意した。直ちに制裁を科するようなことをすれば、現在 SANOC が南アフリカ政府と行っている交渉をぶち壊しかねないからである。

このスピーチの最後に彼は、東京大会に参加資格を得ていた 7 人の有色人種の選手が SANOC の資格停止の犠牲になり、そのあとプロに転向してオリンピックムーブメントに参加する機会を永久に失ったことを嘆いた。

以前理事会でしたように、南アフリカの代表団はオリンピック憲章尊重への同意を表明し、政府の同意を得て人種の混じった委員会を設立することに言及した。

IOC は事態を見守ることを決め、現地で状況を調査する IOC 委員会を設置した。

この間に南アフリカでは内務大臣の交代があった、しかしデ・クラークの後継者、ル・ルーもまた、南アフリカが人種の入り混じったチームによって代表されることへの反対をはっきりと表明した。こうしてオリンピック規則に合致したスポーツ政策の実施ははるか遠いこととなったのである。

しかし 1967 年 5 月のテヘランでの IOC 総会の直前に、政策変更の兆しがあるかに見えた。まじかに迫ったメキシコシティでの大会に関して、当時の南アフリカ首相フォスターは人種の混じったチームを送ることに反対しないと述べたのである。

しかし、彼はその後、人種の入り混じったオリンピックの予選試合を禁じて、この声明を修正してしまった。そのためチーム種目に人種の入り混じったチームは参加できないことになった。

1967 年の IOC 総会の前に、SANOC 会長が再び現れ、分厚く、ある部分では熱烈な、SANOC のオリンピックファミリーへ復帰と、“背負い続けることのけして容易ではない追放されたものの汚名”からの解放、を求める弁論書を手渡した。

今回彼はさらなる譲歩を示した。混合チームの黒人と白人は一緒に旅行し、一緒に宿泊し、同じチームユニホームとエンブレムを身に着け、同じ旗の下に行進する。

こうした条件の下では、南アフリカ選手のオリンピック参加は IOC の要求と規則に合致することになるはずだと彼は主張した。

もしこれをまた拒否するならば、オリンピック大会は一般大衆の信頼を失うであろう。

白人にとっては、その種の決定はもはやスポーツや正義にかかわるものではなく、単に政治的なものと映るであろうからである、と彼は強調した。

IOC の決定はグルノーブルの次の総会まで延期された。その時まで、調査委員会が 8 月と 9 月、南アフリカ中を旅したうえで、報告書を提出するからである。

この委員会の出発は、その構成についての南アフリカの異議申し立てのために遅れた。

異議はアデモラに向けられていた。彼は事務総長ウェスターホッフと白人のケニア人アレクサンダーと共に委員に指名されていたのである。アデモラはアフリカの黒人であった。

批判は何よりも彼個人に向けられていて、身の安全が保証されないと考えたので、このナイジェリアの法律家は委員会からの辞意を表明した。

このように、構成された委員会のアパルトヘイトが支配する国への旅行は、多くの問題を抱えていた。

結局、ブランデーはほとんど無理強いして、アデモラを何とか、南アフリカへ飛ぶよう説得した。オランダの IOC 委員、ファン・カルネヴィークとエクゼター侯爵の忠告で、オランダ人のウェスターホッフも、アイルランドのキラニン卿に交代した。

キラニン卿ならば、オランダ人移住者の子孫である南アフリカの白人、アフリカーナーに対して、より中立的な態度を取ると受け取られるのではないかと、考えられたのである。

委員会は南アフリカに 10 日間滞在し、フォスター首相、白人、非白人のスポーツ役員を含む政府代表と討論した。

しかし懸念されたように、現政権に忠実な代表だけとの接触がアレンジされ、反対を表明するチャンネルは一切閉じられていたので、委員会は帰途、ローザンヌで SANROC 代表と会ったのであった。

100 ページ以上の報告書を、委員会は 1968 年 1 月に提出したが、それは SANOC に好意的なものであった。結論の第 5 に、次のように読むことができる：

“南アフリカ内のオリンピックスポーツに関わる全ての町のスポーツ行政担当者と選手から得られた圧倒的な証拠は、SANOC のテヘラン提案がメキシコオリンピック大会への人種混合チームのための受け入れ可能な基礎となるということである。”

1967 年 12 月半ばの会議で、理事会は調査委員会の報告書を次の年の 1 月 30 日に発表することを決めた。そして総会に出席していない IOC 委員には郵送による投票を認めた。

グルノーブルの IOC 総会は南アフリカ問題を取り上げる 5 回目の総会であった。

SANOC 会長は再び招待され、4 ページの声明を読み上げた。そのなかで彼は SANOC がテヘランで合意された条件を満たしてきたと明言した。

彼は、IOC が南アフリカ委員会に手を差し伸べてほしいと訴えた。SANOC が“政治からスポーツを解放”する手段となれることを認めるひとつのジェスチャーとして。

ブランデーの気持ちは、メキシコシティでの南アフリカの参加に傾いていた。彼はスポーツと政治が厳格に分かれているべきであるという原則をいまだに信じていた。総会の前ブラウンへの手紙で、ブランデーは、ブラウンが自己弁護のためにどういう議論をすべきか、何を論ずるべきかについて指示を与えていた：

“もし私があなたなら、承認のためのすべての理由づけを含む回状のための声明を用意するでしょう。それにはあなたが実現したすべての進歩を引用すべきです。”

オーストラリアの委員、ウェアは英連邦の代表でもあったので、南アフリカに同情的であると見られていた。そこで一つの決議案を起草するよう求められた。

長い議論のあと、その決議案は郵送による投票にかけられることが決まった。

以下のようなものである：

“南アフリカについての委員会の報告書を熟読して、国際オリンピック委員会は深い憂慮をもって、南アフリカ政府の人種差別政策がその国の国内委員会がオリンピック規則の根本原則1に基づいたIOCの目的を十分に達成することを妨げていることに、留意する。しかし、SANOCによる積極的な努力が、1967年5月にテヘランにおけるIOC総会で声明された提案、人種の混じったチームは成績によって選ばれる、の確固とした実施という結果を生んでいることに、IOCは勇気づけられている。

IOCは、SANOCが根本原則1に適合するチームを1968年のメキシコにおけるオリンピック大会に参加させることができること、そしてアマチュアスポーツにおけるすべての形の人種差別を取り除く努力を続けるという理解の下に、1972年の末までにこの問題を再考することを決議する。”

2月15日に投票の結果が発表された。総会での議事録によれば“絶対多数”で南アフリカチームのメキシコシティ大会への参加が認められたことになっている。

しかしローザンヌでの理事会でキラニン卿に迫されたブランデーは、過半数が期待されたほどははっきりしたものではなかったこと認めざるを得なかった。彼が思いだせる限りでは、賛成37、反対26といったところであった。

最初のボイコットの脅しはその日のうちにウガンダから来た。

ちょうど5日後、16の国が、もしIOCがその決定に固執するならば、メキシコシティでの大会をボイコットするという意図を表明した。

2月25日ブランデーは記者会見を開き、“メキシコ大会に招待されているのは南アフリカのチームではなく、人種の混じった試合で選ばれた個人の人種の混じったチーム”であると強調した。

この間ボイコットをすると警告する国の数は急速に増え続けた。アフリカスポーツ最高評議会(SCSA)は理事会の特別会議で、メキシコシティでのオリンピックのボイコット

を決めた。マラウイを除いて全てのアフリカの IOC メンバー国は、この決定に従う決意を表明した。

グルノーブルの IOC 総会の前に、SCSA の事務総長ジャンクロード・ガンガは、もし南アフリカチームが参加するならば、オリンピックムーブメントは分裂しかねないとブランデーに警告した。彼は、そうなれば、ヨーロッパとアメリカだけでオリンピックをしなければなくなると言いたかったのである。しかしブランデーはこの警告にあまり注意を払わなかった。

それでも相次ぐボイコットの脅しは、IOC に更なる行動を迫らずにはおかなかった。本来にオリンピックムーブメントがばらばらになるおそれがあったのである。

イタリアの IOC 委員で NOC の常任総会の会長であるジュリオ・オネスティは、ブランデーに特別 IOC 総会の招集を勧告した。しかしブランデーはこれを拒否した。

スウェーデンの NOC とソビエトの NOC、そしてほとんどパニックに陥ったメキシコ組織委員会が特別総会を要求し始めるに及んで、初めてブランデーは3月末に理事会の形で会議を持つという妥協に同意した。

この会議の直前にブランデーは南アフリカに飛び、SANOC が自発的にオリンピック不参加を決めるように説得した。ハニーの答えは簡潔なものであった。“ブランデーさん、私はヨハネスブルグでリンチに合うよりもメキシコシティで射殺されたいと思います。”

1968 年 4 月、ローザンヌでの会議の開会に当たって、会議は意見の一致が得られるまで中断されることはないだろうと宣言された。

理事会の 9 人の間の長い議論の末、ブランデーは状況を以下のようにまとめた：

- a) 理事会は IOC の統一を守らなければならない、そしてアマチュアスポーツの世界における決裂を防がなければならない。
- b) メキシコ大会は救わなければならない。
- c) 脅迫やボイコットや政治的介入に屈してはならない。
- d) 一般的な意見は、南アフリカチームがメキシコに現れることは賢明ではないというものであるように思はれる。 “

これらの 4 点は全く相容れないものであった。さらに議論が続いた後、会長は再び議論をまとめた：

- “1. グルノーブルでの決定にかかわらず、他の理由のために SANOC チームは第 19 回オリンピックアードの大会に参加すべきでないという合意が得られたように思われる。
2. IOC の緊急総会は望ましくない。もし行えば激しい敵意に満ちた議論に終わるだけであろう。

3. オリンピック大会を救うために直ちに決定がなされなければならない。そしてその決定は理事会ではなく IOC によってのみ行うことができる。”

理事会はIOC委員に対する電報による投票のための以下の決議文を送ることに同意ができるまでに、更に二日間、行ったり来たり議論をした：

「この会議において理事会が受け取った国際的風潮に関する全ての情報に鑑み、理事会は、南アフリカチームが第 19 回オリンピックの大会に参加することは、最も賢明でないという意見に全会一致を見た—それゆえ理事会は、この大会への招待を撤回するという全会一致の提案を是認されるよう強く勧告する（ストップ）。この電報による投票は規則 20 によるものである。CIO ローザンヌに直ちに返電されたい。」

ブランデーは記者会見をして、理事会が意見の一致にたどり着けたのは、安全の面にに関してだけであったと述べた。世界中の一触即発の政治情勢を見れば、南アフリカの参加は本当に危険だと言うことである。

SANOC 会長は IOC の“不法な、道徳に反する”決定に激しく抗議した。しかし、IOC 委員の過半数はこの決議に賛成した。賛成 47、反対 16、棄権 8 であった。

ブランデーにとっては、この結果は敗北であった。もう一度、彼は政治に押し切られた。しぶしぶ、彼はあきらめた。“政治勢力の発言力はわれわれより強いということだ。” IOC は政治的おどしに弱みを見せるようになった。

メキシコ人たちはホット息をついた。彼らのオリンピックは救われたのである。

しかし、主催者はすぐに次の心配事に直面しなければならなかった。

世界中の至るところで、暴力的な騒乱が起きていた。

この反乱は 60 年代初め、アメリカでの学生の抗議運動として始まった。そして世界のほかの場所に次第に広がり、その間、ますます政治的な色彩を強めるようになってきた。

デモ参加者は根本的な社会変革を要求し始めた。

メキシコシティーもこの抗議の波に洗われた。オリンピック大会開会のほんの数日前、政府軍とデモをする学生との間に衝突があり、“Plaza de las Tres Culturas” (三つの文化の広場)は血に染まった。公式筋によれば 26 人、目撃者によれば数百人が銃火に倒れた。

ロバート・F. ケネディー、マーチン・ルーサー・キング Jr の暗殺、ベトナムでのテト攻勢に続いてアメリカでは人種差別、戦争、体制に対する抗議の大波が急速に高まった。

コロンビア大学の学生、ワシントンのデモ参加者たちは不満を暴力に訴えた。

1967年には、アフリカ系アメリカ人選手たちは、オリンピックボイコットはアメリカにおける人種差別と、南アフリカあるいはローデシアのオリンピック参加反対に向けられたものだと考えていた。

アフリカ系アメリカ人社会学者、ハリー・エドワーズのリーダーシップの下に選手たちは“人権のためのオリンピックプロジェクト”をつくった。

IOCの態度に照らして、ボイコットのプランは捨てられた。

しかしスプリンターのトミー・スミスとジョン・カルロスは、彼らのスポーツでの成功によって与えられた機会を、アフリカ系アメリカ人のブラックパワー運動に対する共感を世界に示すために使った。

星をちりばめた国旗が掲げられ、アメリカ国家が演奏されたときに、彼らは表彰台に立って黒い手袋をはめたこぶしを突き上げた。これは“ブラックパワー”に彼らが属していることの象徴であった。

このデモンストレーションのあと二人の選手は直ちにアメリカに送り返された。そしてUSOCは、チームの中に“そのような未熟な態度の、オリンピックの原則に対する尊敬を欠いた選手”を入れていたことに対して非難された。

メキシコシティでの大会の後でも南アフリカ問題はIOCを悩まし続けた。

1969年、南アフリカスポーツ連盟はオール白人南アフリカ大会をブレイムフォンテンで開催した。1年の後、非白人のために同じ大会が開かれた。

南アフリカ郵政省はこの二つの大会を記念してオリンピックリングを付けた切手を発行した。オリンピックシンボルはポスターやバッジにも使われた。

このオリンピックエンブレムの悪用についてSANROCから通報を受けて、理事会は1969年3月の会議で、SANOCに対し、オリンピックの理想に反する大会にこのシンボルを使ったことを非難する電報を打つことを決めた。

1969年10月IOC理事会とNOCの代表との会議で、アフリカのNOCはSANOCを直ちに追放し、IOCの管轄の下に行はれるイベントにその代表が参加できないようにすることを要求した。この会議の前に、あらかじめ理事会は以下の決定をしていた：

“1. 南アフリカNOC追放に賛成するアフリカのNOCの代表は、SANOCに対する告発と証拠のリストを作成しなければならない。

2. 決定はワルシャワの総会でIOCによって、アムステルダムまで延期された。

決定は、近づく第20回オリンピックの大会を前にそこで下されなければならない。”

この決定のあと初めて、南アフリカの二人の代表が発言の機会を与えられた。

そこではいつもの議論が繰り返された。SANOC はオリンピックの規則に従って行動しており、その追放は非白人、白人選手双方の権利を同じように侵害する、不当な措置となるであろうと主張された。

アムステルダムは、南アフリカにとって長い道の終わりを意味した。

1971 年オランダでの IOC 総会で、アフリカ人たちは SANOC に対する 8 つの告発のリストを提出した。これらの告発を基礎に彼らは、南アフリカ委員会はオリンピック憲章の規則 1、24、25、の継続した違反を理由に、オリンピックムーブメントから追放さるべきである、と結論した。

これに対して南アフリカの IOC 委員は、アフリカ人たちの告発に反論し、IOC を攻撃した。そしてブランデーグに対し、これらの誹謗中傷が投票の結果に及ぼす役割は想像つかないことではなかったという意見を、後で述べてくれるようにと迫った。

投票の結果は極めて接近したものであった：追放賛成が 35 票、反対が 28 票、3 人の IOC 委員が棄権した。

1972 年初め、札幌で開かれた IOC 理事会で、南アフリカのオリンピックファミリーへの復帰を許されたいという願いは同情を誘って発言が許された。理事会は、直ちに追放するのではなく資格の一時停止に代えることを提案した。しかし IOC 総会はこの提案を拒否した。

IOC の中の力のバランスは変化していた。アフリカの国々の力は大きくなっていた。アフリカの IOC 委員の数は少なく、1969 年に一人、1971 年にもう一人増えたに過ぎなかったが、非植民地化の過程で著しく数の増えたこれらの国々の世界的な政治的影響力は着実に増大していた。この傾向は国際連合のような、他の国際組織で特に顕著であった。

彼らのスポーツ政策で圧力をかける能力もまた大きくなっていた。

彼らは彼ら自身で、アフリカスポーツ最高評議会を結成した。そして少なくとも南アフリカに関する問題では団結力を示した。

また新しく設立された NOC が、PGA（NOC 常任総会）のなかで多数を占め、その影響力は IOC のなかで着実に大きくなっていた。

そしてメキシコシティー大会でアフリカ人ランナーが好成績をあげて以来、彼らはスポーツにおける一つの勢力として認められるようになった。

1970 年代初期に、東西対立にデタントが始まって以来、IOC 内部の東と西の間を分かつ線もまたぼやけはじめた。もはや東のブロックに対して、西側が主義の問題として反対投票をするというようなことはなくなっていた。そのようなことがありとすれば、“第三世界”に反対する投票であった。

その際、東のブロックは、同盟者を増やそうとして熱心に彼らに味方した。

またそうした傾向の中で、イタリア、スウェーデン、南アメリカの委員たちも、わりに気楽にブラックアフリカの側にたった。

ブランデーの時代は終わりに近づいていたが、SANOC にとってそれは、最も影響力の強い支持者の一人を失うことを意味した。ブランデーは、スポーツは政治から独立してあるべきだという観念にとらわれて、現実の世界ではスポーツと政治が常に絡み合っていて分離できないものであることを見ようとしなかったのである。

2.3.2.2. ローデシア問題

南ローデシアは 1923 年以来、イギリスの直轄植民地であった。

19 世紀の終わりにかけて、イギリス人植民者がこの地域を所有しはじめていた。マタベレ地方にある金鉱を採掘したイギリス南アフリカ会社の後を追ってやってきたのである。

南アフリカと同じように非白人の権利はすぐに法の力によって厳しく制限された。差別の根拠は 1937 年の“土地指定法”であった。この法律によってアフリカ人は保護区を割り当てられた。

1950 年代に多くのアフリカ諸国で起こった独立運動の潮流の圧力の下に、政府は国内の政治的不安定の機先を制するために、人種差別政策をあるていど緩めざるを得なかった。

たとえば 1962 年以降、アフリカ人は白人と共に公共の水泳場を使うことが許された。

60 年代半ばに英国の側にも、植民地の独立を許す動きがあらわれた。しかし独立は、非白人多数の支配と差別の廃止の可能性を条件とした。

当時権力の座にあった“ローデシア戦線”はしかし、これらの条件に同意せず、1965 年 11 月 11 日“一方的独立宣言”をした。それは当面の少数者支配の現状を確保するものであった。

国際連合総会は圧倒的多数でこの行動を非難した。1966 年には国連安全保障理事会はローデシアに貿易制裁を科した。しかし多くの国々、なかんずく南アフリカはこの決議に従わず、制裁は効果を上げなかった。

1970 年の憲法、これは共和国が人種差別を悪化させたと非難されたが、アフリカ人によって占められる議席の数が制限され、非白人の議席は 65 のうちたった 8 つになった。

人種差別のスポーツへの影響は間接的なものであった。人種の混じったクラブやスポーツのチームは許されていた。その結果、隣国の南アフリカと違ってローデシア人は人種の混じったオリンピック予選に参加することができた。

IAAF 調査委員会は、1971 年に、ローデシアは南アフリカと違ってスポーツにおける人種差別はないと報告した。それにもかかわらず、フットボールとネットボールを除いてす

すべてのスポーツは、はっきり白人たちの手の内にあった。国はほとんど排他的に白人たちのスポーツの機会を支援した。

学校スポーツでは人種差別の原則があらわであった。子供たちをスポーツへ導く学校の役割は非白人にとっては限られたものであった。

厳しい学校政策は、非白人の子供たちが3年以上の教育を受けることを極めて稀にしていた。そのためスポーツにおける平等の機会について語ることは、不可能であった。

メキシコシティのオリンピック大会に参加したチームのなかで14人の白人に対して非白人はわずかに2人であった。人口比率では非白人が96%であったが、チームの中では白人がほとんど90%（87.5）であった。

1967年11月、メキシコの組織委員会はローデシアNOCを大会に招いたが、結局彼らは競技することができなかった。

1968年5月、国連安全保障理事会はすべての国連加盟国は、ローデシアのパスポートを持つ者の入国を拒否すべしと決定した。そのためメキシコ組織委員会はIOCに対して、こうした情勢ではローデシアの参加は不可能であると通告した。

ブランデーは怒って、すでに他のことで非常に困難な問題が起こっているのだと指摘した。彼はローデシア問題が起きることによって、南アフリカの紛争がさらに燃え上がることを望まなかったのである。彼の意見ではローデシア問題は純粋に政治的事件であった。

IOCとアフリカ諸国は、南アフリカに気をとられていたのでローデシア問題は些細なものにしか映らなかった。

しかしメキシコ組織委員会には、ローデシアの参加はオリンピックをさらに危険に陥れると感じられたので、国連決議を盾に取った。巧妙な遅延戦術を採用して、組織委員会はオリンピックIDカードの発行を延期し、大きな騒ぎを引き起こすことなくローデシアを大会から締め出した。

その時ブランデーには、ローデシアは自発的に入国を控えているのだと通知された。

メキシコ組織委員会にとっても、IOCにとっても、この事件を公にすることは利益にならなかった。双方とも、アパルトヘイト問題にさらなる躰きの石を置きたくはなかったのである。メキシコシティでのIOC総会では、ローデシアは問題にならなかった。

ローデシアは、1969年のドゥブロヴニクにおけるIOC理事会とNOC代表団の会議で、初めて、南アフリカ問題と一緒に論じられた。

そこでエジプトNOCの代表が、南アフリカとローデシアの代表団の追放を要求した。

ブランデーはこの両国を並列に扱うことに当惑した、彼はこの二つは基本的に別の問題であると考えていたのである。

ドゥブロヴニクの総会の二日前に、アフリカ諸国のNOCはローデシアNOC代表団の国籍を調査する決議を行っていた。そしてローデシアにおいてオリンピック憲章が守られて

いるかどうかを調べる調査委員会の結成を決議していた。その要求は次のように書かれていた：

“—IOC による第7 項の解釈が次のように規定しているのを考慮して：

‘以下のような地域におけるオリンピック委員会の承認：

1) は、政治的な承認を意味しない、なぜならこれは国際オリンピック委員会の権限外のことだからである；

2) は、その地域が安定した政府を適当な期間持っていることによる。’

—国際的にその国によって発行されたパスポートとビザが無効であるために、ローデシアが世界の他の国々と国際スポーツ関係を維持することが不可能であることを考慮して；
—ローデシアではスポーツにおける人種差別が確立されていることを考慮して。”

南アフリカ問題を改めて念頭に置いて、今回は国際法に基づく正当化があるので、アフリカの人たちはローデシアを追放するより大きなチャンスがあると考えた。これまでは、ローデシアに関しては南アフリカと違って人種の混じった予選競技会を開いているので、人種差別の証拠を集めるのが難しかったのである。

しかしアフリカ人たちにとっては、ローデシア政府の人種政策こそが問題だった。

1970 年5 月のアムステルダムにおける IOC 総会で、ローデシア問題が議題に上った。

しかし、エクゼターから IOC はスポーツにおける差別にのみ関心があるのだ、という意見が出されると議論はすぐ終わってしまった。

アフリカの NOC の代表たちが驚いたことに、次の日、彼らはローデシア問題は解決されたと新聞で読むことになった。ジャーナリストたちが、議論がすぐ打ち切られたことを誤って解釈したのである。問題は単に次回に先送りされたのであった。

次の年、この問題はルクセンブルグの IOC 総会で再び議論された。

会長は状況を要約し、35 カ国の NOC から IOC に宛て、ローデシアにおけるスポーツの状況を調査してほしいと要求する手紙を受け取っている、と委員たちに報告した。

彼の知るところではローデシアの NOC はオリンピックの規則に適合している。

国籍の問題については、ローデシアの選手はオリンピック ID カードもしくはイギリスのパスポートで旅行できると指摘した。

アフリカ人委員の、ローデシアは国際法で承認されていないという異議申し立てに対しては、ブランデーは、国内オリンピック委員会がオリンピック規則に従っている限り、IOC はその政府には関心がないと述べることによって反論した。

アフリカのスポーツの代表たちとの何回かの議論の末、ブランデーは、ローデシアが1964年の東京と同じの旗と国歌の下にミュンヘン大会に参加を許されるということで、彼らをなんとか説得することができた。

アフリカ人とソビエトのIOC委員、アンドリアノフによって要求された調査委員会は大会の後まで仕事を行わないことになった。以下の決定がなされた：

“ローデシアの選手は、東京大会に参加したときと同じ旗と国歌の下に、ミュンヘンで競技することができる。この問題はミュンヘン大会の後に再考される。”

アフリカ人たちは、ローデシアがミュンヘンのスタジアムで植民地主義のシンボルの下に行進することを拒否するであろう、と期待した。

しかし彼らは間違っていた。最初、ソウルズベリーの政府はこの決定を受け入れがたいとするように見えた。しかしローデシアの最初の拒絶は、アフリカ人たちを安心させようとする戦術的な動きであったのであろう。ほとんどすべての世界から孤立しているローデシア人たちは、国際舞台に現れるこの機会を見逃そうとはしなかった。

1972年8月、大会開会の直前にローデシアNOC会長、プラスキッドは、彼のチームは必要ならロシア国旗あるいはボーイスカウトの旗の下にでも行進すると宣言した。何故なら、そうしても、彼らはローデシア人であり、誰でもそれを知っているのだから。

アフリカの国々は、彼らが見間違いをしていたことに気が付いた。

ドイツ人主催者たちは、最初のボイコットの脅しが聞こえてくるに及んで、水平線上に黒雲が湧き上がってくるのを感じた。

ドイツNOC会長、ウイリー・ダウメは、初めにブランデーとローデシアNOC会長と電話で話し、そのあとアフリカスポーツ最高評議会の代表、ガンガとカソンカと長時間議論した末、以下のような結論に至った：

“アフリカスポーツ最高評議会の代表はミュンヘンにおいて組織委員会から以下の保証を得た：

1. 南ローデシアは第20回オリンピックアードにイギリス植民地時代の条件、すなわち1964年の東京大会と同じ条件、の下に参加することに同意した。
2. 南ローデシアは1964年と同じ旗の下に競技する。すなわちユニオンジャックとロイヤルブルーの地の上に南ローデシアの盾の紋章を付けたものである。
3. イギリスの国歌‘ゴッドセイヴザクイーン’が演奏される。
4. IDカードは国籍の欄に‘イギリス臣民’と記入される。
5. ブランデー会長は電話でダウメ会長に、国籍の確認は公式記録を参照し、IOCまたは国際競技連盟または組織委員会によって行はれる、と確認した。

ブランデー会長はIOCを代表し、ダウメ会長は組織委員会を代表して、これら5つの点に同意し受け入れた。アフリカスポーツ最高評議会の代表はこの議論の結論に満足の意を表明する。”

最初の4つの条件はIOCのアムステルダム決議と同じである、しかし第5の点は、新しいものであった。公式には、南アフリカの選手がローデシア選手として競技することを防ぐためであったがしかし、実際には、ローデシア人にとって耐え難い障害となることを期待したものであった。

アフリカでは、SCSA代表は非難と抗議で迎えられた。そこでは、イギリスが好意的に、ローデシアチームにイギリスパスポートを発行するであろうと広く信じられていたのである。

アフリカの国々のローデシア参加反対をボイコットによって示そうとする決意は次第に確固としたものになり、8月半ばまでにおよそ10か国が、大会ボイコットの意志をはっきりと声明していた。

何日か続いたミュンヘンでの理事会で、ローデシア問題は長時間議論された。

1月18日、会議第1日目の討論開始にあたってブランデーは状況について報告し、理事会がNOCと共に、アフリカの国々の政府のスポーツに対する政治的影響力の蒸し返しを非難する決議をするよう勧告した。

彼は、ボイコットを示唆するNOCはオリンピックムーブメントに対する脅威であるとして、それらのNOCに対するいかなる譲歩の可能性も拒否した。そうではなくて、アフリカのNOCは、それぞれの政府が大会ボイコットの考えを捨てるよう説得を試みるべきであると考えていたのである。

ブランデーは現在のところ14あるいは15の国が、もしローデシアが参加すれば参加をやめると脅しをかけていると発表した。ブランデーは、スポーツにおける政治の干渉を排除するために、IOCはそれらの国のNOCを支える義務があるという意見であった。

次の日、理事会がこの議論を続けるために集まった時には、ムードはすでにあまり楽天的ではなくなっていた。アデモラは、アフリカ統一機構の事務総長が、すべてのアフリカの国に対しミュンヘン大会ボイコットを呼びかけたと報告した。

アフリカの代表とダウメが交渉した解決策がひとたび公になると（上記参照）、3日目の議論はローデシア人がイギリス市民であるかどうか、という問題に集中した。

ブランデーはダウメによって交渉された解決案に電話で同意していたが、第5の点、国籍の確認を実際にどうやって行うべきかについては、何の考えも持っていなかった。

理事会は、イギリス市民権の問題をエクゼター侯爵が詳細を明かにすることと、次の日、ローデシアチームの団長とワイリー・ダウメを、ローデシア人の ID カードについて調べるために呼ぶことを決めた。

エクゼターの調査に基づいて、8月21日、イギリス政府は依然としてローデシアを植民地であるとみなしており、それ故にローデシア人は‘イギリス臣民’であることが確かめられた。このことは、ローデシア代表、プラスキットによって、ローデシア選手は“ローデシア市民”であるが“イギリス臣民”であると確認された。

この議論の後、ワイリー・ダウメは審問を受けた。彼はアフリカスポーツ最高評議会の事務総長、ガンガとの交渉について短い報告をし、アフリカチームの参加に関しては彼自身の極めて悲観的な見方を述べた。

彼は、もしローデシアが参加すれば、全てのアフリカの NOC、多くのアフリカ系アメリカ人選手、いくつかの南アメリカチーム、インド、パキスタンが大会参加を拒否するだろうと確信していた。

ドイツ連邦の NOC 会長の後、アフリカ NOC の代表が意見を述べた。彼はアムステルダム協定に言及し、国籍の問題に固執した。ジャンクロード・ガンガは、誰も力によって人に国籍を押し付けることはできないという意見を述べた。

ローデシア人はオリンピックの旗の下にたたかうという妥協案は、アフリカスポーツ最高評議会議長、アブラハム・オーディアによって、規則違反であるという理由で拒否された。

理事会は朝の会議の終わりに、ついに、IOC 総会でアフリカ人の主張を取り上げ問題を議論すると決定した。

議論は午後も続いた。その間、IOC に対する政治的圧力は非常に大きくなっていった。

その時、OAU（アフリカ統一機構）の当時の総会議長、モロッコのキングハッサン二世が、この人は一般的に穏健な政治的立場で知られていたが、以下のテレックスを打ってきた：

“大会開会の数日前に、良きスポーツマンシップをもってオリンピック大会に参加しようとしているアフリカ 41 カ国の願いにもかかわらず、残念ながらわれわれは、不法なローデシア政権に関する OAU の度重なる非難にもかかわらず、この大会にローデシアを参加させようとする IOC の決定が変えられないならば、ミュンヘンの祭典から撤退すると言うアフリカの国々の立場を伝えなければならないと感じます。

アフリカがそのような立場をとらねばならないことを遺憾に思いつつも、IOC がオリンピック大会の普遍性に対して負っている責任に、あなた方の注意を喚起するばかりです。すべてのアフリカ諸国が撤退した場合のことをお考えください。さらに、OAU はすでにいくつかの非アフリカ諸国からの確約を受け取っているのですが、われわれがミュンヘンに参加しないならば、それらの国々は我が大陸に連帯するということです。”

アフリカの脅しは明白であった。ウイリー・ダウメはまた、東側ブロックの国々もアフリカとの連帯を示すため、チームを引き上げようとしていると聞いていた。

さらに、国連安保理事会はローデシアの参加を議論し、ダウメにテレックスを送って国連決議に注意を喚起していた。

ドイツ連邦政府もこれらの決定について念を押されていたが、ウイリー・ブランツ首相は、オリンピック期間中はオリンピックの法が国際法に優先すると保証していた。

再び、IOC は強い政治的圧力の下にあることを感じないわけにはいかなかった。

ブランデーは譲歩し、次のような解決策を提示した：ローデシア NOC は合意の全ての点に従ったと報告されねばならない。そして総会での投票の際、IOC はそれを支持する。

ブランデーの目には、状況は非常に悪く、オリンピックムーブメントそのものの将来がかかっていると見えた。

最後の頼みの綱として、彼はローデシアが自分たちの参加意志を思いとどまってくれることに期待をかけていた。ブランデーがローデシアの代表に自発的撤退を勧めるために会うことが決定された。

次の日、ローデシアの代表は再び発言の機会を与えられ、理事会の審議について告げられた。ローデシア人たちは、もし IOC が政治的圧力に屈するならばまことに残念なことに思うと言った。

大会からの自発的な引き上げという、IOC と組織委員会にとって大きな救いとなる申し出は得られなかった。IOC 総会が決定をしなければならないということになるだろう。

ミュンヘンに IOC 委員たちが集まる前、ブランデーは大会からの引き上げの脅しは政府から来ているものであり、これはスポーツへの政治の介入であると宣言していた。

彼は、そのような場合、当該 NOC は政治の影響下にあるという理由で承認を取り消されるかもしれないと警告していた。

その間に、21 の NOC がドイツ連邦の NOC 会長に接触し、もしローデシアチームが競技するなら大会をボイコットすると警告してきていた。

エクゼター侯爵は問題解決には二つの道しかないと考えた：ローデシアが参加し、アフリカ諸国がボイコットする。これは参加国数の 24%にあたるが、みな比較的小さなチームである；或いは IOC が政治的圧力に屈する。しかしそうすれば、オリンピックムーブメントの失墜を意味するだろう。

これに続く議論のなかで、アフリカの代表とローデシアの代表が発言を許されたが、問題の中心は国籍であった。アフリカ人がオリンピック ID カードは国籍を証明するのに充

分ではないと主張したのに対し、一方の側は、このカードは主催国に入るために必要とされる唯一の書類だと述べ立てた。

IOC 会長が意見を述べた。IOC はこの書類の承認をうるために 25 年にわたって闘ってきた。その闘いの後に、今、それを尊重することをやめることはできない。

委員が投票にすすむ前に、彼は再び議論の状況を次のようにまとめた：

“…すべての国籍問題が解決されたとしても、ローデシアが参加すればアフリカ人たちは引き上げるであろう。総会はローデシアを支持するか、アフリカを支持するか決めなければならない。しかし前者支持を決めれば、ミュンヘン大会は多分駄目になるだろう。もし後者の解決策（アフリカの NOCs）を受け入れれば、政治的脅しに屈したと非難されるだろう。もし総会がローデシアを支持するならば […] ローデシア人たちはスポーツマンらしい態度で自発的に参加を取り消すであろう。そして全ての人の面目が立つであろう。”

投票の結果は接近したものであった。ローデシア参加賛成が 31 票、しかし反対が 34 票あった。3 人の IOC 委員が棄権した。

ブランデーにとってはこれは大きな打撃であった。彼は“心臓を一撃された”。

彼は、イスラエルチームに加えられた血塗られたテロ攻撃の犠牲者のための追悼スピーチで、ローデシア事件の政治的脅しをテロリストによる脅迫と同列に置くことまでした。

この比較は余りに誇張されたものと云えるのは確かだが、この IOC 総会の決定のあとの IOC 会長の気持ちをおのずから告げるものではある。

“この 20 年間で初めて、IOC は私の勧告に従わなかった”と数週間後に、彼はローデシアのスミス首相に書いている。彼は、IOC 委員たちの側からの信頼の欠如を、会長職を辞すべきサインとみた。

偉大な理想主義者の時代は終わろうとしていた。

彼のスポーツに対する政治の干渉との戦いが、これ以上にはっきりと敗北を示す機会はなかったであろう。しかし、彼はおそらく勝利者と看做されるのであろう。

なぜなら、彼は成功したのであるから

“国際社会に対して、大衆世論を操作する者たちの無原則な影響力に対抗して、原則に根を下ろした政治的、道徳的行動に基づいた態度の一貫性を示し、この広告が支配する世界の中では極めてまれな、稀ではあるが有益で、希望に満ちたひとつの思想の自己主張を示すことに。”⁴

⁴出典: Schelsky, H. (1973) Friede auf Zeit. Die Zukunft der Olympischen Spiele. Osnabrück: Verlag A. Fromm, p.79.

彼は政治的現実に対するアプローチにおける近視眼的態度を非難された。

しかし、彼の道徳的立場の一貫性は、彼と意見を異にする者の間にも、尊敬の念を引き起こさずにはおかないのである。

2.3.3. 独立の動き

2.3.3.1. 非同盟諸国

第2次世界大戦後のヨーロッパ植民地帝国の崩壊と、東西二大勢力の対立のなかから新しい政治現象、非同盟主義が出現した。大戦のあと多くの植民地が武力闘争あるいは交渉によって独立を獲得した。

これらの若い国々は、新しく獲得した自由を誇りにしていたが、すぐに東と西のブロックからいわば言い寄られていることに気が付いた。その二つのブロックが国内問題に介入しようとする企ては、彼らの独立性を脅かすことになった。

植民地支配のくびきから解放されて、彼らは独立性を追求することに熱心であり、二大パワーブロックの後見から自由な、自分たちの自発的な外交政策を追求しようとした。

この“代案としての非同盟”の指導力はインドのジャワハルラル・ネルーであった。

インドは世界の政治舞台で、その国土と人口にふさわしい役割を演じたいと欲していた。

他の独立した国々と共に“積極的な中立主義”政策によって第三勢力を形作ろうと願っていた。それは二つのブロックの間の緊張を和らげるはずであった。

ヨーロッパにおいて、ネルーは彼の中立政策の支持者をユーゴスラビアの指導者、チトー元帥に見出した。チトーはソビエト連邦の覇権の野望に抵抗しようとしていた。

非同盟運動のもう一人の指導者は、エジプトのガマル・アブデル・ナセル大統領であった。彼の立場は平和主義者のネルーとは異なっていた。エジプトの大佐は、もし必要なら近東アフリカおよび北アフリカの独立を守るためには、喜んで武力を使うつもりであった。

その地域で、彼はフランスとイギリスの植民地支配の最後の残りかすに対する闘争で、指導的役割を果たさなければならなかったのである。

スエズ危機で、彼は軍事的には敗者であったが、西欧勢力が国際的圧力の下に運河を手放さなければならなくなった時に、大きな政治的成功をかちとった。

汎アラブ主義を奉ずるナセルにとって、イスラエルは肌に刺さったトゲであった。

1948年イギリス軍がパレスチナを去った後、ベン・グリオンによって独立を宣言されたイスラエル国家は、それ以来厳しい紛争のもとであった。

大戦のあとサハラ以南のアフリカでは、非植民地化は、最初はゆっくりと進んだ。

1957年、ガーナが独立を勝ち取った最初のブラックアフリカの国となった。

三年の後、一ダース以上のブラックアフリカの国々が政治的自治を獲得した。

1955 年、アフリカーアジア連帯の動きが独立運動に新しい力を与えた。

ネルーは、アフリカとアジアの独立した国々をインドネシアのバンドンの会議に招いた。

この会議のホストはインドネシアのスカルノ大統領であった。

6 つのアフリカの国と 23 のアジアの国がこの会議への招待を受け入れた。

この会議は、これらの国々の間の平和共存政策の基礎を置き、非植民地化の促進を呼びかけた。

一年の後、ネルー、ナセル、チトーはユーゴスラビアで会い、非同盟の共同宣言を出した。1961 年のベオグラードでの第一回非同盟会議の後、これらの国々は国際政治の中で東西世界と並ぶ第三の勢力として行動できる“第三世界”を形成することができるかに見えた。南アメリカからのオブザーバーの存在は、非同盟グループへのアメリカ大陸からの最初の参加を印すものであった。

しかし非同盟そのものは、発展政策の困難を解決する道具としては十分でないことがすぐに明らかになった。イデオロギーや国益がグループの連帯を腐食し、“第三世界”内部の緊張を高めた。この傾向は、1964 年にカイロで開かれた第二回非同盟諸国会議ですでに明らかであった。

2.3.3.2. 地域大会

この新しい政治的バランスオブパワーは、国際スポーツとオリンピックムーブメントに衝撃を与えずにはおかなかった。新興諸国は国際スポーツ競技会に参加することに熱心であった。

これらの競技会のうち、最も地位の高いのはもちろんオリンピック大会であった。オリンピックは、競技する国々のイメージを世界に高める素晴らしい機会を提供した。

IOC による承認は若い国の自信を高めた、これに勝るものは国際連合による承認だけであった。

しかしこれらの新興国は経済や社会的な問題を抱えており、スポーツの分野での発展は、先進工業国のそれに大きく後れをとっていた。こうした環境の下で、彼らがオリンピック大会に参加できる可能性はごく限られていた。ましてや、この世界最大のスポーツと文化のイベントを開催することなど、全く考えられないことであった。

しかし地域大会は、クーベルタンはこれをオリimpiズムの“幼稚園”と呼んでいたが、これらの若い国々に、参加と開催の両方の経験を得る機会を提供した。

IOC の後援の下に行われた最初の地域大会は、1921 年、上海における第 5 回極東大会であった。1 年後、リオデジャネイロでのラテンアメリカ大会が続いた。

最初のアフリカ大会は、1926 年にアルジェーで開催が予定されていた。しかしそれは実現しなかった。第 2 回は、1927 年、アレキサンドリアを会場として計画された。しかし 2 年後の 1929 年に延期された。この計画も最後の瞬間に挫折した。“イギリスの政治的な行動、それにはフランスも同調した” 結果であった。

最初に計画された日から 40 年後、オールアフリカ大会の夢はついに実現した。

1965 年に、“第 1 回アフリカ大会” は IOC の後援の下にブラザビルで開催された。

27 のアフリカの国のチームが参加した、この大会のモットーは：

“自由なアフリカのためのアフリカ大会、アフリカ大会のための自由なアフリカ、大会のための、そして自由なアフリカのための団結”。

この大会に参加したアヴェベリー・ブランデーはこのモットーを取り上げ、コンゴ大統領、マセンバ・デバに、アフリカの団結のために、他のどこでよりも多くのことがスポーツの競技場で達成されるであろうと言った。

ブランデーはこの大会の組織と彼らのオリンピック精神に感銘を受けた。彼は特に、スポーツがコンゴの二つの地域の敵対する兄弟を一つにしたのを見て喜んだ。

その当時のレオポルドビル（今のキンシャサ）はブラザビルと厳しい緊張関係にあったが、河を越えてブラザビルへ選手団を送ったのであった。

第 2 回目のアフリカ大会は、1969 年にバマコで開催が予定されていた。

しかし新しいマリ共和国の政府は、経済的理由で大会開催から手を引かざるをえなかった。直前の通知だったので、代わりの会場を見つけるのは不可能であった。

第 3 回アフリカ大会は 1972 年ラゴスで開催されるはずであったがここでも問題があった。少し遅れて、1973 年、ナイジェリアの首都で、アフリカ人たちはついに彼らの第 2 回大会を祝った。

しかし、この種の大会のすべてが IOC の全面的な賛同を得ていたわけではなかった。

アヴェベリー・ブランデーの会長の任期の最初の頃に、IOC はすでに地域大会に伴う政治的問題に直面していた。

これらの大会は非常に増えてきて、IOC はこの動きを何らかの規律ある方向に導かなければならないと感じていた。その結果、ブランデーが会長になる 1 年前、1951 年のウィーンでの総会で、IOC は“地域大会の規則を研究する委員会”を作った。

1 年前、理事会は地域大会の開催を援助する委員会を作っていた。

1952 年、ヘルシンキの総会でこの委員会は地域大会の規則の草案を提出した。

そうした大会の主催者は、“国際オリンピック委員会の後援を得るため、そしてオリンピックの旗を掲揚する許しを得るために”これらの規則に従わなければならない。

提案された規則の目的は、これらの大会がオリンピック精神を維持し強めるとともに、その大会が時期や式典の点でオリンピック大会と同じものと見なされたり、間違えられたりしないようにするためであった。

この提案の議論の間に、フランスの IOC 委員、ピエトリは、どんなに注意しても、そうした大会の急速な拡大は、もし IOC があまりにコントロールを強めようとすれば、紛争の種とならずにはおかぬであろう、と指摘した。

ブランデーもまたその危険を感じていたが、IOC に出来ることは限られていて影響力に限界があるにしても、彼の意見では、オリンピックエンブレムを守ることこそその役割であった。彼にとって IOC の目的はオリンピックムーブメントの利益を護ることであった。

IOC はこのテキストを理事会に回し、理事会はひとつの条文を追加し、当該地域の IOC 委員と国際競技連盟の代表に、主催者によって認められる委員会を作る可能性を与える最終案を用意することになった。

焰の使用は、ラテンアメリカ大会に関連して大いに問題になっていたが禁じられた。

ブランデーが IOC 会長になって最初に深刻な問題となったのは地中海大会であった。

地中海に国境を接する全ての国を集めたこの大会のアイデアは 1948 年、最初エジプトの IOC 委員、モハメッド・タヘル・パシャによって出された。

第一回大会は 1951 年、アレキサンドリアで開催された。ここでは第一回アフリカ大会が開催される筈であった。第一回大会はイスラエルの参加なしで開催された。イスラエルの海岸は 100 キロ以上も地中海の波に洗われていたのだが。

イスラエル NOC は 1950 年の IOC 総会でメンバーとしての承認を要請したが決定は延期された。IOC はこうして、イスラエルとの戦時体制にあったアラブの主催者にイスラエル選手を招かない理想的な口実を与えた。

第二回地中海大会は 1955 年、バルセロナで開かれた。

主催者はアラブ世界からの圧力でイスラエル招待を取り下げた。イスラエル NOC はこの間に、1952 年、IOC の承認を得ており、四年前にエジプトが利用した口実はもはや有効ではなかった。それにもかかわらず、スペインの主催者は口実に困らなかった。イスラエルは大会設立者の仲間に入っていなかったので参加資格はないという議論をしたのである。

イスラエルは何回も IOC に抗議し、1955 年のパリでの IOC 総会でこの問題は取り上げられた。ブランデーは、単に状況を説明しただけで、理事会が地中海大会の内部問題には介入しないと決めたと報告しただけだった。

第三回地中海大会（1959年）はベイルートに割り当てられていた。

ブランデーは、中東の政治情勢からイスラエルの招待は不可能との意見であった。

彼は“何故人は歓迎されないところに行きたがる”のか理解できなかった。

しかし、IAAF 会長、エクゼター侯爵は、もしイスラエルが参加しないなら IAAF は陸上競技を公認しないといって、主催者の手を縛ろうとした。

ところが、レバノン人はうまい抜け道を見つけた。彼らは陸上競技連盟と地中海大会では陸上競技はやらないことで合意した。そして同時に陸上競技だけのいわゆる“レバノン大会”を開催した。これには勿論、イスラエルは招待されなかった。

2.3.3.2.1. ガネフォ大会

1962年、イスラエル問題は一時的に舞台を替えた。

この年の夏、第四回アジア大会がインドネシアで開かれた。ここでもイスラエルは除外された。スカルノ政府は、中華人民共和国及びアラブ連盟との関係をそこなわないために、台湾とイスラエルのチームに入国ビザを発行しなかったのである。

インドネシアは1945年8月17日、独立を宣言した。旧植民者、オランダに対する闘争は1949年まで続いたが。

独立宣言のすぐ後、インドネシアはNOCを設立し、1952年、IOCに公式に承認された。

スカルノはスポーツを内政、外交の両面で政治的な道具として使い、インドネシア革命の上でスポーツは重要な役割を果たしていた。彼の意見では、スポーツマンはその命をインドネシアの名前、国、社会に捧げるべきであった。

外交政策では、彼は反西欧であったが、東側ブロックのリードに従うと共に、非同盟運動にも組みしていた。バンドン会議で、彼はネルー、ナセル、周恩来と並んで非同盟運動の指導者の一人として自らを印象付けた。

第四回アジア大会を主催してスカルノはこの地位を固めようとしたのである。⁵

“極東大会”を引き継いだアジア大会は、インドのIOC委員G.D.ソンドイの提唱によって、1951年、デリーで第一回が開かれた。

第四回アジア大会の時、彼は“アジア大会連合”の事務局長としてインドネシアに滞在していたが、危ういところでジャカルタの暴力事件を逃れた。

⁵ 原注: スカルノの独立への願望はアメリカとソ連に大会への財政援助を請う妨げにはならなかった。アメリカは断ったが、ソ連は5千万ルーブルのクレジット供与とスタジアム建設を助けた。

1963年2月、IOC会長はジャカルタでアジア大会の際に起きた事件について、理事会に報告した。彼は台湾とイスラエルの排除をスポーツへの政治的干渉として非難し、G.D.ソンドイ襲撃を遺憾に思うと述べた。

インドのIOC委員は、アジア大会理事会の長い会議でオリンピック規則を守るよう説得し、この大会をすべてのアジアの国々が招かれていないので“ジャカルタ大会”と呼んだ。

しかしそうすることで、このアジア大会の設立者はインドネシア政府の怒りを招いたのであった。

インドと、インドネシアのパトロンである中国との国境での衝突は、明らかにこの怒りを激しくした。貿易相はインドに対する経済制裁を声明し、ソンドイが泊まっているホテルは興奮した群衆によって石を投げ込まれた。

群衆は狙った犠牲者が逃れたのを知ると⁶、インド大使館に押しかけた。

極東でのソンドイの冒険について報告を受けた理事会は、5票対1票でインドネシアNOCの無期限資格停止を決めた。

ソビエト連邦のアンドリアノフはこの決定に反対した。彼はほかにも政治的干渉の似たような例はあったと言った。これはGDRの選手に対するビザ発行拒否をあてこすったものであった。

同じ年の6月、理事会と国際競技連盟の代表との会合でブランデーは、アジア大会で起こった出来事をスキャンダルであると言って、問題が再び取り上げられる前にインドネシアNOCがまず行動をとることを待っているのだと言った。しかしインドネシア人は、遺憾の意を示す代わりに攻勢に出た。彼らはIOCを脱退するという電報を打った。

それは“世界のスポーツをアメリカとヨーロッパの影響から救うために再組織する”という彼らの意図を公言するものであった。

スカルノは非同盟諸国を代表する政治的スポーツ組織を欲した。このアイデアを実現するために“新興勢力の大会”(GANEFO)の設立を提案した。

彼のスポーツと政治の関係についての意見は、ブランデーのそれと正反対であった。

彼にとって、スポーツは政治と分かちがたく結びついていた。

ブランデーはこの立場を、“オリンピックムーブメントの最も基本的で、重要な原則の一つの放棄”と見なしていた。

この組織の最初の会議が1963年4月に行われた時、インドネシアの招待は中華人民共和国、ソビエト連邦、ギネア、イラク、マリ、パキスタン、北ベトナムそしてカンボジアによって受け入れられた。セイロンとユーゴスラビアはオブザーバーを送った。

⁶ 原注:組織委員会は、心臓に問題を抱えたソンドイがニューデリーに余裕をもって逃れられるよう警告していた。

この運動の目的は、新興諸国のスポーツの発展とこれらの国々との友好関係をバンドン会議の精神とオリンピックの理想によって強めることにあった。

第一回ガネフォ大会は 1963 年 11 月開催された。

聖火、旗そして平和の鳩は、疑いもなくオリンピック大会への類似を示すものであった。

聖火の使用は、地域大会での聖火使用を禁じた IOC ヘルシンキ決議の明らかな違反であった。

この大会は比較的成功であった。48 の国が参加しその中にソ連がいた。ソビエトは IOC の制裁と、間近に迫ったオリンピック東京大会に彼らのトップ選手が参加できなくなるのを恐れて、自ら認めているように、二流の選手だけを送った。

しかし中国はオリンピックムーブメントに背を向けていたので、何も恐れるものはなかった。この大会をオリンピックのライバルイベントとして発展させることは、彼らの利益に叶うことであった。中国チームは国のベストの選手からなり、ほとんどのメダルを獲得した。中国の支配は、競技成績と同時に、財政の面でも明らかであった。⁷

いくつかの国際競技連盟は、そのうちの最大の二つは IAAF（陸上）と FINA（水泳）であったが、ガネフォ大会を認めていなかったため、この大会に参加した選手は所属競技連盟の規則を犯すことになり、東京大会への参加はできなくなった。

禁止規定に触れたのは大部分インドネシアと北朝鮮の選手であった。

1964 年 1 月、インスブルックでの第 62 回総会で IOC は、ガネフォ大会に関し、全会一致で以下の決議を採択した：

“国際オリンピック委員会は、ガネフォ大会から生じた問題について考慮した。この大会は国際オリンピック委員会の後援を受けていないので、実際の実施活動はこの大会を認可している国内オリンピック委員会を例外として、主として国際競技連盟の領域に属する。この点は実際に跡付けられている。しかし国際オリンピック委員会は、ガネフォ大会が自ら認めているように、その構想と目的において政治的なものであり、公然と国際競技連盟と国内競技連盟を無視しており、非会員国を招待していることに注目している。国際オリンピック委員会は、そのような目的と行動はオリンピックの理想に完全に反するものであり、アマチュアスポーツの基礎を脅かすものであることを宣言する。こうした状況下で当該国際競技連盟は確固とした行動をとられることを歓迎する”。

⁷ 原注：中国は大会に18百万ドルの援助と参加者全員の旅費を負担したとの報道があった。しかしIOC理事会でのエジプトのIOC委員でガネフォ副会長の証言では、自分の知る限り、参加国は旅費は自分で負担したとのことであった。

北朝鮮は該当する選手をチームから外すことを拒否してオリンピックに参加しないことを選んだのに対し、インドネシア NOC は東京大会参加を許されるよう要請した。アジアで最初に開催されるオリンピックの祭典に、傍観者として取り残されることを望まなかったのである。

1964 年 6 月 26 日にローザンヌで開かれた会議で、理事会はインドネシア NOC の要求に応じて、“他の全ての国と同じ基準で” 日本で競技できるよう NOC に対しては資格停止を解除した。

東京大会の直前、インドネシアのスポーツ大臣、マラディは、ブランデーと会話で、資格停止されている選手の参加を認めてくれるよう説得しようとしたが空しかった。ブランデーは大臣に IOC と国際競技連盟の規則に違反しないよう警告しただけであった。

奇妙に思わざるをえないのだが、IOC の厳しい批判、ガネフォ大会に対する非難にもかかわらず、エジプトの IOC 委員、A.E.タウニィはガネフォ組織委員会の副会長を務めていた。

IOC 事務総長、メイヤーによってその仕事をスパイであると言われ、フランスの IOC 委員マサールにアフリカ大会で IOC をひどく批判したと追及されたあと、タウニィは理事会で審問された。彼はガネフォ大会で副会長を引き受けたのは大会のオリンピック精神を守るためであったと弁解した。

理事会は彼に、ガネフォとアフリカの大会がオリンピックの精神に沿って発展していることを証明するために 2 年間の猶予を与えた。もし証明できなければ、彼はガネフォ大会の副会長か、IOC 委員のポストか、いずれかを選ばなければならない。

少なからず寛大な中国の支援のおかげで、ガネフォ大会はオリンピックムーブメントへの深刻な脅威となった。分裂の危機があったのである。

ブランデーは回想録の中で書いている“ガネフォ大会の危険な幕間狂言は、第 18 回オリンピックアードの大会にも影響を及ぼす危険があった。東京の、アジアで最初に世界最大のスポーツ大会を開催する権利が脅かされていたのである”。

第一回ガネフォ大会に続いて開かれた最初のガネフォ会議で連盟が設立され、スカルノが設立者、名誉会長となった。新しく設立されたガネフォ大会連盟は常設の本部をジャカルタに置いた。

カイロが次の大会の会場に選ばれ、中国が緊急の場合は代わりになることを申し出た。

結局エジプトは経済的理由で招待を取りやめた。イスラエルと依然として紛争が続き、ナセルの政府は武器購入の金を必要としたのであった。

1967年6月5日、アラブ諸国とイスラエルの緊張は頂点に達した。先制攻撃、いわゆる“6日間戦争”でイスラエル軍はスエズ運河まで進撃した。

第二回ガネフォ大会の予備の会場であった北京も、国内政治のために辞退せざるを得なくなった。1966年と1967年、いわゆる“プロレタリア文化大革命”が国を大混乱に陥れようとしていたのである。国際スポーツ大会などもはや思いもかけなかった。

インドネシアもまた、深刻な政治問題に揺すぶられていた。1965年のクーデター失敗の後、スカルノの力は次第に衰えていた。

同じ年“アジア地域ガネフォ委員会”が北京に設立され、次の年、最後となるガネフォ大会がプノンペンで開催された。カンボジアで競技した国の数は、わずか15に減っていた。

はっきりと政治的目的のために発足したガネフォ大会は、政治の犠牲となって潰えたのである。

2.3.3.3. ミュンヘンの悲劇

“楽しい大会”というのが、第20回オリンピックのミュンヘン大会のために主催者が選んだスローガンであった。しかしこの大会は、オリンピック大会史上最も恐ろしい悲劇の場となった。

イスラエル—パレスチナ

1947年にパレスチナをユダヤ地区とアラブ地区に分けようとするイギリスの計画は失敗した。1948年5月の創立の当初からイスラエル国家はアラブの国々と衝突した。

イスラエル地域から逃れた数多くのパレスチナ人は、周囲の国々に分けられた。しかし彼らを地元の人たちのなかに統合しようとする試みはなされなかった。彼らは難民キャンプに収容され、アラブの国々によってイスラエルに圧力をかけるために使われた。

パレスチナ難民は自らを組織化しはじめ、最初の民族会議を1964年に開いた。

その会議で彼らは軍隊を設立した。パレスチナ解放機構である。その目的はパレスチナの解放であった。しかし直接の軍事衝突では、彼らは明らかにイスラエルに劣っていた。

自分たちの苦境を世界の世論に訴えるため、彼らのうちの急進的なグループは国際テロの道を選んだ。ミュンヘンのオリンピック大会もそれから逃れられなかったのである。

9月5日の早朝、パレスチナ人テロリストはミュンヘンのオリンピック選手村の壁をよじ登り、イスラエルチームが本部を置いている建物に侵入した。

この時彼らは二人のイスラエルチームのメンバーを殺し、9人のイスラエル人を人質にとった。人質を取った者たちは、イスラエルに捕らわれている200人のパレスチナ人の解放と、彼らを選ぶ目的地へ彼らを運ぶための飛行機を要求した。

イスラエル政府は第一の条件を受け入れることを拒否した。

ドイツ政府による無制限の金と逃亡の準備の提案はテロリスト達によって拒否された。

エジプトの IOC 委員タウニーがウイリー・ダウメに呼ばれ、パレスチナ人との何回かの交渉に当たったが成功を収めることはできなかった。

彼はテロリストたちによって設定された最後通告の時間を引き延ばすことしかできなかった。人質を取った者とドイツ当局の交渉は夕方遅くまで続いた。

交渉でのすべて企てが失敗した後、犯人たちの要求を受け入れたふりがされた。

テロリストと人質はヘリコプターでヒュールステンフェルトブルックの軍用飛行場に運ばれた。そこでババリアの警察が力で人質を解放しようとした。

午後 10 時に IOC は特別総会を持った、ブランデーとタウニーとダウメが IOC 委員にそれまでの事態を報告した。

その 3 時間前、IOC 理事会は特別会議を持ち、理事会のメンバーは、ブランデーに対しドイツ当局の危機解決にあたるスタッフに干渉しないようにと忠告していた。これはドイツ政府と大会組織委員会だけの問題であるという理由からである。

夕方の IOC 総会の途中で、すべての人質の安全が確保され、テロリストは殺されるか逮捕されたという報告が飛び込んだ。

このニュースによって解き放たれた有頂天の雰囲気の中で、総会は翌日オリンピックスタジアムで短い追悼式をした後、すべての競技場で黙祷を捧げ大会は計画された通りに続けられると決定した。

次の朝、理事会は恐ろしいニュースを知った、彼らが IOC 総会の間に受け取った情報は誤りであった。解放の試みは失敗した。すべての人質、一人の警官、5 人のテロリストが死亡し、2 人の警官が重傷を負った。攻撃に加わった 3 人の犯人が逮捕された。

理事会とダウメの代行ウイリングの会合で、組織委員会の大会のスケジュールを 24 時間延期し追悼のための日を作るという提案を受け入れる、という決定がなされた。

次のような決議案が採択された：

“オリンピック大会はスポーツ、ただスポーツのために行われる。すべての公式レセプションはキャンセルされる。すべての儀式は出来る限り簡素に行われる。”

追悼式で IOC 会長は次のような演説をした。それは政治とスポーツについての彼の態度を表す遺言であったとみることができる：

“すべての文明人は平和なオリンピックのなかに野蛮なテロリストが侵入したことに恐怖を覚えている。われわれは、この凶暴な攻撃の犠牲者となったイスラエルの友人のために悼む。オリンピックの旗と世界中の旗は半旗となる。悲しいことに、この不完全な

世界では、オリンピック大会が大きくなり重要になればなるほど、それは商業主義の、政治の、そして今や犯罪の圧力にさらされることになる。第20回オリンピック大会は二つの野蛮な攻撃の的となった。我々はローデシア問題の戦いを、むき出しの政治的な攻撃の前に失った。我々の持つ力は、偉大な理想の力だけである。私は、一握りのテロリストがオリンピックムーブメントの中にあるこの国際的な協力と善意の核を破壊することができないと、世界の人々が同意すると確信している。

オリンピック大会は続けなければならない。そして我々は、それを穢れない、純粋な、偽りのないものとして保つ努力を続けなければならない。そして競技場のスポーツマンシップをほかの分野に広げようと努めなければならない。我々は今日を追悼の日と宣言する。そして、すべての競技を当初予定されていたよりも一日後に継続する”。

“大会は続けなければならない”という言葉は熱い議論を呼んだ。

イスラエル代表団は殺された同僚の11の棺と共に帰国した。

オランダ政府もまた、選手団の引き上げを考えたが、それを一人一人の選手の決断にゆだねた。

大会を続けるというIOCの決断はオリンピックの理念が生き残るために不可欠なものであった。このことによってのみ、その理念の力を明らかに示すことができた。

国際的な理解と平和のために、大会は続けなければならなかった。

2.4. IOCの構造と内部政治

2.4.1. IOC内の力関係の変化

地球規模の政治的、社会経済的変化はIOC内部の構造にも衝撃を与えずにはおかなかった。会長の一種の慣性を作り出そうとする保守主義と結びついた組織構造は自治を目標にしていた。しかし長期的に見れば、政治的力と社会の進歩の底流に抵抗することはできないのであった。

もしオリンピズムが普遍的なものであるという自らの主張に正当性を与えようとするならば、その組織の中にソ連のような大きな勢力を含まないわけにはいかない。

ロシアは1912年のストックホルム大会に参加した。しかし1917年10月の革命の後、ソヴィエトは国際スポーツには参加してこなかった。

第二次世界大戦の後、1948年、IAAFのメンバーでもないのに、彼らは突然ヨーロッパ陸上選手権に姿を表して注目された。

三年後、1951年4月23日、新しく設立されたソビエトNOCは承認を求める電報を打ってきた。数週間後、ウィーンでの総会は31票賛成、3棄権で申請を受け入れた。

同時に、エドストレーム会長の動議で、ソ連のコンスタンティン・アンドリアノフがIOC委員に任命された。

何人かの委員は、アンドリアノフがIOCの公式言語のどれも話せず、通訳に頼らなければならないという理由で任命に反対した。しかしこの反対はすぐに忘れられてしまった。

1952年のヘルシンキ大会参加がソ連のオリンピックムーブメントへの統合を完成した。

しかし同時に、その出現は西側世界、とくにアメリカにとって挑戦を意味した。

冷戦がオリンピック競技場に広がり、二つの敵対するシステムが優越を争う決闘の場となった。

1952年のオスロの総会で、アレクセイ・ロマノフという政務官僚がソビエトの第二のIOC委員として認められた。

ソビエトの委員はIOCの組織改革の試みを、最初は穏やかなものであったが、1955年パリから始めた。アンドリアノフが理事会の構成を変える提案を行ったのである。

彼の提案は将来、会長、二人の副会長、それに7人の他のメンバーの構成にすべし、というものであった。この提案は最初の部分だけが必要な過半数を得た。

理事会は副会長が二人になったけれども、メンバーの総数は7人にとどまった。

一年前すでに、スイスの委員、アルバート・メイヤーが業務多忙の理由で理事会のメンバーを増やすことを提案していた。

しかしアンドリアノフがメイヤーのアイデアを取り上げたのは明らかに他の理由からであった。彼は間違いなく共産主義者の代表を入れる余地を作りたかったのである。

ロード・バーリー（エクゼター）の席は普通なら空席になるところであったが、副会長に選ばれたのでそのまま理事会にとどまった。

ヒュー・ウェイアーの提案で理事会の席がひとつ増えたのは1956年で、共産主義ブロックの代表、ブルガリアのウラジミール・ストイチェフという人物が選ばれた。

アンドリアノフは1953年に理事会に立候補したが成功しなかった。

ウラジミール・ストイチェフは彼を“人民民主主義のグループに属する国が理事会に代表を出すべきである”という理由で指名したのであった。

アンドリアノフに対する投票は反対37、賛成5であった。

これはIOC内部にブロックを作ろうとする動きの最初のサインであった。

この現象は、IOCの独立を守ろうといつも心を砕いていたブランデーの目にとまらずにはおかなかった。1954年の回状に彼は書いている：“IOCの中にはいかなるブロックも、ナショナリズムもあってはならない”。

何ヶ月かあと、アテネでの IOC 委員の集まりで、委員たちは、自分たちは NOC と彼らの国への IOC からの大使であり、IOC への国の代表ではない、と述べてその独立を再確認した。

1959 年のミュンヘンでの IOC 総会の少し前、USSR の NOC は IOC の完全な組織改革の提案をした。彼らは、1957 年のエヴィアンと 1958 年の東京で行われた IOC 理事会と国際競技連盟と国内オリンピック委員会との会議で出された、二つの組織にもっと大きな発言権をとという要求を取り上げた。ソ連は IF と NOC の代表団と IOC との規則的な会合が足りないと考えていた。ソ連は IF と NOC の次第に大きくなる不満を抛りどころに、IOC の急激な組織替えを提案した。

新しい組織は次のメンバーから構成される：

—現在の IOC 委員

—承認されている NOC の会長

—承認されている国際競技連盟の会長

国際競技連盟と国内オリンピック委員会は必要な場合にはその代表を交代させる権利を持つ。ソ連の見解では、この構成にして 210 人から 215 人のメンバーになれば、IOC は真に代表的な機関になるのであった。

彼らの提案によれば、IOC は以下の部分から構成される。

—総会はオリンピック大会のときに 4 年に 1 度開かれ、そこで会長、副会長、理事会のメンバーを選ぶ。

—50 人から 55 人の理事会、これは IOC 会長、何人かの IF 会長と NOC 会長を含み、1 年に一回会合し決議を行う。

—理事会事務局は IOC 会長、副会長、事務総長からなり、組織の問題の計画作成に責任を持つ。

—IOC 事務局は、事務総長の指示の下に行政的な仕事を行う。

IOC の財政は次によって確保される。

—IF と NOC の会費。

—入場料の一部。

—出版その他の活動からの収入。

この提案ではメンバーの旅費はそれぞれの組織が負担し、国際競技連盟は入場料の分け前を受け取る。

これらの要求と、国連に関してフルシチョフがとった戦術との間には明らかな類似があった。その目的は権力を非共産主義国、共産主義国、非同盟諸国の間に分散する事であった。

これらの提案についての議論は、提案があまりに遅かったという理由で、次の総会に延期された。しかし実際には、2年後のアテネ迄投票は先送りされた。そこではこの提案は35対7で拒否された。

ブランデージにとっては、これらの提案は彼が全力を尽くして守ってきたIOCの独立に対する攻撃であった。アテネ総会の開会演説で彼は、この点を繰り返し強調した。彼はIOCの成功はまさにこの独立性に基づいていると考えていた：

“国際オリンピック委員会がこの巨大な世界的事業を、このような見事な成功をもって行うことができた一つの理由は、クーベルタン男爵によって憲章に書き込まれた独立の原則の故である。”

ソビエト案を採用すればOC内部の政治的役割を持つ集団の数は大幅に増えたであろう。

ブランデージはまた、スポーツの伝統を持たない小さな国が、偉大なスポーツ大国と同じ影響力を要求するようになるであろうと恐れた。

当時ブランデージは、1960年に拍手による賛成をもってIOC会長に再選されており、圧倒的な支持を求めることが可能であったので、分離主義的な傾向をもつ勢力を押し止めるのに困難を感じていなかった。

1962年のモスクワの総会で、ソビエトの委員、アンドリアノフとロマノフは自分の国であることの利点を利用して、IOCを再組織する更なる試みを発動した。

もしこの改正案が採用されれば、IOCは承認されているすべてのNOCから少なくとも一人の委員を含むよう最大の努力をしなければならないという規定を、その憲章に含むことになったであろう。国際競技連盟との協議を進めるうちに、彼らの代表もまたIOC委員に選ばれたいと願っていることが明らかになった。

国内オリンピック委員会および国際競技連盟との緊密な協力はまた、憲章に書き込まなければならなくなったであろう。そして承認されている国際競技連盟と国内オリンピック委員会の会長は、IOC委員でなくても彼らに関係ある問題については、投票権は無いにしても、IOC総会の議論に参加する権利を得ることになったであろう。

3年前の改革案と同じく、これもまたIOCの意思決定過程に沢山の国内オリンピック委員会と国際競技連盟が参加することを目的としたものであった。

違いと言えば、より用意周到で、あからさまでないことだけであった。今度は、より大きな、スポーツの盛んな国々に、二票目の投票権を与えるという譲歩もまた含まれていた。

しかしこの改革案もハッキリした過半数で葬られた。

さらにアンドリアノフとロマノフによって提出された、理事会の中に大陸の代表を入れる原則を確立する考えを含んだ規則改正の案は、出席委員の間のきわどい過半数で拒否された。16票が賛成。17票が反対であった。

しかしついに、ソビエト人はひとつの成功を収めることができた。アンドリアノフが任期の来たブルガリアの委員、ストイチェフに代わって理事会に選ばれたのである。4年後、彼はエクゼター侯爵の後を継いで第二副会長になった。

フランスの委員、ボーモン伯爵の提案で、総会で第三副会長が選ばれた。当選したのはブランデーの親友でメキシコの委員、ホセ・ド・J. クラーク・フロレスであった。

東京で再選されたフランスの委員、マサールは第一副会長の職に残った。

1970年のアムステルダムでのIOC総会で、ソ連の理事会は地域を代表する形にすべきだという要求は、以下の人々の選挙で非公式に叶えられることになった。

ソビエトのコンスタンティン・アンドリアノフ、スペインのホアン・アントニオ・サマランチ、ブラジルのシルヴィオ・ド・マガラーエス・パディハ、日本の竹田恒徳によってオセアニアを除く全ての大陸が理事会に代表を送ることになった。

ソビエトの、全てのNOCとIFをIOCの中に組み入れ、西欧の支配に強力な共産主義ブロックとそれに次ぐ非同盟諸国によって対抗しようという目論見は失敗した。

IOC委員、とくにその会長は、付随する危険、IOCが“スポーツの国連”になってしまっただけで行動の自由が制限される危険、を認識していたのである。

しかしそうしたIOC内部の構造の変化の要求とは別に、IFとNOCは自分たちでオリンピックに関する発言権の増大を求めている。

理事会は、国際競技連盟とは第一回目の1946年のローザンヌ以来、国内オリンピック委員会とは1952年のオスロでの会議以来、規則的に会合を重ねてきた。しかしコミュニケーションは限られていた。

あまりにもしばしば、IOCの交渉相手は何を言っても聞かれていないという印象をもった。ブランデーは“彼らに言わせておけ、そして忘れてしまおう”と言っているかのようであった。

NOCの発言を聞いてもらうために、イタリアNOCの会長、ジュリオ・オネスティは1963年、バーデンバーデンで理事会との年に一度の会議を呼びかけた。

同じ会議で、ブルガリアのストイチェフとルーマニアのデューマは、会議が短か過ぎる、IOCは全ての論点についてNOC、IFと相談すべきだ、と不満を述べた。

またアフガニスタンのファルーク・シラージはIOC委員をもたない国は、オリンピックムーブメントの政策について発言する機会がない、例えば、アジアの国からの委員は少なすぎる、と苦情をいった。

ブランデーはNOC代表の抗議に同情を示したが、その答弁はお座なりであった。

IOCに対して彼らの利益を守るための重みを増すために、ますます数の増えてきたアフリカの国内委員会（各大陸代表のグラフ参照）は初めて一致した行動をとった。これには西側に比べて明らかに委員の数の少ない東側の国が追随した。

しかしこの努力をリードしたのはジュリオ・オネスティ会長の下にあったイタリアオリンピック委員会であった。1965年秋彼は、共通の問題を議論し、出席した80のNOCの過半数で採択した決議案をIOCに提出できるように、全てのNOCをローマに招いた。

この決議の重要な点は、NOCの独立性をたかめること、政治的介入の問題、IFとの関係、NOCの財政、アマチュア問題であった。

この決議は、数日後のマドリッドでのNOCと理事会との会議、それに続くIOC総会で論じられた。ブランデーは独立性と政治的介入の拒否の要求についてIOCは全面的に支持すると述べた。

財政問題についても、彼は基本的にNOCに同意した。NOCはテレビ放送権料を三者の間で分割することを要求していた。IOCと大会の組織委員会、この二つの組織はこの金を例えば国際競技連盟支援に使うよう求められるだろう、そして金の必要なNOC、NOCの取り分は四分の一であった。

しかしブランデーは、アマチュア問題の責任をIFに移管するという決議案の部分については建設的でないとして拒否した。

長期的に見れば、IOCはNOCのますます高まる発言力強化の圧力に抵抗できなかった。

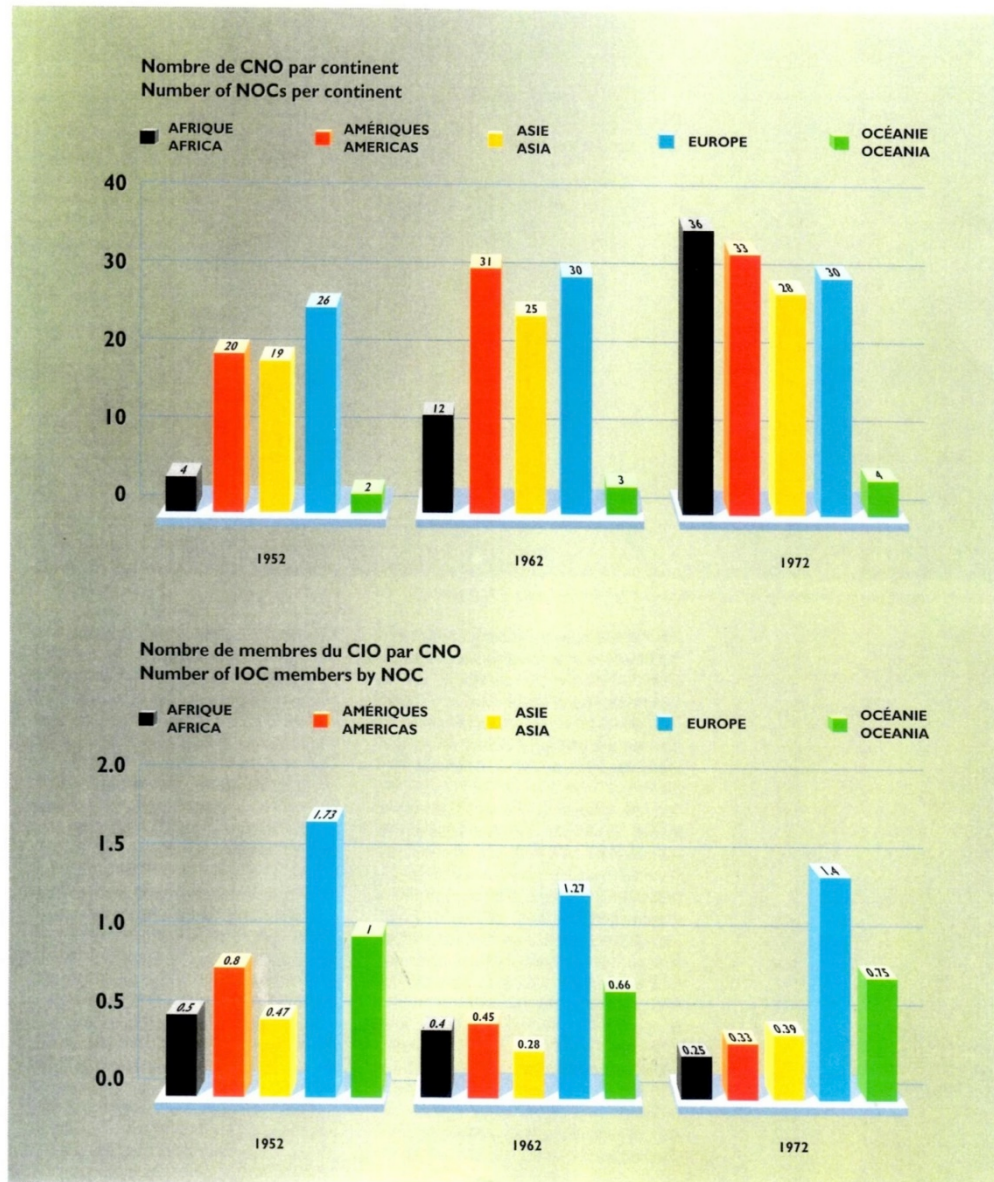
NOCによるライバル組織の設立を避けるためには、IOCは彼らの要求を半ば吞まざるを得なかった。そのためIOC理事会は東京で、イタリアNOCがローマに集めたNOCの提案を受け入れた。

“調整と研究委員会”がつくられ、メキシコでのNOCの次の会議まで存続することになった。議長はオネスティ、メンバーはウェイアー、ガンガ、竹田、ダンカン、ジェマイエル、コレンティン、ド・クラーク・フローレス、ウイルソン、ウェイマン、アンドリアノフとなった。

オリンピックムーブメントにおける各大陸代表の状況

ASPECTS OF CONTINENTAL REPRESENTATION WITHIN THE OLYMPIC MOVEMENT

PERIOD 1952 - 1972



1966 年、IOC はその行政機関の中に NOC との関係を保つ特別な部門を作った。

6 人の IOC 委員の小委員会が NOC との関係改善のために働いた。

さらに、IOC 委員を持たない国の国内オリンピック委員会によって選ばれる諮問委員会がつくられた。しかしいくつかの NOC はそのような委員会に反対した。彼らは IOC と直接交渉することを望んだのである。こうした態度をとったのは主として西側の NOC であった。ブランデーが NOC の組織化に反対する議論を歓迎していたこともあった。

1966年12月5日のアンドリアノフに当てた手紙に彼はこう書いている：

“理事会がNOCの組織というアイデアに反対の態度をとっている唯一の理由は、NOCの大半がそのような組織を望まず、参加もしないだろうという事実です。”

少なくともとりあえずは、ブランデーと彼の支持者はNOCの協会設立の動きを妨げることに成功した。

1967年春のNOCの会議で、IOCに上記のNOC問題を扱う小委員会ができるという情報があったため、この種のNOCの組織設立の計画は延期された。オネスティの下にあった調整と研究委員会は以下の要求をまとめ、この小委員会に提出することになった；

- “1) オリンピックムーブメントに関する問題についてNOCとIOCの間の連絡強化
- 2) オリンピックに関する件とアマチュア問題についての継続的な情報サービス
- 3) スポーツ施設建設についての研究と情報の発表
- 4) スポーツに関する法的問題、規則についての助言
- 5) オリンピック大会参加に値する選手の出場のために、また指導者の交流のためのNOC間の相互協力
- 6) 総会または他の手段でのNOC間の直接交流の発展”

1967年のテヘランでのIOC総会で、NOC関係担当の委員会が決定された。

委員長はデンマークのIOC委員、ヴィントが任命された。彼はNOCの常設会議にははっきり反対していた。オネスティもこの委員会に入った。

諮問委員会の構成も決定された。以下の地域的代表からなる：

- a) パンアメリカ大会協会から二人
- b) アフリカスポーツ最高評議会から二人
- c) アジア大会連盟から二人
- d) オセアニアから一人、この地域のNOCからの書面による指名
- e) ヨーロッパから二人、指名のためにヨーロッパの全てのNOCに手紙が送られる”。

IOCとNOCの接触の拡充は、何よりもより頻繁な会合によって図られることになった。

これら全ての対策はNOCに対する譲歩となったし、オネスティのNOC常設会議をつくらうとする努力を防ぐための周到な企てでもあった。

ブランデーは全NOCに宛てた回状で、新しい組織は必要ないこと、オネスティがローマへの招待状に書いたのと反対に、ローマでの会議はIOCの後援を受けたものではないことをハッキリと力をこめて書いている。

多分この会長からの警告のためであろう、80 を数えた最初の会議に比べてローマに集まったのは 63 NOC だけであった。参加したアフリカの NOC の数は変わらなかったが、アジアからは 12 が 18 に増えた。

アメリカとヨーロッパからの出席者は急激に減った。

“組織内の地理的中心の移動”は明らかであり、“イデオロギー地震”はすぐにも起こりそうであった。オリンピックへの南アフリカの参加をめぐる議論に触発されて、IOC に対する反対は先ず非同盟諸国、共産主義ブロックから起こった。

前線の対立は厳しくなった。オネスティは IOC の譲歩は不十分だと考えた。彼は NOC との連絡を担当する筈の IOC 小委員会に関して深刻な疑いを表明した：

“この共同委員会は一ローザンヌにおける第一回会合の経験がはっきり示しているように一すべての NOC のために発言することは期待できない。何故なら問題の公式な側面を除いて、委員会のメンバー、とくに NOC の代表は、彼らの地域の利益を守るために発言する能力も権利も持たないからである。”

この批判は、委員長、イヴァール・ヴィントから厳しい叱責を浴びた。その結果、オネスティはこの委員会から辞任してしまった。

NOC の三回目の会合はメキシコシティで予定されていた。ブランデーはこの会議が実行されないよう全力を尽くした。彼はオネスティの意図を阻むために、メキシコ人主催者に場所がないからという理由で断らせようとしたことまでした。

オネスティへの何回もの手紙で、ブランデーは NOC の常設会議が意味のないことを主張したが、無駄であった。会議はメキシコシティで 9 月 30 日と 10 月 1 日行われ、参加した 77 の NOC は国内オリンピック委員会の常設総会（PGA NOC）を設立した。

この新しい組織は、年に一度、NOC と IOC 理事会が会う直前に会合することを決めた。

次のオリンピックアードまでの間、この組織の会長に選ばれたオネスティは IOC とオリンピックの理想に対する忠誠を強調した。

ブランデーは、メキシコシティでボーモン伯爵に選挙で勝ち最後の会長職を務めることになったが、強力なライバル組織との摩擦を避けるために NOC をさらに優遇せねばならなかった。

理事会と NOC の会議でブランデーの提案した、IOC、NOC、IF 6 人ずつの代表による三部会は不成立に終わった。IOC と NOC 代表の参加した委員会で充分ということであった。

これまでの IOC と NOC の関係に責任を持っていた委員会は廃止され、五つの新しい委員会に置き換えられた。各委員会は IOC 委員 5 人と NOC 代表 5 人からなる。

第五の委員会“コミッション V”の付託事項は、IOC の会員資格の問題、IOC と NOC と IF の間の関係の問題、年次会議とオリンピックコンGRESSとなった。

この委員会の構成は以下の通り：

IOC 委員	NOC 委員
G.オネスティ（委員長）	J.ノセティ・カンポス
A.アロヨ	A.ダネ
S.アーラー	E.フリード
F.クラウティル	R.ガフナー
H.シェーベル	Dr.ラーナバルディ
I.E.ヴィント	E.ヴィーチョレック

他の共同委員会：

I 援助委員会（委員長：J.A.サマランチ）

II 参加資格委員会（委員長：H.ウエイア）

III 立法、差別、NOC とその政府の関係委員会（委員長：E.フォン・フランケル）

IV オリンピックプログラム、大会役員、大会開催都市指定委員会（委員長：A.カサナディ）

次の NOC 常設総会(PGA)は 1969 年 10 月 21 日と 22 日、ドゥブロヴニクで開かれた。

承認されている 127 の NOC のうち 63 が出席し、32 が欠席届を出した。

議題は、参加資格、“オリンピックソリダリティ”の枠組みの中での相互援助プログラム、国際競技連盟との協力、オリンピックコンGRESSの企画準備と IOC への承認要求などであった。

それに続く IOC 理事会と NOC との会議で、アンドリアノフは PGA を IOC が承認することを提案した。ブランデーの答えは短いが、明確なものであった：

“PGA の承認に関して。IOC は全ての NOC 組織に関心を持っている。しかし IOC は 127 の NOC 全部を代表している。それら全部を代表している組織は他にはない。そして多くの NOC は IOC だけと直接交渉したいといっている。各 NOC はそれぞれ異なった問題を抱えており、IOC はそれぞれ個別に耳を傾けなければならない。”

数ヶ月後に書かれた回状で、彼は NOC 常設総会に対して厳しい批判を行っている。

なかでも、その承認をうるために IOC の手を縛ろうとすること、IOC を改造しようとしていることを批判した。彼はまた、この組織の財政問題を指摘した。

オネスティは強く反発した。彼は非難に反論し、“PGA の唯一の目的はオリンピズムと IOC によりよく奉仕し、IOC と NOC の間のより効果的な対話を実現することだ。”と言った。

ブランデーは 1971 年、ルクセンブルグの理事会で PGA に対してさらに強い攻撃を行った。“自分は NOC が会合を持つことに反対したわけではない。そうではなくて、そうした組織に参加している IOC 委員に反対なのだ。何故ならそのために NOC は IOC の支持を受けていると思ってしまう。”と述べた。

彼の反対のもうひとつの理由はその組織の常設という性格にたいしてであった。

しかし彼のある意味で極端な要求は IOC 委員の中ではあまり賛同は得られなかった。

何週間かあとに、彼は三人の副会長に手紙を書いて“PGA は 今 葬り去らねばならぬ”と主張した。

NOC の常設総会はこうして公式の承認をとりあえずは拒否された。しかし事実上認めざるをえない力であった。それに時が味方していた。ブランデーの会長としての任期は終わりに近づいていたのである。

NOC と同様に、国際競技連盟も自らの利益を守るために団結する必要を感じていた。

ほんの二三の連盟、その中には強力な国際アマチュア陸上競技連盟 (IAAF) があったが、自分たちの自治を守り、IOC と直接交渉したいと望んでいた。

国際競技連盟総会 (GAISF) もまた IOC にとっては NOC 常設総会と同じように悩みの種であった。IOC は個々の競技連盟を一対一で扱うことを続けたいと思っていたからである。理事会と国際競技連盟の会議は 1969 年、ローザンヌで行われたが“時間の無駄”とされた。各競技連盟と個々に交渉する方がよいということになった。

2.4.2. IOC 行政部門の改革

IOC 会長が会長の仕事の大部分を彼のシカゴのオフィス⁸で行っていたにもかかわらず、急速に膨らむ仕事量はローザンヌの IOC 本部を圧倒しそうになった。

ブランデーが会長になったとき、ローザンヌの IOC 本部はオットー・メイヤー、地元の宝石店のオーナーでスイスの IOC 委員、アルバート・メイヤーの兄弟、が責任者であった。彼の公式のタイトルは“IOC Chancellor”（事務総長）であった。

メイヤーは秘書のリディ・ザンキに補佐されていた。彼女はパートタイマーであった。

会長はほとんどの仕事を、シカゴのラサールホテルのオフィスで行っていた。

ここで彼は信頼する個人秘書、フレデリック J. リューグゼッガーのサービスに頼ることができた。彼は 1950 年から働いていた。

⁸ 原注: 会長は IOC の仕事のためにかなりの額の彼自身の金を使っていた。「ブランデーは私に、会長職は年に 3 万 5 千ドルから 4 万ドルの負担になった、と言ったことがある。」ジャン・ド・ボーモン

メイヤーは1964年、ブランデージとの摩擦で辞任した。ブランデージは彼を判断力が不足していると非難していた。

同じ年、東京のIOC総会で、スイスのIOC委員で国際スキー連盟（FIS）の会長、マーク・ホドラーがIOCの名誉財務長官に任命された。

同じ会議で若いスイス人、エリック・ジョナスがアルバート・メイヤーの推薦でIOC事務総長として働くことになった。

チャンセラーのタイトルはその時の憲章規則17を改正することによって廃止されていた。しかし新しい事務総長は、ブランデージの信頼を得ることに成功しなかった。

彼の後任は、退役したオランダの将軍、ヨーハン・ウェスターホッフであった。彼はIOCのますます増える仕事を処理できるようにするため、IOC本部を組織替えしようとした。

彼が到着する前は、IOCは二人のパートタイマーでなんとか仕事をしていた。

しかし新しい事務総長は、絶えず増え続ける仕事量をこなすには10人から15人のスタッフが必要だという意見であった。

大きな問題の一つはスペースであった。広い建物に移るが必要になった。

1922年以来“モンルポ”荘がローザンヌ市によって提供され、IOC本部とクーベルタン夫妻の住まいとして使われていた。クーベルタン男爵夫人はそこに1960年代初めまで住んでいた。

しかし彼女の死後、住居でなくなっても、そのスペースは博物館、図書館、IOCオフィスを入れるのに十分ではなかった。

1966年の理事会で、事務総長はチューリッヒに近いサンガレンの市長からIOCに提供の申し出があったと報告した。チューリッヒ国際空港に近いことがこの場所の利点であった。

次の年、1967年、記者団はIOCのスペース問題について知らされた。

その年、この新聞記事に驚いて、ローザンヌ市はIOCにシャトードヴィディを提供した。ジュネーブ湖畔の18世紀のマンションである。

新しいオフィスには1968年の春に移った。しかしウェスターホッフは新しい建物に落ち着く前に、1969年初めに辞任させられた。ブランデージは彼の仕事に満足していなかった、十分な能力もなければ十分に勤勉ではないと思っていた。ウェスターホッフの組織替えは中途半端に終わってしまった。

絶えず増え続けるNOCの数、大会の巨大化はローザンヌのIOCの管理機構の能力を完全に凌駕していた。問題解決を助けるために、さかのぼって1965年には小委員会が作られていた。ボーモン伯爵の指導の下にシャトードヴィディのIOCオフィスは現代化が進められた。

事務総長のポストを局長に置き換える決定がなされた。

しかし1969年3月の理事会は新しいIOC局長の選択を延期した。

モニク・ベルリュウ、元オリンピック水泳選手でスポーツ記者、が最初は“IOCプレッティン”の仕事に就いたが、やがて報道・広報の局長に指名された。

このようにして彼女は行政部門にも責任を持った。そしてこの部門で新しくテクニカルディレクターに指名されたアルトゥール・タカクが彼女の下に配置された。彼女はすぐにブランデーの信頼を勝ち得て行政部門をしっかり掌握し、不屈のエネルギーで動かした。

2.4.3. 初期“オリンピックソリダリティー”の困難

1960年はじめ、チリは大地震に襲われ、沢山の犠牲者を出した。チリオリンピックチームとの連帯意識から、フランスNOCは三人のチリ選手の旅費を負担することにした。

イタリアNOCはチームのローマ滞在費を全額提供した。

ボーモン伯爵に、貧しいNOCのための組織設立のアイデアを思いつかせたのは、このNOCの間の自発的なオリンピック連帯だったのだろうか？

一年後、1961年のアテネでのIOC総会で、彼は同僚たちに、IOCがアフリカやアジアの新しい国々に何らかの形で経済援助する必要があることを訴えた。

彼はそのような援助を供給する可能な方法を研究する委員会を作ることを提案した。

出席していた委員はあまり乗り気でなかった。彼らはこの種のプロジェクトは実行に移すのは難しいと考えていたのである。しかし提案を検討してみることに賛成した。

1962年、モスクワの回目のIOC総会で、ボーモンは、その委員会は自分が委員長で、アンドリアノフがリーダーの役を務める“国際オリンピック援助委員会”と称すると発表した。

1年後、この委員会は再び議論の対象になった。1963年6月のローザンヌの理事会で、ボーモン伯爵は国際オリンピック援助委員会の活動について報告した。続いての議論で、委員会の財政について早速意見の相違が生じた。

オリンピックを招致しようとする市に寄付或いは援助を求めてはという案は、マサール副会長から猛烈な反対を浴びた。

ブランデーもこの種の努力は先ず、経済より教育的な面に集中すべきだという意見であった。

結局、委員会はとりあえず次のナイロビに予定されている総会まで、IOCのヘッドの入った文書を使うことは控え、委員会の名前から“オリンピック”の文字を消すことになった。

次のIOC総会は政治的問題のためにナイロビでは行われず、ドイツのバーデンバーデンで開催されたが、IOCは委員会の財源を確保することは、必要な財源がないのでできないと決定した。またこの種の組織がIOCから独立してつくられることにも反対した。

しかしこの努力は続けるべきだというのが一般的意見で、サー・アーサー・ポリットによる以下の提案は総会の決議となった：

「…報告書の中に考察されている可能性と活動の光に照らして、これからどのような活動が望ましくそして実際的であるかを決めるIOCの特別のそのための委員会を設置することが勧告される⁹。」

1964 年秋の理事会で、国際援助を扱うと共に、このことに関して過去に起きた間違いを避けるために情報を集める小委員会を作ることが決まった。

これは 1968 年メキシコシティで、IOC と NOC が参加して設立された小委員会、“援助委員会”として具体化した。しかしこの委員会は何年もの間、控えめな存在であった。

1969 年初め、NOC 常設総会の代表たちは“NOC の利益のための技術とスポーツの援助プログラム”を作る必要を確信した。

このアイデアを実現するために、G.オネスティ PGA - NOC 会長、R.ガフナー スイス NOC 会長、R.モレ ベルギー NOC 会長そして E.ヴィーツォレック PGA-NOC 事務総長が 1969 年 4 月 29 日、“NOC 発展のための国際機構”を作った。

この機構は、それ自身を NOC の PGA の一部をなす“補助事業”であると見なしていた。

その主な目的は“NOC の利益のための PGA 援助プログラムと NOC の PGA によって決定され実行される具体的な援助活動を賄う”基金を集めることである。

この機構の定款はその特別な目的を以下のように述べていた：

- “a) 国内オリンピック委員会 (NOCs) の間の緊密な協力関係を作り出すこととその発展を促進すること。
- b) オリンピックソリダリティの枠内で NOC 常設総会によって採用された政策に従って、国内オリンピック委員会の利益のためのプロジェクトと、技術とスポーツの援助計画の具体的な実現のために必要な物質的基礎を提供すること。
- c) NOC の仕事の範囲内にあり、その進歩に貢献できるすべてのスポーツ事業あるいはプロジェクトを育成すること”。

この機構の活動は、似たような組織の事業の敵対的な競争相手となるものではなく、他の事業の活動と喜んで協力するものであることを、わざわざ強調していた。

⁹ 原注:アンダーラインはオリジナルテキストに引かれている。

このタイプの共同作業はオランダの IOC 委員、ヘルマン A.ファン・カルネヴィークが 1971 年の理事会に“オリンピックソリダリティ委員会”の設立を提案した時、ついに実現し始めるかに見えた。

ブランデーはアイデアには賛成したが、この種の計画をいかにして賄うかについて疑念を表明した。彼は、まさにこの財政問題で暗礁にのりあげたボーモン伯爵の委員会に、この件を再付託した。

札幌での理事会と総会への報告の中で、このプロジェクトのために働いた三人の副会長は“NOC 援助のためのオリンピック基金”の設立を喜んだ。この基金はテレビ放送権料から捻出され、NOC 援助のために使われることになっていた。

最初は IOC 委員だけがこの組織に属するように考えられていたが、IOC の同意のもとに、NOC、IF、そして IOA（国際オリンピックアカデミー）の専門家が参加する規定が作られた。

この組織の予算は毎年 IOC によって決められると規定された。この基金はミュンヘンオリンピックのあと活動を始めることになっていた。NOC 常設会議に属する同じような組織は、ローザンヌに移され、IOC の指揮の下に置かれることになっていた。

次の IOC 総会でこの提案はいくつかの批判を浴びた。

スミルノフは、究極の目的はテレビ放送権料の分配であるのだから、NOC がこの決定の論議に加わるべきだという意見を述べた。

次の年のミュンヘンでの IOC 総会で、ファン・カルネヴィークはこの委員会の委任事項について具体的な提案をした：

1. 一般的に受け入れられているスポーツ行政についてのアドバイス。
2. スポーツの競技方法の導入。学校に始まり、街、地方そして国内選手権等に至る。
これはもちろんそれぞれの国際競技連盟との緊密な協力によってのみ実現される。
3. NOC の定款と規則の作成に当たっての助言。
4. NOC がスポーツ施設建設、整備、維持を扱うさまざまな機関や組織と接触する際のガイダンス
5. オリンピックや大陸大会、地域大会で得られた経験を組織委員会に伝えること。
6. スポーツ分野における IOC の教育的出版物の回覧”。

長い困難な懐胎の後に“オリンピックソリダリティ”は生まれた。

本物の独裁者のようであったブランデーは、最初はこの組織が作られることを妨害し、後に引き延ばした。NOC に対するコントロールを、用心深く、何とか維持しようとしたのである。

2.4.4. IOCの資金調達

第2次世界大戦後の大きな政治的、社会経済的、文化技術的变化は、スポーツの世界に巨大な衝撃を与えた。

ますます大きくなる政治的、経済的な相互依存を背景に、国際関係がさまざまな地域で発展した。スポーツもこの“グローバル化”の過程に影響された。

それまでスポーツの発展は、主としてヨーロッパ、北アメリカそしてイギリスの影響圏（ニュージーランド、オーストラリア）などの伝統的なスポーツ国に限られてきた。

それと対照的に、1950年から1970年の期間はスポーツの真の“地球化”によって性格づけられた。

通信技術と交通の進歩は地球を小さくした。たくさんの国際競技会が急速に発達し、東側ブロックの国々といわゆる“第三世界”がスポーツの世界に進出してきた。

同時に国家的、イデオロギー的利害、がスポーツの世界のますますの政治化を招いた。冷戦がスポーツの世界での、一種の“軍拡競争”の背後の原動力となった。

システマティックな才能発掘、高度に発達した運動用具、洗練されたスポーツ技術、改善されたトレーニング方法、そして膨大に増えたトレーニング時間がたくさんのスポーツで競技力の爆発的向上を生んだ。

東側ブロックの国々では、国がスポーツに及ぼした影響力は明らかであった。

西側では改善された経済状況と増大するレジャーがスポーツの民主化を促進した。そして東側ブロックの競技の圧力にさらされて、スポーツ活動を支える競技連盟やクラブの資金要求は多くの場合容易に満たされた。

通信技術の巨大な進歩は、スポーツの世界の急激な変化の基礎を提供した。

“1950年代と60年代”の技術発達と経済繁栄はテレビの普及を加速し、テレビはスポーツマーケティングの主要な媒体となった。

1950年代後半のテレビジョンセットの販売は“消費主義の伝染病”と言われるぐらいの現象となった。アメリカで売れたテレビジョンセットの数は、1946年の5千台から1950年には7百万台に増えた。1960年代初めに、アメリカの家庭の95%が少なくとも1台のテレビを所有していた。

1957年にソ連が“スプートニク”を地球を回る軌道に打ち上げ、最初の人工衛星とし、1960年にアメリカの衛星“テルスター”で始まる衛星中継の基礎を作り出した。

最初の静止衛星（“アーリーバード”）はちょうど5年後、これに続いた。

テレビはスポーツイベントを伝えるマスメディアとして比類のないものになった。

新聞は即時性を欠き、ラジオは映像を欠く、そしてどちらもスポーツの一番重要な要素、動きを伝えることができない。

テレビは、いろいろな角度から、拡大したり、繰り返したり、動きの連続をスローモーションやストップモーションでさえ見せることができる。そして、スタジアムにいる観客の生の目には見えない細部や分析を、テレビを見ている人に伝えることができる。

スポーツとテレビの共益関係、20世紀を代表するメディアとその最もすぐれた広告手段の共生が始まった。お互いがお互いの進歩に影響し合った。

商業主義の加速とスポーツのプロ化がその一つの結果であった。

メディアの露出と大衆化と商業化の渦巻状の急上昇過程が始まった。

スポーツの人気が増し、それと共にスポーツの商品としての経済価値が高まった。そしてそれがメディアの露出を増やし、結局はスポーツ自体の発展を助けることになった。

1946年初め、有名な野球チーム、ニューヨークヤンキースはその試合の放送権をテレビジョンネットワークに売った。フットボールとバスケットボールのチームがそれに続いた。

1952年までに、北アメリカフットボールリーグのテレビジョン収入は全収入の3分の1を超えていた。

こうした事態の発展はオリンピックムーブメントにも衝撃を与えずにはおかなかった。

IOC、NOC、IFに新しい資金調達の可能性が開かれた。

オリンピック大会は増大する利益の結果ますます巨大化していた。これは結局、選手自身を、メダルの持つ道徳的価値を物質的収益に代えようとする誘惑に晒すことになった。

IOCの資金調達

1960年代までIOCの財政状態は不安定なものであった。

その時まで、メンバーの会費とオリンピック主催都市からの分担金が収入の主なもの¹⁰であった。

ブランデーは行政費用のある部分を彼自身のポケットから出していた。しかし彼はクーベルタンと違ってそのために破産はしなかった。

国際アマチュア陸上連盟の会長、ロード・バーリー・エクゼター侯爵のいくつかの提案、すなわちオリンピックの入場券に5%の税金をかけて、IFとIOCが増え続ける活動の財源として使えるようにするべきだという提案は、ブランデーににべもなく扱われた。

¹⁰ 原注：オリンピック憲章、規則24：IOCは会員国の年会費を定める。オリンピック大会と冬季大会の組織委員会はIOCの定める分担金を払わなければならない。

メルボルン6万Sfr. コルチナダンペッツォ2万Sfr. スtockホルム(馬術)1.5万Sfr. スコーバレー3万Sfr. ローマ10万Sfr. 東京13万US\$ インスブルック2万US\$

最初の提案から2年後、1959年のミュンヘンのIOC総会で、エクゼター侯爵は国際競技連盟の収入とするために入場券に3%の税を乗せるよう、長い演説をした。

彼は、オリンピック大会との関連で世界選手権を開催する国際競技連盟は、大変な損失をこうむっていることを指摘した。

それに続く議論で彼は、もしIOCが彼の提案を拒否するなら、IAAFは独自の世界選手権を始めると脅しをかけた。しかしそれにもかかわらず委員の過半数はそのような税金に反対の投票をした。

この方法が不人気だと思われたという事実の他に、この種の規則が更なる資金要求に扉を開くだろうという恐れがあった。

総会の数日前、IOC会長は入場券の税金の導入がオリンピックの理想と相いれないし、オリンピックムーブメントのイメージを損なうだろう、という理由で反対をはっきりと表明していた。彼はオリンピックムーブメントをあらゆる形の商業主義から守ることを義務と心得ていた。

結局ボーモン伯爵の動議に基づいて、IOCが国際競技連盟を支援する、そして詳細な調査に基づいてローマでの1960年総会で投票を行うという合意がなされた。

IOC総会で、ともかくもテレビ放送権料の問題が論じられたのは、1956年のコルチナダンペッツォが最初であった。この会議は前の年の国際競技連盟と理事会の会合に続くもので、その時IFの代表は、将来のテレビ放送権料からの利益の可能性について言及し、この収入の分け前について彼らの希望を述べたのであった。

ブランデーのテレビからの収入についての態度は極めて用心深いものであった。

彼は、テレビジョンネットワークは報道が公共の利益であるという見解を取っているの
で、金を払うことには同意しないだろうと報告した。

しかしその一方で、アメリカの商業放送は重要なスポーツイベントを放送するためには、天文額的な金額を払う用意があった。

集まったIOC委員たちは、オリンピックのテレビ放送はスタジアムに来る観客の数を減らし組織委員会に不利益となるのだから、IOCはテレビマネーを得る権利があると考えた。

それに大会の放送はテレビジョンネットワークにとって広告収入の主要な源となっているのだ。

IOC委員は、テレビジョンネットワークとの交渉は最大の慎重さをもって行うべきだということに同意した。というのは、ある人々はもし報道の自由を侵すようなことがあれば、オリンピックをボイコットすると脅していたのである。

ブランデーの意見は、テレビ会社と交渉するのは組織委員会で、IOCはルールを定めるが直接商業的な交渉に巻き込まれるべきではないというものであった。

彼は良い結果が得られるかどうかの見通しについては、極度に懐疑的であった。

彼は依然として、テレビマネーからの完全な独立を、現実的な可能性としては最も好ましい解決策であると考えていた。

“親愛なる友よ、我々は60年間テレビなしでやってきました。これからの60年間もきっとテレビなしでやっていけるでしょう・・・”、彼は1956年のコルチナダンペッツォの理事会の前に宣言していた。

しかし、それからわずか1年後、彼はテレビ放送権料からIOCが資金調達を出来る可能性を理解していたように見える。そしてこのことに注意を向け、理事会によって研究されるべきだと思えるようになっていた。

オリンピック憲章規則49は1958年にテレビ放送権について以下の節を付け加えられた：“オリンピック大会を直接に伝達する権利、一般にライブテレビジョンライツと呼ばれているものは、国際オリンピック委員会の承認を条件として、組織委員会によって販売される。そしてこの販売からの収入はその指示によって分配される。”

メルボルンでの不成功に終わった交渉の後、テレビ放送権は初めて1960年、テレビジョンネットワークに売られた。

スコーバレーの組織委員会は冬季大会の開催都市であったが、そのテレビ放送権料は州当局から受けた経済援助のお返しとしてカリフォルニア州に引き渡した。その結果IOCは分け前の請求をすることができなかった。

ローマは最低5万ドルの保証を条件に、そのテレビからの収入の5%をIOCに提供した。

ローマ大会はRAI（イタリアラジオテレビジョン）によって、ユーロヴィジョン放送としてほとんどの西ヨーロッパの国々に、また幾つかの東ヨーロッパの地域にはインターヴィジョンによって放送された。

アメリカのテレビジョンネットワーク、CBSは大会のフィルムのために66万ドルを払った。このフィルムは飛行機でニューヨークに運ばれ、北アメリカ全体に放送された。

日本のテレビジョンネットワークNHK（日本放送協会）はビデオテープをローマから飛行機で運んだ。

大会は合計21の国のテレビで見られた。

1964年の東京大会のテレビ放送権からのIOCの収入は6万5千ドルに上った。この半分はIOCに自体に入り、あとの半分は国際競技連盟に行った。

インスブルック冬季大会の放送権料としてテレビジョンネットワークは合計2万ドルを払った。この50%は冬のスポーツの競技連盟に割り当てられた。

東京大会から、オリンピック競技の一部は初めて衛星によって北アメリカ、ヨーロッパそしてアジアの多くの地域で放送された。

日本のテレビジョンネットワーク NHK は全体で 167 時間の国際放送信号を作り、そのおよそ 20%が衛星によって他の地域に伝送された。

東京はまたカラーテレビに突破口を開き、放送の 30%はカラーで見られた。

1965 年に国際競技連盟は将来のテレビ収入の三分の一を要求した。そしてそのすぐあと NOC が自分たちの分け前を要求した。

メキシコシティー大会からの収入、20 万ドルとグルノーブル大会からの 3 万ドルは、それにもかかわらず IOC と国際競技連盟との間で分けられた。

テレビ放送権料の分配を決めるルールを、オリンピックの 4 つの主なパートナー、すなわち IOC、組織委員会、国際競技連盟、国内オリンピック委員会を考慮に入れて作ることが、緊急の課題となった。

その目的は、テレビ放送権料収入を、これは原則として IOC に権利があるわけであるが、オリンピックムーブメントそのものの利益となるようにすることであった。

1966 年のローマの理事会で財政委員会の委員長、マーク・ホドラーはテレビ放送権料収入を以下のように分けることを提案した：

最初の 100 万ドルは IOC、IF、NOC の間で三等分する。そして次の 100 万ドルは組織委員会が三分の一を受け取り、IOC、グループとしての NOC、グループとしての国際競技連盟がそれぞれ 9 分の 2 ずつを受け取る。

三番目の 100 万ドル以降は 3 分の 2 を組織委員会へ、9 分の 1 ずつを IOC、NOC、IF が受け取る。

この提案は 1972 年の大会から適用されるとして、1966 年のローマの IOC 総会で採択された。

オリンピック大会のますますの巨大化につれて IOC の仕事量も増え続けた。IOC はそれ自身の成功の犠牲になったのである。ローマとインスブルックの大会以来収入は際立って増えたが、それでも爆発的に増える行政費用を賄うには不十分であった。

1967 年 IOC は財政破たん直面した。

その支出は 1960 年には 3 万 6 千スイスフランであったが 1966 年には 7 倍 (266,000 Sfr.) 以上に増えた。

しかし会長は特に心配しているようには見えなかった。彼はドゥブロヴニクでの IOC 理事会と NOC の代表との会合で笑いながら言った：“紳士諸君、我々は破産しました。”

彼はあらゆる手段で IOC を商業活動から引き離しておこうとした、そしてその時進行している事態に苛立っていた。その苛立ちは 1967 年の彼の回状に明らかに見て取れる：

“我々はビジネスに入り込みました、そしてそれに付随する全ての問題に遭遇しています。そして我々の活動の中にいかに微かであるとはいえ変化が見て取れます。私は、

これは歓迎すべきことだとは思いません。IOC の使命は決して商業的な事業ではないし、私は我々がそうなりたいと思ってはいないと確信するのです。”

1968 年から 1972 年まで、IOC は、ミュンヘンのオリンピック大会の前払い金のおかげで、借金をすることなく乗り切ることができた。

この不安な時期のあと、IOC の財政事情は劇的に改善した。1972 年大会のテレビ放送権が莫大な金額で売れたからである。

IOC の資本勘定の比較財務表 1952 年から 1972 年

COMPARATIVE STATEMENT OF THE IOC'S CAPITAL ACCOUNT FROM 1952 TO 1972

YEAR	SF	RATE	\$
1952	73 000	4.29	17 000
1953	76 000	4.29	17 700
1954	63 000	4.29	14 700
1955	39 000	4.29	9 100
1956	134 000	4.29	31 200
1957	130 000	4.29	30 300
1958	92 000	4.29	21 400
1959	58 000	4.32	13 400
1960	22 000	4.30	5 100
1961	305 000	4.31	70 800
1962	476 000	4.32	110 200
1963	450 000	4.32	104 200
1964	844 000	4.32	195 400
1965	762 000	4.32	176 400
1966	549 000	4.33	126 800
1967	394 000	4.33	91 000
1968	(476 000)	4.30	(110 700)
1969	(1 305 000)	4.32	(302 100)
1970	(1 892 000)	4.32	(438 000)
1971	(2 764 000)	3.91	(706 900)
1972	7 920 000	3.80	2 084 000

NB From 1968 to 1971, the capital account ran a deficit and the cashflow was maintained by advance payments received on the Munich O.G. (Source: IOC Finance Department.)

1968 年から 1971 年に注意、資本勘定は赤字だが資金繰りはミュンヘン組織委員会からの前払いで支えられた。

2.4.5. アマチュア問題

ブランデーはアマチュアリズムをオリンピックムーブメントの礎と考えていた（この章の 2.2.3. 参照）。

彼が IOC 会長に選挙される前、彼はアマチュア委員会の委員長であった。

彼は、IOC 委員、ボー・エケルンド（スウェーデン）、R. W. ゼールドライエルス（ベルギー）、IAAF セクレタリー、E. J. ホルト、国際漕艇連盟 FISA セクレタリー、G. ムレッジと共に、マチュアの定義の起草に協力した。その目的は“この件に関して決定的に明確な規則を作ること”であった。

この大望にふさわしい熱意をもってブランデーは、オリンピック大会にこの定義に合う選手だけが参加できるよう、彼の全エネルギーを捧げた。

彼にとってアマチュアリズムは“曲げることのできない、絶対的な、そして普遍的なもの”であった。

アマチュアの定義に関して彼は次のような意見を述べている、“それは正確であり、変えることのできないものであり、いかなる組織もこれを変えることはできない。競技者は、スポーツをただ喜びのためだけに行う限りにおいて、アマチュアと考えられる”。

二人のノルウェー人、オラフ・ディトレフ・シモンセンとトマス・ファーンレイが 1950 年にコペンハーゲンで、アマチュアの定義はそれぞれの競技の国際連盟に委ねられるべきだと提案したとき、ブランデーは激しく反応し“STOP”で始まる回状を出した。

彼はこのタイプの提案に“オリンピックムーブメントの将来に対する恐ろしい脅威”と IOC の終焉を見て取ったのである。

いくつかの批判的な新聞は、アマチュアリズムを 1955 年にパリで開かれる予定の IOC 総会の議題にするよう、ブランデーに促した。

会長は 1947 年の規則は“この主題を完全にカバーしている”と考えていた。しかし競技参加のための収入の損失に対する補償の問題についての議論は何回も何回も持ち出されていた。

そのような補償は 1925 年のプラハでのテクニカルコンGRESで拒否されていた。ブランデーは収入の損失に対する補償がすぐに正規の収入になってしまうことを恐れた。

彼の意見では、その種の補償規則は“アマチュアスポーツの根本原則”とオリンピック憲章に完全に反するものであった。

“もし補償がオリンピック大会で認められれば、アマチュアスポーツの砦であり柱であると思われる国際オリンピック委員会は、それを鼓舞し、正しい道に導く代わりに、アマチュアリズムを純粹に守ろうとしている 80 の国々の何千という人々と組織を裏切ることになるであろう。”

彼は、収入の損失に対する補償は必要ないと言った。彼の四十年の経験に照らして“オリンピック大会で競技できないほど貧しい選手を知らないし、聞いたこともない”から、と主張した。

ブランデーは、アマチュアの原則が社会的に条件付けられた基準なのだから、全ての他の社会的規則と同じように変わっていく社会的条件と歩調を合わせることができるよう、時々見直さなければならないものだ、という可能性を認めることを拒否したのである。

IOC 会長はもう一つ別の問題に悩まされていた：オリンピックでの成功をプロ転向に利用する選手の数が増えていたのである。この事態の展開に直面して選手宣誓の改正が必要と考えられた。選手宣誓の公式“ここに署名した私は、私の名誉にかけて、私がアマチュアであり、オリンピック規則によって定められた条件を満たすものであることを宣言します。”の“私はアマチュアであり”の後に“(アマチュア)に留まるつもりです、”という言葉が挿入された。

しかしこの挿入は大変な抗議の嵐を巻き起こしたので、理事会はこの規則を保留し、古い言葉使いを 1956 年の大会まで維持せざるを得なかった。

IOC に対していろんな方面から、現実を無視し、既にとっくに時代遅れになった理想に偽善的にしがみ付いている、という批判が向けられた。

アマチュア規則に対する違反はますます頻発するようになっていた。多くの競技ではレベルが非常に高くなり、トップレベルを維持しながら職業を両立させることは不可能になっていた。

そこでスイスの IOC 委員、アルバート・メイヤーはオリンピック憲章の規則 26 を調整する方向への第一歩を踏み出した。彼はこの規則が変化した社会的条件に対して“時代遅れになっており、過去の属している”と考えていた。

1960 年のローマにおける第 58 回 IOC 総会で、彼はアマチュア規則の修正案を提出した。

この提案を処理するために、IOC は理事会とアルバート・メイヤーを含む委員会を作った。この委員会には後に、フランソア・ピエトリ（フランス）、モハメッド・タヘル・パシャ（エジプト）、イヴァール・エミール・ヴィント（デンマーク）が参加した。

1961 年のアテネでの IOC 総会で、出席した委員はそこから選ぶべき幾つかのアマチュアの定義を提示された。

ソビエトの委員、C.アンドリアノフと A.ロマノフの提案した修正案も規則 26 に関するものであった。それは収入の損失に対する補償について明記していた。彼らはそれを正当

なものであると考えていたのである。このソビエトの修正案ははっきりした過半数¹¹*で拒否された。

スウェーデンの委員、ボー・エケルンドはこの規則を大幅に簡素化したいと願っていた。彼のアマチュアの定義は以下のようなものである：

“プロ選手はオリンピック大会に参加することはできない。プロ選手とは主として競技スポーツから生計を得ている者である。”

規則改正のために指名された委員会は、アルバート・メイヤーの指揮の下に、規則 26 の改正案として以下の提案をした：

“アマチュアは物質的報酬なしにスポーツに参加する者、これまでも常に、物質的報酬なしに参加してきたものである。

アマチュアと認定されるためには以下の条件に合うことが必要である：

- a) 現在及び将来の生計を保証する普通の職業を持っていること。
- b) いかなるスポーツに参加することに対しても一切報酬を受けたことがないこと。
- c) 当該国際競技連盟の規則に適合していること。
- d) この規則の公式の解釈に適合していること。”

アマチュア委員会の報告と提案に対する投票では、一人を除いてすべての委員がアルバート・メイヤーによって提出された案に賛成した。

しかしアマチュア規則の改定については何の決定も行われなかった。

“*Stop, Look and Listen*”、(ストップ、よく見て聞こう)、これがローマでの提案に応える手紙の最初にブランデーが書いた言葉であった。

彼の意見では、収入の損失に対する補償はオリンピックムーブメントの問題を解決する方法としてはまったく不適切なものであった。彼は、規則を緩める代わりにもっと厳格にそれを適用しなければならないと信じていた。

“オリンピックムーブメントの弱点であり、我々のトラブルの原因の95%は現在のルールが強制されないことにある。もし違反を止めようとするならば罰を科さねばならない。”

1960年11月17日付けの回状で、彼はアマチュア規則の違反に対して“厳しい罰”を呼びかけた。それがオリンピック大会を、純粋な、清い、真つ当なものに保つ唯一の方法なのだからと。

¹¹ 原注:37対7

1962年のモスクワでの第60回IOC総会で、改革に賛成のIOC委員の多数の圧力の下に、ブランデーは多少の譲歩を強いられた。“偽のアマチュアリズム”の偽善と縁を切るために、総会はオリンピック憲章の26条を修正した。わずかな文体上の修正を除いてアマチュア委員会の案が原案通り採用された。

この規則の解釈から生ずる困難を防ぐために、1963年にバーデンバーデンで会合した理事会は、エクゼター侯爵によって提案された以下の補遺を公式の解釈として採用した：

“IOCは、競技者は利益や生計を彼の競技から得ないという基本原則を犯していない限りにおいて、競技や選手に対してこの規則に対する例外措置を取る権利を留保する。”

1963年のバーデンバーデンでの総会の間に行われたIOC理事会とNOCの代表との会合で、アマチュア問題は長い時間をかけて議論された。

ブランデーはまた、ステートアマチュアの問題、トレーニングキャンプや選手に対する奨学金の問題を取り上げた。そしてNOCに対しアマチュア規則を厳密に遵守するよう求めた。

そして同じ年の回状で、IOC会長は、軍隊内の選手に一般市民に優る特別な条件を提供することに対して警告し、そのようなことが続けばオリンピックの競技から軍人を排除せざるを得なくなるだろうと述べた。

1952年のソビエト連邦のオリンピックファミリーへの参加以来、ステートアマチュア問題は悩ましいトゲとなっていた。フランスのマサールIOC副会長は、すでに1953年に“ステートアスリートの状況は我々の主要な問題になっている。”と言っていた。

アマチュア問題は、テレビの重要性が増すにつれて、より深刻になっていった。

一般のスポーツに対する熱狂の高まりは、スポーツ商品の製作者に巨大なマーケットを開くことになった。テレビはこの熱狂に火をつけてだけでなく、同時にスポーツ産業の最も重要な広告手段となった。一番市場価値の高いのは人気のあるチームスポーツ、そしてフィギアスケートやアルペンスキーのようなとりわけテレビ的なスポーツであった。

スキーは次第に大衆のスポーツになっていった。スキーは比較的高価な器具を必要とするスポーツなので、スキー産業に巨大な利益を約束することになった。

ブランデーにとっては、これらのスポーツはオリンピックムーブメントのなかの黒い羊であった。

インスブルック大会の間、まさにこれらの冬のスポーツが、偽のアマチュアリズムの疑いをかけられることになったのである。

キリウス／ボイムラーのケースが、オリンピックファミリーの意見を分けた。

ペアースケーティングの銀メダリスト、マリア・キリウスとハンスユルゲン・ボイムラーは、大会の前に映画会社との契約にサインしていた。

ドイツ NOC と国際スケート連盟は二人の選手を罰する理由は無いとみたが、イヴァール・ヴィントが委員長の IOC 調査委員会に制裁が必要と考えた。

1966 年に、この事件にけりをつけるため、キリウスとボイムラーは自発的に彼らのメダルを IOC に返還した。

しかしそうすることによって、IOC は困った立場に立つことになった。3 位と 4 位のカップルが銀メダルと銅メダルになるわけだが、彼らはその間にプロになっていたのである。

1964 年の東京での IOC 夏の総会で、アマチュア資格検証の問題が議題に上った。

もう一度、特にチームスポーツでアマチュア資格を守る困難が指摘された。

出席した委員は、この問題はフットボール（FIFA）と自転車（UCI）を管轄する連盟から生じているという見解を取った。これらの連盟はアマチュアとプロ選手の両方に責任を持っていたのである。

総会は、この二つの組織はオリンピック大会に続けて参加を許されるためには 12 か月以内に独立したアマチュアの組織を作らなければならない、と決定した。

ブランデーの後継者、ロード・キラニンの意見ではこの要求は誤りであった。

彼は一つの連盟がプロとアマチュアを管理する方が容易であると考えた；さらにプロ選手は本来プロスポーツに属する金がアマチュアにとられることを防ぐ点で利益を得ていると。

選手の着衣に付ける広告の問題は、東京での総会で初めて取り上げられた。

多くの委員が修正を求めたけれども、この総会ではアマチュア規則は変更されず、単にトレーニングキャンプが許される期間を、3 週間から 4 週間に延ばす問題が取り上げられただけであった。

1 年あと、1965 年のマドリッドの総会で、オーストラリアの委員、ヒュー・ウェアを委員長とした新しいアマチュア委員会が作られた。このワーキンググループは NOC の代表たちによって提出されたアマチュア問題についての提案を検討することになっていた。

NOC の代表たちはローマでの会議で“それぞれの国際連盟によって、それぞれの競技に対する、個別に定められた、新しい総合的な規則”を要求していたのである。

そのため彼らは IOC に対し、以下のアマチュアの定義を採用するよう提案した：

“アマチュアとは、利益を得ることを目的にせず、他の教育活動や職業活動に加えてスポーツを行う者のことである。彼は、本当の、証明された、立証できる支出については、自分で必要な用意をすれば、公正に補償を受けることができる。”

最初のレポートで、ヒュー・ウェアのアマチュア委員会は、アマチュアリズムは理想の一部を構成するものであるが、一つの単純な定義で包括できるものではないという見解をとった。

その見解によれば、オリンピック大会にアマチュアだけが参加できることを確実にするただ一つの実際的な方法は、アマチュアの理想に対するすべての違反のカタログを書き上げることであろうというものであった。

アマチュア問題についての IOC の政策は、1967 年、IOC 副会長、ソビエトのアンドリアノフによって厳しく批判された。

彼はテヘランでの総会で、IOC に対して、総合的な政策変更を求める一連の提案をした。彼の提案の一つはアマチュア問題に関するものであった。それは次のようなものである：

“スポーツのアマチュアリズムに関する、実りのない議論が何年も続いている。

50 年以上も IOC は、近代スポーツの発展が必要としてきた生活や条件を考慮に入れることなく、自分自身の見解を世界に向かって証明しようとして、行きづまりから脱出する方法を見つけようとしてきた。

これはもっとも解決しがたい問題の一つであり、19 世紀末に造られたアマチュア資格の古めかしい規定を見直して、新しい取り組みの道を見つけることが必要であると思われる。例えば、何人ものチャンピオンがアマチュアからプロに転向する事実は、どういう意味をもっているのであろうか？彼らの数は少ないし、このことで全体としてのスポーツの規律に制裁を求めるべきではない。我々は十分な勇気を奮い起こして、現代の必要に直面し、アマチュア資格の新しい規則を決めなければならない。そして IOC の望みや見込みに反して余りにもしばしば破られてきた古い規則にしがみつくことをやめなければならない。我々はこの問題についても、われわれの選択をしなければならない。”

この批判的な挑戦は、その核心においてこの時代の一般的な意見を反映していた。

アマチュア規則は偽善的なものと見なされていたのである。

1967 年 7 月 23 日の“タイムマガジン”に“誰も（IOC）規則など気にしないだろう”という記事が現れた。同じ年の 6 月 4 日のロンドン“オブザーバー”は“オリンピックのスポーツマンはもはやアマチュアではありえない”という結論を下した。

1968 年の冬季大会で、フランスの週刊誌“レクスプレス”は、うぶなだまされやすい者だけがグルノーブルの競技で純粋なアマチュアを見る事ができると信じているのだ、とコメントした。

2 年後、ジャーナリストのジャン・マルケはフランスの新聞“ルモンド”に書いた：

“もしこの規則が1970年に適用されるとすれば、アメリカの学生も、ソビエトの兵士も、フランスの事務員も、イタリアの職人も、大会に参加する資格はないであろう。それは19世紀のイギリスの“スポーツマン”の定義に逆戻りする事を意味するであろう。”

1959年、ブランデーはそのようなプレスリポートに対して法的措置¹²をもって応えた。

1968年のグルノーブルにおける冬季大会で、ブランデーは非常にはっきりと、冬季大会に対する嫌悪感を示した。彼は冬季大会がプロフェッショナリズムとコマーシャリズムに汚染されていると見ていたのである。

アルペン競技の前夜、会長は、スキーに付けた会社の名前は厳密な法解釈に従った場合消すことはできないと、告げられた。怒り狂ったブランデーは、アルペン種目への出席とメダル授与を拒否してこれに応えた。

ヒュー・ウエアーのアマチュア委員会は、あらゆる種類の困難に付きまといれていたが、何よりも個人的な問題が委員長に影響を及ぼして、はっきりした結論に至ることはできなかった。

新しい参加資格規則起草の仕事は“合同参加資格委員会”、に移管された。これはメキシコシティでNOC代表とIOC委員によって設立された5つの委員会の1つである。

次の年のワルシャワでのIOC総会で、この新しい委員会の委員長、ルーマニアのIOC委員シペルコは彼のワーキンググループの作業について詳細な報告を提出した。

この委員会は規則26を改正する必要はないと考えた。しかしこの規則の公式の解釈を現代スポーツの要求に沿ったものになるよう見直すことを提案した。

その改正の提案の中に、委員会は、最近数十年間の社会的進歩、倫理的な観点、そしてIOCの国際競技連盟との関係を考慮にいった。

この提案はすべてのNOCに送られた。そしてその大多数は賛成したと、A.シペルコはアムステルダムでのIOC総会に報告することができた。

IOCの常任参加資格委員会もこの提案を受け取っていて、ヒュー・ウエアーの指導の下にこの案に対する報告を書き上げていた。これらの報告に基づいた提案を理事会に送付することが決定された。理事会はオランダのIOC副会長、ファン・カルネンビークからの1970年10月の更なる提案も検討した。

新しい規則が施行される前に、IOCと国際競技連盟の代表が議論した。

¹² 原注:フランスの新聞“Le Miroir des Sports”がIOCとその会長をアマチュアリズムについての偽善で非難した時、ブランデーは名誉毀損で訴えた。フランスの法廷は彼を支持し、被告に罰金を科してブランデーには象徴的な損害賠償金として1フランスフランを与えた。

ブランデー自身は、IOC 委員が郵送によって投票する前に、あまりにリベラルだと彼が考えたほんの幾つかの点を修正した。

この新しいテキストは 1971 年 4 月 5 日有効となった。

この新しい規則は何も基本的な変更を含んでいなかった。その条文はアマチュアではなく、選手についてのみ述べていた。選手は伝統的なオリンピック精神とオリンピックの倫理を尊敬しなければならない、スポーツを二次的な活動として行い、そのことによって報酬を受け取ってはならなかった。

選手をトレーニングすることによる収入は認められなかったが、初心者を教えるスポーツ教師は報酬を受け取れることが明記された。

これまでの版と違って規則についての公式の解釈が詳細に述べられていた。

過去数年の経験に照らして、トレーニングキャンプ、保険、奨学金、賞品の問題について個別に述べられていた。

収入の損失に対する補償は、例外的なケースについて許されていた。

“ノンアマチュア”と“セミプロ”の定義の中から、スポーツでの好成績の結果、国、教育機関、会社等、にサポートされている選手たちははっきりと除かれていた。

この規則の一つの項目はドーピングについて記述しており、ドーピングテストを拒否した選手、あるいはドーピング検査で違反を発見された選手は、オリンピック大会参加を禁じられると規定されていた。

エクゼター侯爵はこの新しい規則に、IOC により大きな自由裁量の余地を与える例外を許す条文¹³を付け加えることを勧告した。この勧告は IOC 委員の間で大幅な賛同を得た。

この新しい規則が発表されるやいなや、これに対する最初の批判の声が IOC 自体の中から起こった。

ブルガリアの委員、ウラジミール・ストイチェフ将軍は、自分は新しい規則 26 に対し、会長と理事会に対する尊敬から賛成票を投じたが、これは非現実的であり、オリンピックムーブメント創始以来スポーツに起こっている基本的な変化を考慮に入れていない、と考えると述べた。

参加資格委員会もまた批判的であった。委員会は“規則の価値そして/あるいは言葉使い”に疑問を呈して、改良された版を作るために研究委員会を作ることを提案した。

¹³ 原注: “選手がその競技から利益或いは生計を得てはならないという基本原則を犯していない限りにおいて、IOC はその競技或いは個人に対してこれらの規則の除外措置をとる権利を留保する。そしてこの権利はミュンヘン会議まで理事会に付託される”

ひとたび新しい規則が施行されると、参加資格委員会は“強制/事実摘発委員会”となり、IOC 会長の偽アマチュアにたいする戦いをサポートすることになった。

この委員会の最初の標的は、ウインタースポーツ、とりわけアルペンスキーであった。

ブランデーはアムステルダムでのオープニングスピーチで、アルペンスキーはすべての統制を逃れており、近代オリンピック大会がその古代のモデルと同じ道を歩むことを防ぐためには、厳しい注目を浴びる方法を取らねばならないと述べた。

この種の注目を集める方法によって狙い撃ちされた最初の人物は、オーストリアのスキーマー、カール・シュランツであった。

参加資格委員会は 1972 年東京で行はれた理事会に以下の勧告をする報告書を提出した：

「ここ数年の、カール・シュランツの国際アルペンスキー競技場での活動と影響、そして自分の名前と写真の広告使用を許している態度に鑑み、彼は 1972 年第 11 回オリンピック札幌冬季大会への参加資格なしと宣言する。」

この報告書は、オーストリア NOC と国際スキー連盟（FIS）に対しても、彼らの立場を明確にするよう勧告していた。

1972 年、札幌の IOC 総会での長い議論の末、28 人の IOC 委員が参加資格委員会の提案に賛成票を投じた。反対は 14 人であった。

オーストリア NOC の抗議もむなしく；カール・シュランツは大会参加を禁じられた。

オーストリアスキー連盟の理事会は、カール・シュランツの禁止が解かれない限り、オーストリアスキーチーム全体の引き上げと、選手たちの参加の義務からの解放を決議した。

しかしカール・シュランツ自身は、記者会見でそのような行動は反対だと述べた。

そこで、連盟会長は、選手団に対して出していた引き上げ要請を取り消した。

シュランツの発言の機会を求める要請は、何人かの IOC 委員も提案していたのであったが、ブランデーによって、IOC は個人とは交渉しないという理由で拒否された。

帰国したシュランツはヒーローとして歓呼をあげた。何万もの人が通りに並んで彼を歓迎した。IOC 委員、モーリス・ヘルツォークとモハメッド・ムツァーリの恐れが現実のものとなった。シュランツを大会から追放することによって IOC は彼をヒーローにし、殉教者にしたのである。

シュランツのケースは、その時 IOC が直面しているジレンマを際立たせた。

IOC はその原則と規則の信頼性を維持するためには厳しい処置を取らなければならなかった。しかしすべての選手に対する規則の厳しい適用は大会開催そのものを危険に陥れたであろう。

カール・シュランツの排除は一罰百戒を意図したが、実際には、すでに長く社会的現実と相容れなくなっていた理想を守ろうとする最後の空しい試みであることを証明したにすぎなかった。

結局、論理的には二つの解決策しかなかった。参加資格を現代スポーツの変化した条件に合わすか、IOC 会長の過激な提言¹⁴に従って冬季大会そのものを廃止するか。

第二の解決策は疑いもなく夏の大会もまた終わることを意味したであろう。

オリンピックプログラムのほとんどの競技はもはや、今や 85 歳になった IOC 会長が思い描きたいと思ったような“純粋な、清潔な、偽りのない”ものではなかったのである。

2.4.6. ドーピングの禍

いろいろな刺激剤や強壮剤によって成績を上げようとする企てはスポーツ競技の歴史そのものと同じくらい古いものである。

この過程を我々は競技スポーツの“全体主義化”と呼んでもいいだろう。

これは 1950 年代以降、明白に証拠だてることができる。すなわち全ての可能な国や私的な力を動員して、国際的な成功を確保しようとする動きは、非合法的なものを含めあらゆる可能な手段に頼ろうとする誘惑を高めた。たえまなく増大する成績へのプレッシャーに耐えるために。

IOC はこの展開に反応せざるを得なかった。1960 年のサンフランシスコ IOC 総会で、ブランデーはある競技における、いわゆる“元気をつける薬”（硫酸塩覚せい剤）の使用に委員たちの注意を促した。彼は出席した委員たちに、この問題の深刻な性格を指摘し、自分たちの国でこの情報を伝えるよう要求した。

2、3 か月後に、この警告をいかに深刻に受け止めねばならないかが明らかになった。

1960 年ローマオリンピック大会の最初の決勝で、チーム 100 キロ自転車レースでデンマークのクヌート・エネマルク・ジェンセンは疲労困憊して自転車から落ちた。彼は数時間後に病院で死んだ。医者診断は興奮剤の使用を暗示するものであった。

この悲劇的な出来事のちょうど 1 年あと、1961 年のアテネ IOC 総会で、ブランデーはドーピングの問題により大きな注意とドーピング規則の違反に罰則を適用することを呼びかけた。

同じ総会で彼は“国際スポーツ医学連盟”（FIMS）の代表との論議を報告した。FIMS はスポーツの成績をもたらす条件について調査することを計画していた。

¹⁴ 原注:ブランデーはまたオリンピックプログラムからいくつかのチームスポーツを排除できればうれしく思ったであろう。彼の意見では、それらは金銭目当ての動機に汚染されており、国家間の過剰な敵対意識を挑発するのであった。

彼はこれらの研究者と接触することは興味深いことだと考えていた。

そこで IOC は、ニュージーランドのポリット博士を委員長にこのための医学委員会を造った。この委員会には日本の東龍太郎、ブラジルの J. フェレイラ・サントス、チェコスロバキアのヨーゼフ・グルッスが指名された。

1 年後ローザンヌの理事会で、ドーピングに対して決然たる戦いをすべきだと宣言された。この仕事はアーサー・ポリットによって率えられる医師のグループに加えて、パナマの IOC 委員、オーグスティン・ソーサに委託された。

1964 年、ドーピングのケースについての数多くの新聞記事に触発されて、スウェーデンの委員、ボー・エケルトはドーピング違反者の発見のために血液検査を導入することを提唱した。ポリットはドーピング委員会の報告が次の年に出るまで待つことを提案した。

その数か月後、東京の総会でドーピング委員会の委員長は IOC が以下の三つの決定をするよう提案した：

- “1) 薬物の使用を非難する公式の声明を発する。
- 2) 直接あるいは間接に薬物の使用を奨励したすべての NOC あるいは個人に対する処罰の規定を設ける。
- 3) 各 NOC が、選手に対し、いつでも検査を受ける準備をしておかなければならないと伝えるよう求める。そして参加申請書類に付け加える：‘私は薬物を使用していません。そして私はここに、必要な場合いかなる検査も受ける用意があることを宣言します’。”

しかしこのテキストは大方の賛成を得られなかったので、決議としては、もっと正確な表現の案が作られ、参加資格の規則に付け加えられるべきである、ということになった。

ドーピング問題は世間で大変な議論を呼んだが、IOC は最初、この問題に全面的に関わることを躊躇しているように見えた。ブランデーは、オリンピックの商業化と選手のプロ化に対する彼の聖戦に熱中していた。彼はたびたび選手の薬物使用を非難したが、ドーピングは彼の著作の中で非常にわずかな部分しか占めていない。

スポーツにおけるドーピングに対して最初に国が対策をとったのは、1962 年のオーストリア教育省であった。ドーピングした選手とそのクラブに厳しい罰を科する訓令の形をとっていた。オーストリアに他の国が続いた（ベルギー、フランス、イタリア）。そして 60 年代半ばにアンチドーピングの法律を施行した。

ユネスコとヨーロッパ評議会もこの問題に取り組んだ。ドーピングに対する効果的な行動の基礎として国際的な合意を達成するために、ヨーロッパ評議会の委員会は 1963 年にドーピングの定義を作り出した。

同じ年の1月、第1回ドーピングについてのヨーロッパ会議がフランスの湯治場ウリアージュで開かれた。ここでも定義によって問題を明確に把握する試みがなされた。

多くの国際競技連盟は、多かれ少なかれ国の政策と一致した厳しいアンチドーピング規則を定め、最初の検査を行ったが、IOCは最初、この問題について幾分控えめな態度を示していた。

1966年、アーサー・ポリットはドーピング委員会に、長く待たれていた報告書を提出し以下の方法を勧告した：

- “1. 国内オリンピック委員会はそのスポーツ医学組織を通じてこの問題について全般的な教育を奨励しなければならない。
2. 国内オリンピック委員会はオリンピック大会のエントリーホームに、一人一人の選手によってサインされた、彼あるいは彼女はドーピングをしたことはないし、これからもすることがないという声明を付け加えなければならない（これは自動的にテストと、必要と思われた場合に検査をする道を開くものである）。
3. 国際競技連盟はその競技を支配する規則や規定の中にドーピングの習慣をはっきりと禁ずる条項を含めなければならない。
4. IOC自身は：
 - a) ‘ドーピング’について強く非難する声明を出さなければならない。
 - b) オリンピック大会の間にドーピングについて違反していると判定されたNOCや個人に対して罰を科する権限を与えられなければならない。
 - c) 必要が起きた場合、大会の間に選手を検査しテストする適切な準備をしなければならない—この準備は大会の組織委員会の医学担当部門の監督の下にFIMSの役員の支援を受けて行われる—FIMSはIOCに承認された国際医学団体である。”

アーサー・ポリットはさらに興奮剤や刺激剤とみられる製品のリストを発表した。

この種のリストはドーピングの効果的なテストへの第一歩であった。

その時まで、IOCのドーピングの禁止は非常に一般的な形であって、効果的なテストの十分な基礎とすることができなかった。

テヘランでの第66回総会で、新しいIOCのエントリーホームに関連して、IOCはアーサー・ポリットによって提案されたドーピングテストを行うための公式の医学組織の設立を承認した。

同じ時にIOCは競技力を高めるためのアナボリックステロイドの使用について、初めて詳細な報告を受けた。委員たちはこの種の違反を証明することのむづかしさについて警告を受けたが、同時にこのタイプのドーピングに関してより信頼できるテスト方法の見通しについて報告を受けた。

ステロイドはすでに 50 年代半ばから使われていた。

力や回復力を必要とする種目において、このタイプのホルモン操作は爆発的な記録を出すことを助けた。

アーサー・ポリットが IOC から去ると、ベルギーの若い委員、プリンス・アレキサンドル・ド・メロードが医学委員会の委員長となった。

彼は大変なエネルギーで、ドーピングに対する戦いに献身し始めた。この委員会の長として、彼は今日もなお少しも衰えることない熱意をもって戦っている。

プリンス・メロードが医学委員会の委員長となってわずか 2 か月の後に、おそらく今世紀最も注目を浴びたドーピング事件の一つが起こった。

1967 年 7 月 13 日、ツールドフランスの第 13 ステージで悪名高いヴェントゥー山“自転車選手に恐ろしい犠牲を要求する暴君”を登っている間に、イギリスのトム・シンプソン選手は疲れ切って 2 度目の落車をした。彼を救おうとするすべての試みは空しかった。イギリスのチャンピオンはアヴィニオンの病院で亡くなった。解剖の結果はたぶんアンフェタミンの服用が彼の悲劇的な最後に関わったことを示していた。

新聞とテレビはこの事件に関する映像と記事を世界中に伝えた。

世間は警告を受け、ドーピングに対する戦いは一段と強化された。

1968 年のグルノーブルの総会で IOC 委員は、医学委員会からの提案に基づいて IOC 規則のドーピングについての文言を変えた。新しい版では、ドーピング違反と判明した選手あるいはテストを拒否した選手、そしてチームスポーツではその選手のチームメイトもオリンピック大会から追放されることになった。

グルノーブル冬季大会で禁止された薬物はテキストに付け加えられた。

そしてさらに全ての女子選手はセックスチェックを受けることが明記された。

1930 年代、そして第二次世界大戦の後、女子種目に参加したある選手たちの性についての噂が広まった。彼女たちの記録、そして体つきは女性らしさとされるものに少しも似ていなかった。いくつかのケースではこの疑いは確認された。

1936 年のこと、ブランデーは当時の IOC 会長、バイエ - ラツールに意見を述べたことがある。“いろいろな競技で、明らかに反対の性の特徴を示しているので、さまざまな女性（？）選手の参加資格に問題が起こっています”。彼は“オリンピック大会に参加する前に医学的なチェックを課せられるべきだ”と考えていた。

最初のセックスチェックが行われたのはそれから 30 年後であった。

1964 年、IAAF は国際競技に参加する女子選手は独立の医師によって婦人科検査を受けなければならない、と決議した。この検査は 1966 年、キングストンの英連邦大会とブダペストのヨーロッパ選手権で初めて実施された。

オリンピックでは第 10 回グルノーブル冬季大会でこれらの方法が適用されたが、システムティックなものと言うよりは実験的なものであった。

ブランデーは回状の中で、選手の医学テストを行うのは IOC の仕事ではないという考えを述べた。彼の意見では、これは IOC の規則に従って国際競技連盟と NOC がやるべきであった。ブランデーによれば、IOC 医学委員会の役割は純粋に顧問的なものであった。

プリンス・メロードはこの回状を医学委員会の能力に疑問を呈するものだと見た。

ブランデーはいかなる意味でも“医学委員会を攻撃”しようとしたものではないと釈明し、次のように続けた：

“もしメキシコでテストが行われるならば、それは医学委員会の監督のもとに、その定めた正式な手続きによって行われなければならない。しかしそれは当該国際競技連盟の書面による要求によって行われなければならない¹⁵。これはすでに私が言っているように国際オリンピック委員会の責任ではない。”

メキシコシティでは組織委員会がドーピングテストに必要な施設を提供した。

IOC 医学委員会委員長、プリンス・メロードの書面による要請で、国際競技連盟は自分たちの責任でドーピングテストを実施することができた。

メキシコシティでは、尿サンプルに加えて射撃選手から血液サンプルも採取され、血中アルコールのレベルが検査された。何人かの選手については競技能力を高めるためにホルモン操作をしている疑いがもたれた。

アナボリックステロイドの使用についてはそれを分析する処置がまだ十分に信頼が置けるものではなかったので、1968 年も、1972 年に至ってもテストは行えなかった。

ブランデーの後継者、ロード・キラニンはこの問題にブランデーより高い注意を払った。会長職についてからすぐ、彼は、ドーピングはオリンピックムーブメントにとって最大の問題のひとつであると言った。

¹⁵ 原注：下線はオリジナルテキストにあり。

2.4.7. 国際オリンピックアカデミー

ピエール・ド・クーベルタンは、体と心のトレーニングを通じての人類の道徳的向上を生涯の目標としていた。しかしオリンピック大会の復興で、彼はこの目的のわずかに一部を達成したに過ぎなかった。

自分の仕事の理論的基礎を強化し、拡張し、調査するために、彼は、オリンピックムーブメントの知的な価値と教育的大志を熟考するための場所として使える施設を必要だと思っていた。

1937 年、ベルリンの 1936 年オリンピック大会の途方もない壮大さに深い感銘を受けたピエール・ド・クーベルタンは、死の数か月前に一通の手紙をライヒススポーツ長官に書いた。そしてオリンピックスタディーズセンターを設立することを求めた。

“オリンピックスタディーズセンターは（ついでながら、それは必ずしもベルリンである必要はありません）、何よりも、私の仕事を維持し発展させ、私が恐れる逸脱から仕事を護ることに役立つでしょう。”

この申し出は、ドイツ政府の好意的な反応を得たがクーベルタンの生前には実現しなかった。

1938 年 2 月 9 日付の内務大臣、フリックの命により、国際オリンピック研究所（IOI）がベルリンに本部を置いて設立された。

フランスの IOC 委員、ピエトリの提案で、IOC はその公式ブレッティンを国際オリンピック研究所の発行する“オリムピッシェルントシャウ”と一体化することに同意した。

国際オリンピック研究所の所長はカール・ディエムが任命された。彼はクーベルタンの知的遺産を管理することをこの研究所の使命と考えた。

ディエムは 1938 年 3 月 26 日、クーベルタンの心臓を埋葬する式典に出席するためオリンピアに旅した。その機会に彼はまた、古代の競技場の遺跡を尋ねた。それは 1936 年 10 月にドイツ政府の援助によって発掘されたものである。

おそらくそこでの印象が、彼に古代オリンピアをよみがえらせるアイデアを吹き込んだのであろう。オリンピアにおける式典についての報告で彼は次のように書いている：

「良い季節に、他の国々からの若者が、若者のためのオリンピックアカデミーに招かれる。それは人里離れたオリンピアにあり、オリンピック大会がシンボルとして、また模範として仕える、心と体の調和、そして知識の強化に貢献するであろう。」

オリンピックアカデミーの計画を実現するために、ディエムはギリシャの援助に頼った。ギリシャの側に、彼はジャン・ケトセアス、当時のギリシャ NOC (HOC) の事務総長に、オリンピックの理想に対する情熱を分け持ち、彼の“オリンピック大学”の考えを熱心に支持する同志を見つけた。

HOC とギリシャ政府がこの計画を詳細に検討した後、ギリシャ国会は 1939 年春、オリンピックアカデミーの設立を決めた。

世界の若者のためのオリンピック教育の施設を造ろうとするすべての努力は、第2次世界大戦の勃発によって妨げられた。

大戦のすぐあと、ディエムは当時 IOC 副会長であったブランデーに連絡を取った。ディエムの意見では、この恐ろしい出来事の後、世界はかつてないほどオリンピックの原則を必要としていた。彼はオリンピックアカデミーをアメリカに設立することを提案した。

アメリカは世界の政治経済の指導的な力なのだからと。ブランデーがこの提案に何と答えたかは知られていない。

ジャン・ケトセアスが 1946 年 IOC 委員となって、ギリシャのオリンピックアカデミーの計画は息を吹き返した。1947 年のストックホルム総会で、彼は IOC が“オリンピック学院”をギリシャに造るよう提案した。

2 年後、ローマの総会で IOC は全会一致で、1948 年にケトセアスとディエムによって用意された覚書に賛成し、ギリシャにおけるオリンピックアカデミーの設立について 1949 年 1 月の IOC プレセッションに公開した。

このアカデミーの最初のセッションは 1951 年に計画されていた。しかしたった 4 か国しか参加に同意しなかったのがキャンセルされた。世界中の若者をオリンピアに集めてアカデミックなイベントを開こうという計画も失敗した。

オリンピックアカデミーの第1回セッションは開かれるまでに 12 年が経過した。

その時は、24 か国からの参加者が 2 週間キャンプして、有名なスポーツ教育者の講義を聴き、ディスカッションし、経験を交換し、遺跡を訪れ、スポーツを行った。

第1回のセッションは実験的なコースとして計画されていたが、非常に上手くいった。しかし IOA が生き残るかどうかはまだ分らなかった。何よりも資金の問題がまだクリアされていなかった。

第1回のセッションの費用はドイツ連邦政府によって負担された。しかしこれは長く続けられることではなかった。

この問題は結局、1961 年 10 月ギリシャオリンピック委員会の暫定的な条文によって解決された。それによれば参加者の費用はそれぞれの NOC が負担し、講師の費用は HOC が負担することになっていた。この条文は IOA の学院としての設立を保証し、そのあと何年もの間、そのコースはいろんなテーマで規則的に開催された。

1966年のローマの総会でIOCは、ジョージW.フォン・ハノーヴァーをIOA会長に選んだ。この地位はIOC憲章には定められていないものであったが、こうすることによってIOAの学院の重要性を示したのであった。

IOA会長と何回も会った後ブランデーは、1967年、IOAのための特別委員会を作ったと発表した。この委員会は何よりもIOAの知的水準を高めるためにあった。そして内容、組織、財政の問題を取り上げ、IOCとの協力を進めるためにあった。

この委員会は公式には“国際オリンピックアカデミーのための委員会”と称された。

テヘランでの1967年IOC総会で、この委員会はIOCの正式構成要素として第1回目の会議を持った。

1966年以来、有名なオリンピックの優勝者が講師と共に総会に招かれた。

1967年には、住居棟、水泳プール、球技のコートを備えた最初の建設工事が完成した。

以前は、参加者はテントにキャンプしなければならなかった。今や本格的な宿舎に移動できたのである。

1961年の最初のセッションからブランデーの会長職の終わりまでに、60の国々から千人以上の学生がオリンピアに集った。

およそ200人の有名な研究者とIOC委員が幅広い分野の講義と議論のテーマを提供した。

オリンピック大会とスポーツの歴史、オリンピズム、オリンピックムーブメント、スポーツ教育、トレーニングと運動力学の問題、スポーツに関する哲学的問題、スポーツ心理学そしてスポーツサービス業務におけるコンピューターサイエンスなどであった。

アマチュア問題や競技力強化のいろいろな側面などのような、時事的なテーマのディスカッションもカリキュラムのなかで大きな部分を占めていた。

この議論の結果はIOCに伝えられ、その決定の参考とされた。

多くの学生にとってオリンピアのIOCセッションの参加は、人間的、国際的友情の面から、また知的啓発の面から忘れ難い経験となった。

多くの者にとって、IOA参加は、彼らが自分自身の国でオリンピックムーブメントに献身する出発点となっているのである。

2.5. オリンピック大会の組織と実施

2.5.1. オリンピック大会の発展

IOCの大切な仕事のうちに、規則的なオリンピック大会の開催、主催都市の選定、そして関連規則や規定の施行がある。

すべての大会の組織委員会は IOC に対して責任がある。

アベリー・ブランデー会長の任期の間に、大会のますますの成功は、それ自体、問題をはらむと見られるようになってきていた。

オリンピックのモットー“より早く、より高く、より強く”そのままに、大会の主催者はオリンピアードごとに、前者を凌ごうと競ってきた。競技施設の建設費、そして大会を組織する費用は、ロケットのように急上昇していた。

競技種目は増え、参加選手と参加国の数は膨張し続けた。

オリンピック大会も、第2次世界大戦の後スポーツ界をとらえたグローバリゼーションの一般的傾向の例外ではなかった。1956年のメルボルンで大会は初めて南半球で催され、そのあと2つ目のオリンピアードに、東アジアの東京が続いた。

1968年大会にメキシコシティを選ぶに当たって、IOCは初めて新興国にその開催を委ねた。

IOCは定期的に、大会の巨大化を防ぐ方法を論議した。特別委員会が設置され、競技プログラムの縮小、参加選手と役員数を減らす方法について検討した。

IOC会長に就任してすぐ、ブランデーは大会のプログラムを縮小するためのいろいろな提案をまとめた回状を起草した：

- “1. いくつかの選択競技の全面削除
2. いくつかの競技の冬季大会への移動
3. チームスポーツの全廃（古代オリンピック大会では競技は個人のものであった。そして1896年にオリンピックが復活したときにもそうであった。）
4. 地域大会をオリンピック大会の予選とする
5. オリンピック大会の始まる前に、世界各地で競技会を開催
6. 各競技に、選手がクリアしなければならない参加基準を設ける
7. すべての女性種目を廃止（女性は古代のように、彼女ら自身の大会を持てるだろう。）
8. すべての個人種目のエントリー数を減らす。”

提案のNo.7は、ある人々によって、これはブランデー自身が発案したもので、彼の女性嫌いの証拠である、と誤って解釈された。

ブランデーは、スポーツにおける男女同権の要求を全面的に支持しているわけではなかったが、原則の問題として、女性のオリンピック大会参加には賛成だった。

砲丸投げや円盤投げの女子選手の過度に筋肉のついた体や、中長距離女子選手の苦悶する顔は、彼の女性らしさの観念にあうものではなかったが。

彼は“特に女性的でない”あるいは“普通の女性にとってあまりにきつい”種目はオリンピックから除きたいと願っていた。

1953年のメキシコシティの総会で、IOCは女性の競技の維持を全会一致で決めた。

しかしブランデーの提案によって“女子選手は女性にとって適切な種目にのみ参加が許される”という制限がついた。

オリンピック競技の女性参加反対の主唱者の一人であったフランスの委員、フランソア・ピエトリは、メキシコシティには出席していなかった。

彼は、メキシコ総会の前に、IOC会長に対し、彼の意見では女性の排除が大会のプログラムを縮小する唯一の“論理的かつ効果的な”手段であるという手紙を書いていた。

ブランデー会長の任期の20年の間、女性の参加選手の割合は小さなものであった。しかし1960年以降、この割合は着実に伸びていった。

ヘルシンキのオリンピック大会では女性の参加は10.5%であったが、1972年のミュンヘン大会では17.7%に達した。

冬季大会の女性参加も、同じ時期に14.9%から19.2%と似たような傾向を示した。

女性選手の競技の数はヘルシンキからミュンヘンの間にほとんど倍増(25から43)した。

しかし全体的割合では女性は17%弱から22%に増えただけであった。

1972年の札幌冬季大会では、ヘルシンキでは6だったのに対し13の女子種目が行われた。男性の競技に比べるとこれは27%から37%への増加であった。

この数字は女性の参加の明らかな進歩を反映するものであるが、オリンピックスポーツは、他の分野と同じように、男性の支配するものであり、女性の役割は偏見とタブーの歴史的な重圧によって妨げられていた。

参加選手の数減らすためにブランデーは幾つかのスポーツ、特にチームスポーツ、の廃止を提案した。彼は、古代オリンピック大会にはチームスポーツがなかったこと、そしてクーベルタンもチームスポーツはあまりにしばしば過度の愛国主義を刺激するとして反対した、と主張した。

しかしブランデーのチームスポーツに対する反感の主な理由は、そのますます強まるプロフェッショナリズムであった。これは彼の冬季大会に対する反対を決定した一つの要素であった。

しかし彼の意見は、IOCの中でほとんど同意を得られなかった。多くのIOC委員はオリンピックプログラムの中にチームスポーツを維持することに賛成であることが分かった。

大会のますます巨大化する傾向を押しとどめようとするIOCのすべての努力にもかかわらず、ミュンヘン大会まで、実際問題として大きな変化はなかった。

1956 年と 1964 年の夏の大会の会場のヨーロッパとアメリカから隔たる遠い距離と、いくつかの国のボイコットが参加選手の数の増加をある程度チェックしたにすぎなかった。

2.5.2. 第16回オリンピック大会

2.5.2.1. 1956年コルチナダンペッツォ冬季大会

第6回冬季大会は、1944年にコルチナダンペッツォで開かれるはずであった。しかしドロミテ山中の牧歌的なこの村は、12年待たなければならなかった。

1949年に、コルチナダンペッツォは1939年と同じように、強敵モントリオールをやぶった。今回は1956年のオリンピック冬季大会を主催する争いであった。

初めてソビエトの選手が冬季大会に参加した。そこで彼らは直ちに成功を収めた。

例えば、アイスホッケーのトーナメントで、彼らは当然最有力と見られていたカナダからオリンピックのタイトルをもぎ取った。

117名のソビエト選手団は最大のチームであったばかりではなく、初登場でオーストリアや伝統的な冬の競技のスカンジナビア諸国よりも多くのメダルを獲得した。

この大会で最も卓越した選手の一人は、若いオーストリア人、トニー・ザイラーであった。彼はアルペンスキーでオリンピックの三冠王の荣誉に輝いた。

輝く青空のもと、素晴らしい山を背景に、完璧な絵葉書のような場所で行われたこの大会は、その完全な組織と楽しい雰囲気、ジャーナリストたちの賞賛を浴びた。

2.5.2.2. 1956年メルボルンオリンピック大会

1949年、ローマにおける第44回IOC総会で、1956年の第16回オリンピック大会の会場も選ばれた。投票の結果は大変接近したものであった。南半球の二つの都市の間の決戦は、たった一票の差でメルボルンがブエノスアイレスを制した。

“IOCは第16回オリンピック大会をメルボルンに与えるという大きな誤りを犯した。メルボルンはまったく大会を組織する能力がない” 大会開催の18ヵ月前にオーストラリアを訪れたIOC会長は毒づいた。

第五の大陸での大会の開催は、誠に悪い巡り合わせであった。

その地理的な条件による困難（遠い距離、大会のタイミング）は経済的政治的問題によってさらに大きくなった。

大会は、外国から来る馬は6ヵ月間検疫所で過ごさなければならないというオーストラリアの法律のために、ほとんど破たんしかけた。開催地に選ばれるチャンスを危険にさらさないために、オーストラリア人はこの障害に最後の最後まで言及しなかった。

1953 年、IOC は大会を別の場所に移すか、その代わりに馬術競技をやめるか、あるいは馬術競技だけを第 2 の場所に移すか、という決断を迫られた。

メキシコシティでの総会で、IOC 委員は厳しい議論の末、第 3 の解決策を選んだ。

これはほとんど規則の変更であった。当時の規則では、大会は一つの都市に託されなければならない。この決定は次の年、アテネの総会で確認され、そこでストックホルムが馬術競技の会場に選ばれた。

暗い予言にもかかわらず、メルボルン大会は組織の面では成功であった。ストックホルムの馬術競技も 44 年前第五回近代オリンピックが開催されたまさにそのスタジアムで催され成功した。

大会組織化の問題よりもはるかに大きな脅威は、二つの深刻な国際政治の危機であった。それは大会開会のわずか数日前に血なまぐさい頂点に達した。ハンガリーでは、政府のスターリン主義的統治に対する人々の不満が沸騰点に達していた。

1956 年 10 月 23 日、ポーランドを支持し、政治のより民主化を求めるブダペストでのデモを、力で抑えようとした警察の行為は自然発生的な人民蜂起に火をつけた。

民衆に人気のあった政治家、イムレ・ナジは反乱の先頭に立ち、ソビエト軍隊の撤退とハンガリーの中立を求めた。ソビエト政府はこれに血の弾圧をもって応えた。11 月のはじめ、5000 台のソビエト戦車がブダペストに向かった。

ブダペストは、反乱者とハンガリー軍隊の一部が防衛しようとしたが、数千人もの犠牲者を出した激しい市街戦のすえ陥落した。11 月 15 日、ハンガリー人はソビエトの強大な力の前に、ついに降伏せざるを得なかった。

クレムリンはその軍隊がブダペストに進撃しているとき、世界の目がもう一つの危機の地域に釘付けになっている事実につけこんだ：7 月 26 日エジプトの国家元首ナセルはスエズ運河の国有化を宣言したのである。しかし湾岸からの石油に依存するイギリスとフランスは、この重要な水路における自分たちの存在を守る決意をした。

スエズ運河の国際管理を目指す話し合いの決裂に続いて、イスラエル軍が 10 月 29 日シナイに侵攻した。これに続き、イギリスとフランスの空軍が運河に隣接する町を爆撃した。

ワシントンのホワイトハウスはこの力の使用を非難し、クレムリンは核兵器を使うという脅しさえかけた。

国際的圧力の下に、イギリスとフランスは結局、エジプトに対する攻撃をやめた。

この二つの危機の結果、台湾の参加に抗議した中華人民共和国に加えて、六つの国がメルボルン大会をボイコットした。エジプト、イラク、レバノンがイギリス、フランス、イスラエルの“侵略者たち”と競技することを望まず参加しなかった。

オランダ、スイス、スペインは、ソビエトのハンガリー侵入に抗議してチームを引き上げた。

スイスの、戦争をしている国の選手をオリンピック大会に参加できないようにオリンピック憲章を改正しようとする動議は拒否された。

メルボルンで行われた総会で、IOC 委員はボイコットの動きをオリンピックの理想と相いれないものとして非難し、次のような記者発表をした。それは古代ギリシャの“パックスオリンピカ”の考え方をいささか理想化したものであった。

“国際オリンピック委員会の第53回総会は、1956年11月のメルボルンにおける最初の会議において、古代ギリシャではほとんど1200年にわたってオリンピック大会の間エケテイリア¹⁶*（世界平和）が宣言されていた事実、を指摘する。

この理想の普及はわれわれの目的の一つである。IOCは89の加盟国のオリンピックムーブメントを支持する何千万もの人々を代表して、この事実に世界が注目することを願うものである。そしてまた、60以上の国々、そのうちのいくつかは外交関係さえ持っていないのであるが、それらの国々からの選手、役員、観客の間には善意の友好的な雰囲気があふれていたこと、そして彼らが、第16回オリンピック大会のここオーストラリアの大会において、フェアプレーのアマチュアスポーツのルールを守ったことに、世界の注意をひきたいと願うものである。”

祖国での軍事衝突にも関わらず、ハンガリーのオリンピックチームはIOC事務局の助けによって、チェコスロバキア経由でオーストラリアへやって来る事ができた。

大会の間にいくつもの抗議行動が、ハンガリー人亡命者たちによって行われた。

水球の試合では、いわゆる平和な競技が選手たちの間で決定的に不愉快な様相を帯びた。

ハンガリーとの試合でソビエトの選手たちは、プールの中での試合がますます乱暴になるにつれて、観客からの非難の声を浴びた。

しかし閉会式で、これらすべてのひどいシーンは忘れられた。

いつものように国別ではなく、すべての人が混ざり合い、選手たちは国旗の後ろで歌い踊りながら一つの集団となってスタジアムへ入ってきた。

こうして若い選手たちは、大きな政治的危機に見舞われている世界に対して、オリンピックの平和の理想の、目覚しいデモンストレーションをして見せたのである。

¹⁶ 原注:エケテイリアはオリンピックの間、単に、宗教的な場所と競技場、そしてそこへ行き帰りする選手と観客の旅の安全を保証するものであった。

2.5.3. 第17回オリンピックの大会

2.5.3.1. 1960年スコobarレー冬季大会

1955年に、アレキサンダー・カッシングという人物に率いられた私企業のビジネスマンの一団が、スコobarレーに冬季大会を招致しようと名乗りをあげた。

スコobarレーはアメリカのシエラネバダの小さな地域で、IOC 会長ブランデーの尊大な言い方によれば、村としてさえ登録されておらず、スポーツ施設といえるものは一切ないのであった。

その地域のインフラの欠如にも関わらず、IOC 委員たちは1955年のパリの総会で、カッシングの開拓者魂に説得されて、スコobarレーを第8回オリンピック冬季大会の会場に選んだ。投票の結果は大変に接近したもので、アメリカの会場（32）と競争相手のオーストリアのインスブルック（30）はたった2票差であった。

ブランデーの組織団の“素人っぽさ”についての懸念は、カッシングが大会組織の実権をカリフォルニア州知事に渡すに及んで薄められた。知事は新しいオリンピック組織委員会を、経験豊かな金持ちの経営者たちを集めて作った。

1956年4月3日、ナイト知事は400万ドルを冬季大会に充てることを含んだ予算にサインした。こうして大会の財政面は保証されたのである。

結局のところ、ウォルト・ディズニー自身の指揮する式典で始まった第8回冬季大会は、大きな成功を収めた。選手たちはお互いにごく狭い範囲に集まり、居心地の良い雰囲気の中で、輸送や通信のために煩わされることなく過ごした。

ボブスレー種目はプログラムから除かれた。主催者たちがたった数か国の参加者のために75万ドルのボブスレーコースを作ることを拒否したためである。

1959年、ミュンヘンのIOC 総会で、スイスのIOC 委員、アルバート・メイヤーは国際ボブ連盟を代表して今や11カ国がこの種目に参加したいと言っているのでボブスレー種目をレイクプラシッドで開催するようにと提案した。この提案は却下された。

しかしここではプログラムに幾つか新しい種目が加わった：女子のスピードスケート、これは1932年のレイクプラシッドでデモンストレーション種目として行われたことがあった。そして男子のバイアスロンである。

2.5.3.2. 1960年ローマオリンピック大会

1908年の大会は、最初ローマで行われるはずであった。

クーベルタンはこの大会に大きな希望を抱いていた：“今や、我々に古典的なオリンピックと与えてくれるのはローマの人たちである。彼らは古代の仲間たちの栄光のために、スポーツの神殿を再び開くのだ。”

クーベルタンにとって、永遠の都ローマが“芸術的なオリンピアード”の舞台となるのは全く当然のことであっただろう。しかし、多くの困難があつてローマは大会の開催をロンドンに譲らなければならなかった。

1955 年、再びチャンスが巡ってきた。24 票のローザンヌに対し 35 票で、IOC は 1960 年オリンピック大会をイタリアの首都に託したのである。

半世紀前のクーベルタンの予測は正しかった。

ティベレ河の街におけるオリンピック競技は、豊かな歴史的遺産と共にあつた。スポーツと文化の結びつきが前面にでた。レスリング競技はバシリカ・デ・マッセンチオの印象深い廃墟で行われた一方、巨大なカラカラ浴場の遺跡は体操競技の舞台を提供した。

マラソンはキャピトルからコロッセウムを過ぎ、アッピア街道を走ってコンスタンチヌス凱旋門にゴールした。

大会のために素晴らしい新しい施設がとくにこの大会のために造られた。たとえば大理石のオリンピックスタジアムは素晴らしい建築物であり、古代と現代を橋渡しするものであつた。

エチオピア国民アベベ・ビキラは、コンスタンチヌス凱旋門の下のマラソンゴールラインに最初にやってきた。25 年前、ファシスト独裁者ムッソリーニは、この同じ場所の演壇からイタリア国民に対し、エチオピアとの戦争を呼びかけたのであつた。

この勝利をビキラは裸足で勝ちとつたのであつたが、これはアフリカのスポーツへの目覚めの象徴でもあつた。アフリカ大陸は植民地主義のくびきを振り払ったばかりであつた。

この大会で最も卓越した選手のひとりにアメリカの若い女性ウイルマ・ルドルフがいた。彼女は素晴らしいエレガントなスタイルで 100m、200m、400m リレーで 3 つの金メダルを取った。

オリンピック大会の一週間あと、サー・ルートヴィッヒ・グットマンによって創設された障害者のためのストックマンデヴィル大会が、ローマで開催された。

この大会は車椅子の選手たちだけのためのものであつたが、第 1 回パラリンピック大会と考えられている。

2.5.4. 第18回オリンピアードの大会

2.5.4.1. 1964年インスブルック冬季大会

インスブルックが第 8 回オリンピック冬季大会の開催権をわずか 2 票差でスコーバレーにさらわれたとき、このチロルの町の市長は直ちに次の大会に立候補することを宣言した。この決断は 4 週間後に町の評議会によって承認された。

1959年のミュンヘンのIOC総会で、国際競技連盟が初めて候補都市のプレゼンテーションに臨席し意見を述べるよう招待された。

この時インスブルックは成功した。第9回オリンピック冬季大会の開催都市の投票では、カルガリー（9票）、ラハティ（0票）に対し、はっきりしたリード（49票）で勝利した。

ベルギゼルのジャンプ競技場での開会式では、初めての試みが行われた：

オリンピアからインスブルックへ飛行機で運ばれたオリンピック聖火は、スキーヤーによって会場に運ばれた。この時以来、オリンピック聖火は冬季大会においても式典の一部となった。

インスブルック大会は、危うくフェーン現象の犠牲になるところであった。

しかしオーストリア軍隊と地元の消防団が骨身を惜しまず会場に雪を運んだおかげで、雪不足にもかかわらず競技は順調に行われた。

スコーパーレーにおけるやむを得ぬ休止のあと、ボブスレー競技がプログラムに帰ってきた。プログラムに新しく付け加えられたのはリュージュ競技、ノルディックスキー5キロレース、そして70メートル級ジャンプである。

アルペンスキーでは、フランスのクリスチヌ、マリエール・ゴアシェル姉妹が大活躍した。彼女たちは大回転と回転で金、銀メダルを独占した。

またソビエトの女子がノルディックスキーとスピードスケートで目覚ましい活躍をした。ソビエトのスケーター、リディア・スコブリコーワは4つもの金メダルを取った。

インスブルック以降、冬季大会さえ巨大化問題の例外ではなくなった。35カ国からの1000人以上の選手が34の競技に参加した。

冬季大会への関心が高まり、テレビジョンネットワークは放送権のために高額（US\$ 936,667）を支払うようになった。

IOC会長は冬季大会を快く思っていなかったが、インスブルックの大会の組織に感銘を受けたことを認め、閉会式で次のように述べた。“インスブルック大会は、人間の意志がどれだけのことを成し遂げられるかを示した。”

2.5.4.2. 1964年オリンピック東京大会

1935年のオスロでのIOC総会で、東京は1940年大会の開催地に選ばれていた。

しかし日中戦争の勃発のあと、東京はこの大会の開催をヘルシンキに譲らざるを得なかった。この大会は結局開かれなかった。

1959年、日本の首都は再びオリンピック大会開催への競争に加わった。

投票ははっきりと東京を支持した。競争相手はデトロイト（10 票）、ウィーン（9 票）、ブラッセル（5 票）という全くの低調であった。

日本はアジアでの最初のオリンピック大会に惜しげもなく金をつぎ込んだ。

この日の出の工業国は、大会のために 30 億ドルを費やした。これは国の名誉の問題と考えられたのである。

多くの新しい、そして建築上印象的なスポーツ施設が作り出された。その中に新しい水泳場があったが、建築家丹下健三はこのために多くの国際賞を得た。IOC は彼にオリンピックディプロマを授与した。

ガネフォ大会の出現によって起こったオリンピックムーブメント分裂の危機は今や消滅した。

IOC がガネフォ大会に参加した選手は東京大会に参加資格がないと宣言したとき、インドネシアと北朝鮮の選手で該当したのはほんの一握りであったが、両国はチーム全体を東京から引き揚げた。さらに二つの国が政治的理由でこの大会に参加しなかった。中華人民共和国と南アフリカ共和国である。

対照的に、つい最近独立を獲得したばかりの 17 のアフリカの国がオリンピック大会にデビューした。

大会の開会式には、8 万人以上の観客がスタジアムに詰めかけ、何百万人もの人々がテレビで、象徴的意味を伴った感動的な式典を見ることができた。

このとき、テレビの衛星中継もまた、オリンピックデビューを果たしたのであった。

19 歳の学生、坂井義則がスタジアムの聖火台にオリンピック聖火を灯した。坂井は、最初の原子爆弾が広島に落とされた日に広島で生まれたのである。

5 機のジェット戦闘機がスタジアムの上の青空に五輪のマークを描いた。

競技自体は高い水準のもので、多くの記録が破られた。

ニュージーランドのピーター・スネルはローマでの 800m のオリンピック優勝を繰り返して、1500m でも勝利した。エジプトのアベベ・ビキラは再びマラソンで優勝した。しかし今度は靴を履いていた。

優れたソビエトの体操選手、ラリサ・ラチニナは彼女の 9 つ目の金メダルを東京で獲得した。同じ種目、床運動では 3 回連続（1956 年、1960 年、1964 年）の金メダルであった。

水泳選手ではアメリカのドナルド・ショランダーとオーストラリアのドーン・フレーザーがメダルをたくさん集めた。

日本の NOC によって寄贈された IOC の第 1 回フェアプレートロフィーは、二人のスウェーデン人、ラルス・グンナー・カールとスティグ・レンナルト・カールに与えられた。

彼らはヨットレースで、転覆した 2 人のライバルの救助のために、その回のレースの勝利のチャンスを犠牲にしたのである。

2.5.5. 第19回オリンピック大会

2.5.5.1. 1968年グルノーブルオリンピック冬季大会

バーデンバーデンでの IOC 総会の議題がすでにあまりに多くなっていたので、第 10 回オリンピック冬季大会の主催都市の選挙は 1964 年の次の総会に先送りされた。

候補都市はカルガリー（カナダ）、グルノーブル（フランス）、レイクプラシッド（アメリカ）、ラハティ（フィンランド）、オスロ（ノルウェー）そして札幌（日本）であった。3 回目の投票で、グルノーブルがカルガリーに 27 票対 24 票で勝った。

ドーフィネ州の州都はわずか海拔 200m で、スケート競技しか開催できなかった。

ほかの競技は周りの村々やスキーリゾートに分散せざるを得なかった。そのため輸送の問題が起こった。競技場を隔てる長い距離がオリンピックの雰囲気には障害となった。多くの選手たちはオリンピック選手村に入るよりも自分たちの競技場のそばに滞在することを好んだからである。

この大会で卓越した選手は地元の英雄、ジャン・クロード・キリーであった。彼はアルペン種目で 3 つの金メダルを取り、1960 年のトニー・ザイラーに匹敵する成績を上げた。

彼のチームメイト達もまた注目を浴びた。特にマリエール・ゴアシェルは回転で金メダルをさらった。

なによりもこの大会は商業主義化の進展によって特徴づけられた。

これはアルペンスキーで特に顕著で、IOC 会長を強くいらだたせた。ブランデーはこの競技をオリンピックのプログラムから排除したいと思ったであろう。彼にしてみれば、それはもうビジネスに墮落していたのだ。

2.5.5.2. 1968年メキシコシティオリンピック大会

1963 年のバーデンバーデンでの総会で、IOC は第 19 回オリンピック大会を圧倒的多数でメキシコシティに託した。その結果初めて、工業国に数えられていない国でオリンピック大会が行われることになった。

この決定がされるやいなや、多くの人々が海拔 2200m のメキシコの首都で競技が行われることに懸念を示した。この条件の下ではスポーツの偉大なパフォーマンスは期待できないし、選手の健康を損ねる恐れがあるというのであった。

この問題についての IOC 内部での議論の際に、ブランデーはオリンピック大会は地球的な催しであり、いかなる都市も地理的な条件にかかわらず大会を開催する可能性を持たねばならないのだと指摘した。

医学的研究によれば、この高度のために心配される深刻な危険はなかった。競技の成績が平地で達成されたものと違わざるを得ないだろうということは認めつつも、ブランデーは“オリンピック大会は記録を破るためにあるのではない”と主張した。

こうした主として生理学的な困難に加えて、IOC とこの大会の主催者は政治的な問題に取り組まねばならなかった。

1968 年オリンピック大会は世界的な政治危機の時期に遭遇した：ベトナムでは戦闘がかつてないほど激しくなっており、中東ではイスラエルと周辺のアラブ諸国との緊張が劇的に高まっていた。そしてワルシャワ機構軍のチェコスロバキアへの侵入によって、冷戦は新しい頂点に達していた。

世界中に沸き起こった学生の反乱は、メキシコシティも例外とはしなかった。そこで暴力と血なまぐさい衝突が大会開会の数日前に起こった。

アメリカのアフリカ系アメリカ人の抗議行動は、何人かの選手によって大会の表彰台にさえ持ち込まれた。

アフリカ諸国のボイコットの脅しのために、アパルトヘイト政策の南アフリカ共和国は大会から排除されていた。

こうしたすべての緊張にもかかわらず、大会は非常にスムーズに行われた。

ラテンビートに乗った色彩豊かな開会式で、聖火リレーの最後の走者としてオリンピック聖火を灯す名誉は史上初めて女子選手に与えられた。

競技自体は水準の高いものであった。多くの新記録が作られた。特にその高度のおかげで陸上のスプリント種目において。

ボブ・ビーモンの幅跳びにおける驚くべき 8.90m、そしてかれのチームメイト、リー・エバンスの 400m で達成された 43.8 秒という信じがたい記録は、その後 20 年以上世界記録として破られることはなかった。

中長距離ではアフリカ人が出場した種目の全部に勝った。将来彼らが一大勢力となることの前兆であった。

アメリカの走り高跳び選手、リック・フォスベリはこの種目に革命を起こした。彼はバーに背中を向けて飛び越えた。彼は“フォスベリ跳び”〈背面跳び〉を発明し、それによって金メダルを獲得した。

もう一人の陸上競技のメンバー、アルフレッド・オーターは円盤投げで、4回連続の金メダルを獲得してセンセーションを巻き起こした。

この大会の最も成功した女子選手で大衆のアイドルとなったのは、チェコスロバキアの体操選手、ヴェラ・チャフラフスカであった。彼女は4つの金メダルをつらい試練を受けた祖国へ持ち帰った。

2.5.6. 第20回オリンピック大会

2.5.6.1. 1972年札幌オリンピック冬季大会

札幌はもともと1940年に冬季大会を開催するはずであった。しかしそれは前に述べた理由でキャンセルされた。1964年に日本の北海道の首都は2度目の立候補をした。しかしこの時勝ったのはフランスのグルノーブルであった。

しかし札幌はわずか2年待てばよかった。1966年のローマでの第65回IOC総会で札幌が勝った。1972年の冬季大会の開催を争った相手はバンフ（カナダ）、ソルトレイクシティ（アメリカ）、そしてラファティ（フィンランド）であった。

大会は大金を費やして準備されたが、開会劈頭ショックを受けた：IOCがオーストリアのスキーマイドル、カール・シュランツをアマチュア規則に違反したという理由で排除することを決定したのである。

彼のチームメイトは明らかにこの打撃によって調子を狂わされた。彼らの成績は失望すべきものでとくにアルペンスキーはひどかった。

ここで彼らの隣国スイスが好成績を上げた。チームを引っ張ったのはマリー・テレーズ・ナディヒそしてベルンハルト・ルッシーであった。この大会で最も成功した選手はオランダのスピードスケーター、アルト・シェンクで1500m、5000m、10,000mの3つの金メダルを取りこの競技を制した。

身を切るような寒さと雨が交互にやってくる気まぐれな天候のため多くの競技で困難が生じた。しかし日本人の温かい心と笑顔がそうした問題をすぐに忘れさせた。

2.5.6.2. 1972年ミュンヘンオリンピック大会

1966年のローマにおける第65回IOC総会で、1972年オリンピック大会開催に4つの都市が立候補した。デトロイト、マドリッド、モントリオールそしてミュンヘンであった。

第2回目の投票で、ウィリー・ダウメが率いるミュンヘン代表団が喜びの声を上げた。彼らは31票で投票を勝ち取ったのである。

ミュンヘンのオリンピック大会は“短い距離の範囲に収まった大会”そして何よりも“楽しい大会”を目指していた。それは1936年の“ナチの大会”の不愉快な記憶を消す、積極的な印象を作り出すはずであった。

大変な献身と莫大な支出によって、ミュンヘンは分割されたドイツの西側の部分の最高の輝きを世界に示すために、できる限りのことをした。

この大会は“すべての芸術を包括した作品”偉大な文化の祭典となるはずであった。

科学もまた、組織委員会の後援の下に、高度な競技の基本的な問題についての第1回オリンピック科学コンGRESの形で含まれた。

有名な芸術家が参加した芸術競技は、際立った特徴となった。そして建築上の離れ業、オリンピックスタジアムを覆う金属と透明なプラスチックのテント屋根は、幻想的な陽気な印象を造り出した。

しかしこの喜びの祭典は、突如、恐怖と悲しみに突き落とされた。

イスラエルオリンピック選手団の11人の命が、“ブラックセプテンバー”の冷血なテロによって失われたのである。

大会が継続され、オリンピックの理想が一握りのテロリストの犠牲にならなかったのは、去りゆくIOC会長、ブランデーの鉄の決断によるものであった。

ミュンヘン大会のプログラムはかつてない幅広いものであった。122か国の選手が20以上の競技種目で試合した。新種目はカヌースラロームであった。これはアウグスブルクの近くに特別に作られた、真水の水路で行われた。

7つの金メダルを獲得したアメリカの水泳選手、マーク・スピッツはミュンヘン大会で最も成功した選手であった。

フィンランドのノルディックスキー選手、ラッセ・ヴィレンは5000mと10,000mで二つの優勝をはたした。これは100mと200mを制したソビエトのスプリンター、ヴァレリー・ボルゾフの快挙に並ぶものであった。

アメリカとソビエトのバスケットボール試合も、オリンピックの歴史に残るものとなった。ゲームの終了数秒前のきわどいゴールがソビエトに金メダルをもたらし、アメリカの不敗の歴史に終止符が打たれた。

大会のある公式記録者の言葉、“ミュンヘンで祝われたオリンピックで、オリンピック大会は、その組織と、イメージと、芸術と、悲劇において、頂点に達したのである。”